

陽堂文庫

特264

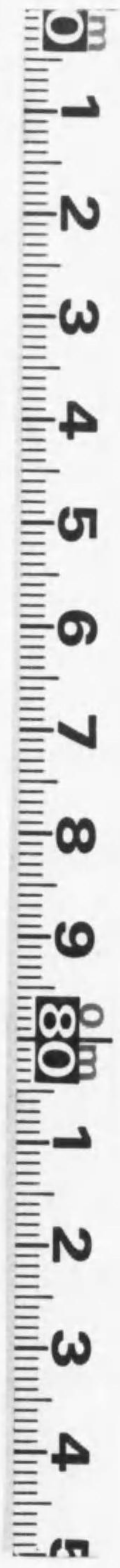
195

110

一葉日記集

下卷

樋口一葉全集第五卷



始



170

符264  
195



春陽堂文庫

—110—

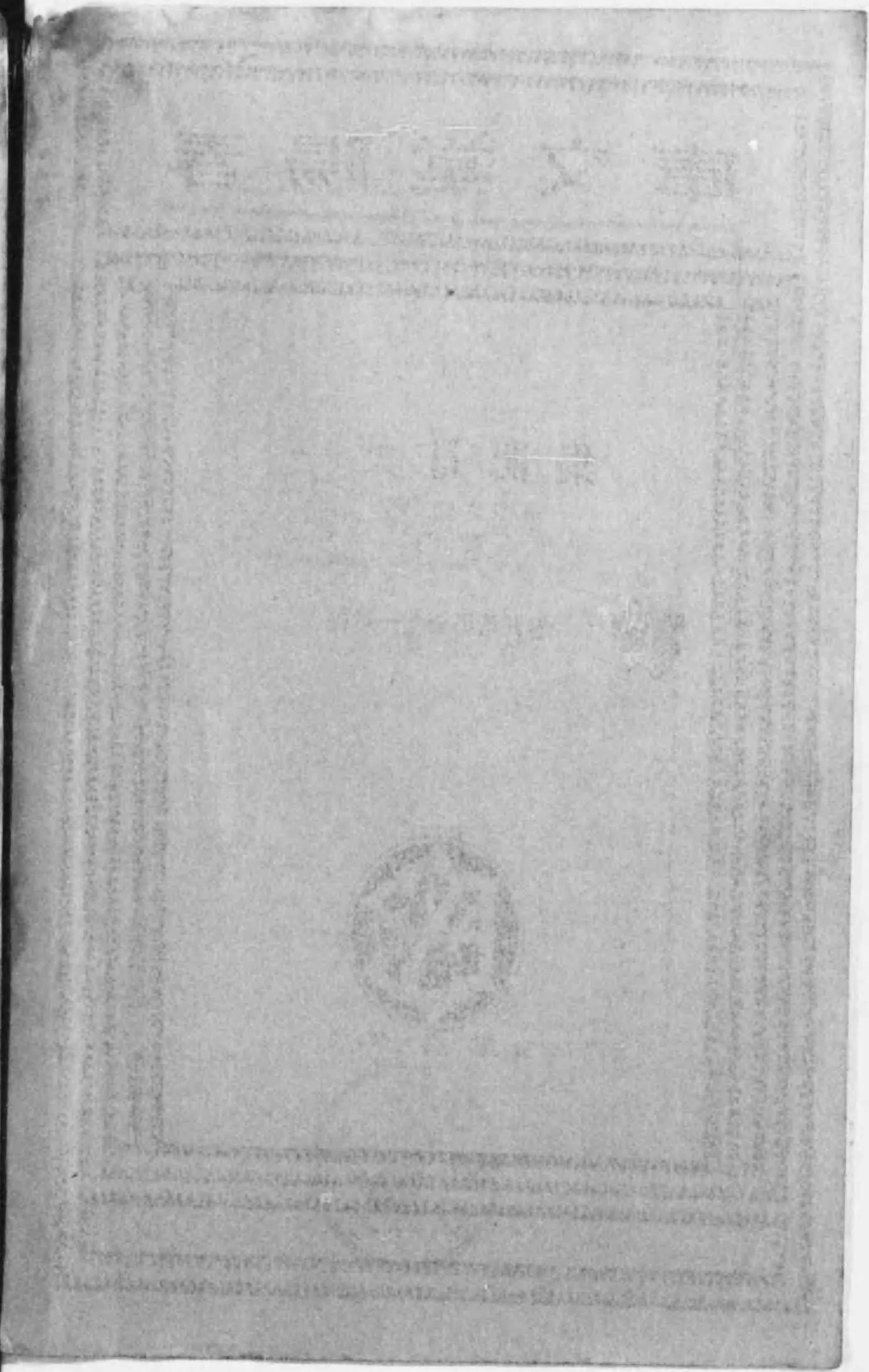
葉日集

卷下

(集全葉一)

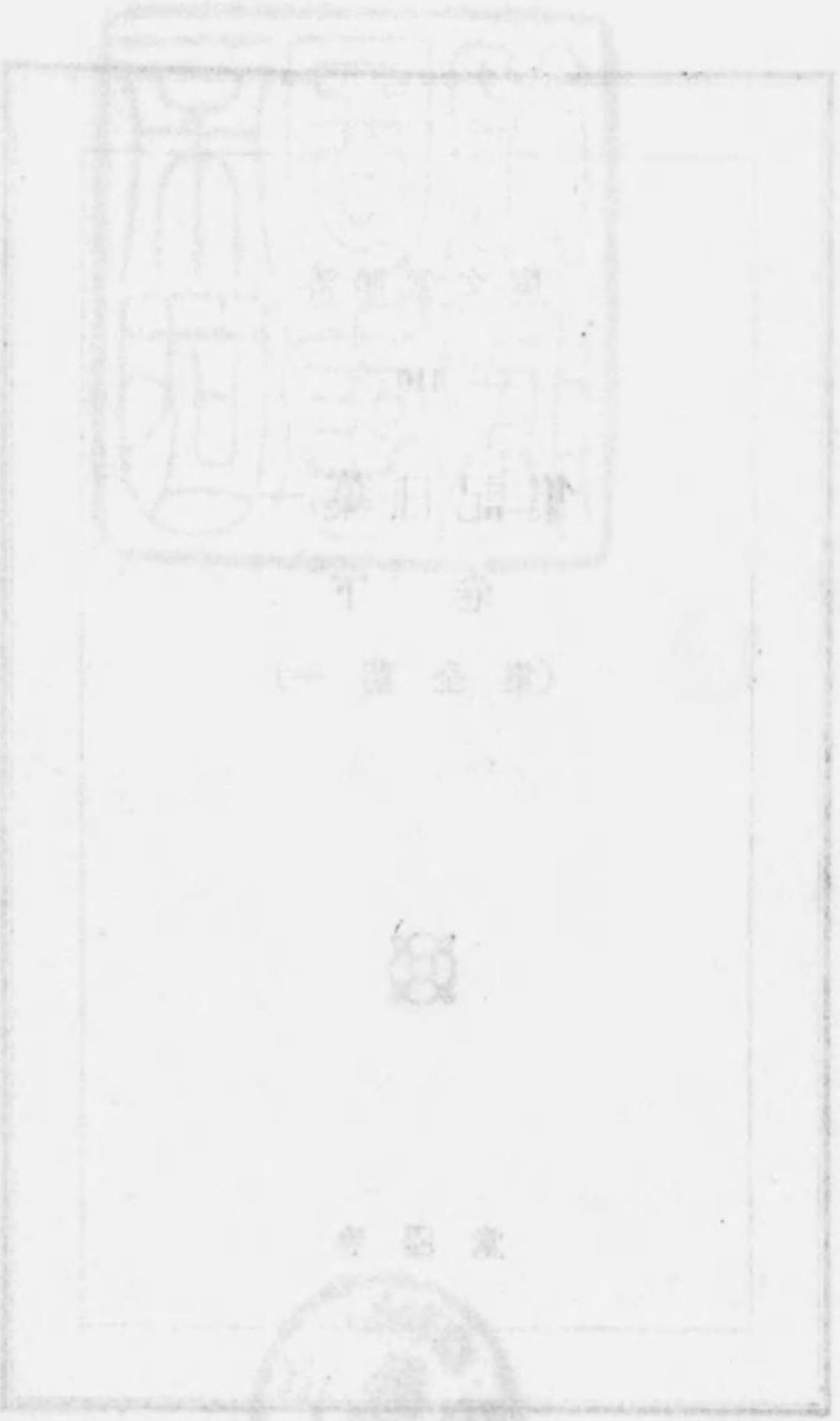


春陽堂



目次

しのぶぐさ	一
蓬生日記	四
につき	二九
塵の中	三七
塵中日記	五四
塵中日記(今是集)	六〇
塵中日記	六八
つゆしづく	八五
日記ちりの中	九〇
いはでもの記	一〇一
塵の中日記	一〇二
塵中につ記	一〇六



水の 上	110
しのぶぐさ	113
水の上日記	111
水の 上	118
水の 上	115
水のうへ日記	114
水のうへ	111
みつの上	119
みづの上	112
みづの上	119
みづの上	110

しのぶぐさ (二十六年四月)

十二日 小石川に師君をとひ、田中君も訪ふ、ものがたり種々、いづれもかしらいたき事なり、三時頃歸宅、雨降り出づ。

十三日 昨夜母君更るまでいさめ給ふ事多し、ふ孝の子に成らじとはつねの願ひながら、折ふし御心にかなひ難きふしの有こそはかなしけれ。

十四日 小説の事につきて藤陰隠士を訪はゞやとせしかど、早朝いと憂はしきことありてものいふほどに時の移りぬれば得行かず、圖書館に行く、上野は今日は花ざかりにて思ひなき人の酔しれたるさまいと興ありげなり、歸路安達君の病ひをとふ、こゝに母君参り合されてひとしく歸る。

十五日 早朝さるがく町に藤陰を訪ふ、都の花明日發行日なるをいまだ製本出来あがらず、これより築地に催促に趣かんとする所なりといふ。十分斗ものがたる、さかの屋の狂氣せしよし世にいふは偽りなること、伊豫の花園女史のこと並に花園女史より長編の小説出版をたのまれたれど取がたくして断りたり、交々かたる、何か歌の入たる小説出来給はゞ得させ給へなどいふ、歸路半井君の消息を聞きたり、打つゞきやむとしもなくなやみ渡り給ひしが、此ほどよりふとうちもゝに出来たる腫物の俄に甚だしく

成て、本郷の親類がり趣き給ひしまゝ立歸ること能はず、かしこにて療治中なりといふ、聞くまゝに胸つとふさがる、去歳の此頃はいみじうなやみ給ひて我日ごとにとひ参らせぬ頃とおもふに引かへ、文をだに参らせがたき今のいかにせば御あたりとひ寄らるべき、中々に知らずばしらず、聞そめぬることくやしうさへ成りぬ、歸宅の後これを母君に語り、いかで一度のとぶらひをゆるし給へとこふに、更に聞き給ふべきにも非らず、さらばせんし文をだにとせちにいへど、いづれも聞き入れ給はず、こは我が上をおぼし給ふによりてながら、身にあやまちすべきわれにもあらぬをなにかうはつらうの給はすらん、かしこにもいかにおぼしなやみてよの中うらめしうみだるゝふし多くおはすらんなど思ひやるまゝに、いと堪がたし、詫てこれを邦子にはかるに、思ひやりなきにしもあらぬ人は諸共に涙さへさしぐみて我が爲かにかくとはかる、わがはらからのあやしうよの中にとりたる宿世にてはかなきことにもの思ふなる、人の上にて見んには如何かたはら痛からぬ、おさなきよりおもふこと人にことにていさゝかも世の中の道といふことふみ違へしよし、人めにはいかに見んとも、我れは空にます神にこそとて、千よろづのこがねにも、しき渡すにしきにも心をかけずして過し來ぬるものか、はかなう世にも人にもうとまれぬべき人の、さりとは知らぬにしもあらぬ猶なんわすれがたき、邦子もおなじことあるまじきおもひにくるしむ成けり、されどもかたみによのつねのいろめかしき方はおもひかけぬ事にてたゞ隔てなき心のかはるまじきを願ひ、かくなやましき事ある折ふしなど心の限りの誠をあらはしてんのねがひぞかし、月花の折々に心をかはし、文にもまのあたりにもをかしき事いひ交しなどの嬉しきにもあ

らずかし、おなじうはもろ共に涙そゝがまほしきを、我とおなじき人しなれば大空のみにわがおもふなるべし、我がかくおもふ心を人はしらず只大方の戀と見てなまおこめかしうもて遊びがほに思ふらんもしらず、そは夫ぞかし、笑はれなんもよし、そしられなんもよし、我が戀の神はさるいさゝかななるまसानごにかゝつらひて圓滿をかくことを惜しみ給へばなり、もとより戀に圓滿なし、圓滿のなきならねども人二人に分ちてはまどかなるべき道理なければ、その人といふ文字は只捨てにすてつ、天地にみちたる戀てふものゝ其かたはしを顯はし初たるはその人をおもふに猶我が恩ある人をおもふに似てそのもとの忘れがたければかくもおもひなやむ成りとは、折ふし定かにさだめたる我が哲理ながら、さし當りては猶よのつねの戀めかしく逢みまほしきなどの時々にしのがたきぞかし、あはれ／＼書きつゞくるとも得やはおもふことの盡くすべきかは、只よにをかしくあやしうのどかにやはらかに悲しくおもしろきものは戀とこそ言はめ。

まちし花も青葉に成ぬるときくに、

人の上もかくこそ有けれ大かたのまつははかなきものとしらなん

みちのくなる友の花の頃久しくおと

せざりければことさらにうらみ聞えんもなめしけれど、

春がすみ立隔てゝもみゆる哉いはての山の花や咲けん

まふ蝶の袖のうかれ給ふはことばりながら、都の花をいかにとだにの給はぬも情なくこそ、

都のはるはいかにとだにの給はせぬもことわりながら、角田飛鳥の花の爲いとくちをしうこそ。

道もせに咲く花のなかばはつちに敷きて、雪の中ゆくなどはかゝるをいふにや、青葉に成ぬる梢、わかやかにもえ出たる小草など景色をかきわたりにうしかふ家のひろやかなるなどもみゆ、田町よりの坂をのぼれば、かの馬琴が八犬傳に丸塚山とかきつる濱路が最期の場所めの前にうかぶ心地して、遠からぬ傳通院の森、小石川の町々只こゝもとにみゆるをかし、おもふことなからましかばいか斗をかしからんと思ふも我が心からのつれなきぞかし、道ゆく人も我が面て守るらん様に覺えて、只相しれる人に逢はじと斗いそぐ、かの家には思ひかけぬ事と只あきれにあきるゝものから、人々うれしげにもてなさるゝこといとうれし、かの人も昨日今日はやゝこゝちよき方にてなど起きかへりつゝかたる、いとこなる人の薬すゝむると枕邊にありしが、さしも久しく音せざり給ひしな、御かはりとも侍らざりしや、つねに御尊なん申暮して一昨日もさなり御うへ申出し候ひしこと、言へば、いと多かる薬を一口のみておうわさはつねに申ことに侍りとして、何となくほゝゑむ、枕邊の机にいと大きな花がめに櫻山吹色色に折まぜてとほき野山をあざりがたき心ゆかしにかくはといふ、誰れも花のさしかた心得るものもな、うらなる園の花を有にまかせて折もて来てかく亂雑なるを笑はせ給へといとこなる人の耻かしげにいふもをかし、さまざまの人の句など様のもの唐紙の長やかなるに書きて其わたりの壁どもみえぬほどに下げたり、かの人はほゝゑみつゝ紙を取出させぬ、硯みづからをしすりていとなめしけれど御舊

詠にまれ何にまれ一二首得させ給へ、使ひにてねがはんの心成しが、すなほに書かせ給ふまじきを知れば心にのみ思ひてとどめつ、今日おもひよらず訪はせ給ひしは我が願ひのとどきしにこそは、いかで書かせ給ひてと、毛せん出させ猶紙きらせなす、晴れがましや家に歸りてこそ、かゝる御紙どもならてつねの半紙などならばとわぶれど聞かるべくも非ず、見参らするまゝに心もすがしく成ぬべくなん、人だすけにこそなどいと多くいひつゞけ給ふ、いとこなる人もせちにこひて、病める人の願ひに侍ればいかで一二首をとといふ、今はしも甲斐なくて、二首斗かく、いとわろき成り、これは反古に給はりて更にあらためてもて参らん、ゆるし給へといへば、さらばこなたより紙を持たせて参らすべし、御引かへの時にはかならず返上なすべきを、それまでは得こそと笑ひて取り給ひつ、あとにて笑はせ給はんといへば、こはけしからず、たれにも見することには侍らず、朝夕にながめて身のたのしみ……

ろんどの女すり

さる老紳士汽車より下りて停車場を出んとする時、一少美人あはたしく來り、我が父上様よくぞ來給ひしとて其くびに抱きつきて口すゝりなしぬ、老紳士は何思ひけん、靜かにそびらに手を廻していだきしめしに、かの女はしば／＼紳士の面を見て、こは何とせんあまりにいとよく似給ひしから、ふと我が父にまがひ参らせたり、ゆるし給へとて振はらはんとす、紳士はこれをしばしもゆるめず、否な我は汝の父なり、おさなき時迷子になし、今も猶尋ぬる我子は汝よ、警官の來らんまでは放さじとて抱きた

り、誠はこの女のすりなること見とめければ成りとか、何時の間にすりけんかの紳士二三品……

蓬生日記

(二十六年五月一六月)

一 束

母君が浅草の開帳に参り給ひしは一日成りき、中廻向にて天童供養などのいとにぎはしき日なればにや、さしもの廣場にきりをたつべきひまもなきて人々居りて、本堂ちかくは老人などの近よるべきにもあらず、しみて参らんとすれば、警官などのおごそかに守りたるが、あやふし怪我もぞするなど制すめり、折角にまうでたるものから、わに口とるにならさて歸り來給へるよし、奥山の興行ものなどいとをかしげなるが多かりしかど、そが中に鹿兒島戦争の生人形みて歸りしとの給へるもをかし、すべていまだ見ぬにぎはしさと語り給ひぬ。

一 小林好愛君本郷區の區會議員に成けるよし。

一 ある夜邦子の物がたりけるは、日々おもふことの同じからずして、一日の中一時の間にもさま／＼のおもひ沸き出でくるがいと侘しければ、いかで此心たゞさばやとて常に居る窓の障子に其時々はりをさしてしるしとしけるに、一間斗のほどは時の間に穴斗に成りぬ、更にさしはじめたるに處もはや残り少なになれり、しりつゝたゞさんとするにすらかくの如し、何事もおもひたどらず無意に此日を送

らばいかにあやまちも多かるべきにか、いとあやふき事といひけり。  
文字こそ人の心をあらはすものなれ、同じ師のもとにおなじき手本をならひたるが中にさてかれこ  
れひとしきは少なかりけり、花圃女史などのほひやかに愛敬ありてしかも老筆めきたる、みる人かた  
には師にもまさりてなどいふめるは、おのづから家の筋を引きたるにて他人の及ぶべきにあらずとい  
へど、猶よくみるにそれさのみにもあらず、猶心よりこそと覺ゆれ、あながち歌にもあらず、洒落に  
もあらず、角ある手に千蔭をいとよくならひ取りたりとは誰れもみるべけれど、その中に一ふし才氣  
のあふれぬることその人の本性みえて、愚直質朴などかけてもおもふべきにはあらず、伊東の夏女も  
手はいとよく習ひ取たりと見ゆれど、猶やは／＼しきかたに寄りて、すなほにうるはしうのみこそあ  
れ、鳥尾の廣子がいとよく花圃女に似たりと見ゆれど、にほひやかなる處ぞかれはまさりたる。天野  
の瀧子が手をばさるかたに人たゞゆるよし、江崎のまき子などのいと達者に書きたる大かたうるはし  
き手の書きならはざるよりは、ふみなどのおもていとよし、香川の政子が手をはやく島田三郎が妻成  
しころさる人みて、なよびやかに花々しとは見ゆれどたてたる節なしやといひしが、人もしか操なき  
ものに成りて、今はさる商家のおもひものに成ぬるよし。

五月三日 曉がたより大雨車軸をながすが如し、起出る頃にはや、小雨に成ぬれど今日は晴ぬべき  
様にもみえず。母君は例の血の道にて臥し給へり、今朝天知子より状来る、文學界五號に少し長きもの  
にてもよく、廿日前までに得させ給へとてなり、都の花の方もいまだ作り終らぬをいかでかとして、來月

ならばと返事出す、今日母君いせ屋がもとに又参り給ふ。芦澤来る。

四日 晴れ。髪を洗ふ。何事なし。夕かけて西村君がもとに金かへしに行く、歸りてみるにお鎖どの  
居られたり、これより西村に金かりに行かんとしてなり。

五日 晴天、風つよし。芦澤来る、ならし野演習の慰勞休暇なるよし、姉君来る、稻葉君禮に参ら  
る、姉君芦澤兩人にて柏もち買ふ、一同にて喰ふ。

六日 いと寒し、薄霜の降たるよし、人々いふ。此日來客いと多し、久保木夫妻、菊地の老人、奥田  
の老人及び西村の親子来る、小宮山庄司突然來たる、おぶんの姿をかくしたる由にて、もし我が家にも  
やと半ばうたがひ半ば訴へんとてなり、母君と一間にしばし語りてかへる、哀れ狂せん斗まどひぬる姿  
はかなしともはかなし、其昔は八字髭にいげん備はりて誰がめにみるとも一かどの人と見えしを、かの  
姦婦ゆゑにこそ家をもうしなひ親をもわすれ、其身はうき世の日かげものに成て今はた口をのりする爲  
にとるべき業なく車を曳き居るよし、お耻かしき事ながらとて語るを聞けば、着たるものとても其ふる  
びたるあわせの外に一枚もあらざるよし、淺ましき肉戀のはてながら、今日この頃のかれが心よ思ひや  
るまゝにいと哀なり、ものがたり猶せまほし氣なりしかど人々居あつまりぬる中にて久しうは聞くべき  
にもあらず、又こよとて母君かへし給ふ、人々も日没少しまへに歸りにき。まことや今日は前田家の園  
遊會なりけり、皇族大臣をはじめ貴族院議員外國公使など數の人來會するもの千人と聞えぬ。

七日 晴天。秀太郎来る。今日も又來客多し、山下直一及芦澤来る、芦澤は同僚をつれ来る、三人に



一 一ひるめし出す、一同日没少し前まで遊ぶ。此夜母君と共に右京山に烟火見る、九段の祭にてこゝよりよく見ゆればなり。

八日 晴天。小宮山にふみを出す、返事直に來たる、いまだ文のありかしれざるよし。

九日

十日 晴れ。夜に入てより、荻野君を訪ふ、信濃怪事。

十一日 晴れ。今朝より國會新聞取る、諸縣霜害のおびたゞしくして、桑、茶などは更なり、もろもろの苗のかれたる多きよし、群馬、埼玉の縣などには蠶をかふべきすべくして、山川などにすてぬるも多かり、茶はすべて黒色にかはりて、中には幹まで枯れぬるもありとぞいふなる。

十二日 夜に入てより小宮山來る、淺ましき物がたり多し、夜明がたに歸宅す。

十三日 山梨に文を出す、小宮山の事につきて也。

十四日

十五日 母君誕生日に付芝の兄君及び久保木の姉君をも呼ぶ、こゝろうき人々なれども同じはらからと聞ゆるものを道を道にたてようとして成なんも母君の爲いと情なううらめしかるべき事とてかくは呼べる也、兄君より土産もらふ、姉君及び秀太郎も來る、折よく上野の伯父君參られしかばこれにも酒を出しなす、日没少し前まで遊びて歸らる、兄君もおなじく。

十六日

雨

十七日 晴れ。西村君來訪。

十八日 雨

十九日 晴れ。母君花川戸の小宮山がもとを訪ふ、午前八時より出て午後四時ごろ歸宅、種々になだめさとして正道に歸せしめんとすれど徳にしたがふべくも見えずとて母君いたくなげき給ふ、人の上ながらいと佗し、此夜新聞號外來る、福島縣吾妻山大破裂と聞えし、今日より四疊半の座敷にうつる。

戀は尊とくあさましく無ざんなるものなり、つれづれの法師が發心のもととも文覺上人が悟道のしをりも是れに導かれて聞き渡るこそ尊けれ、花の散る所月のかくるゝところいづことしてか戀なからむ、あさましき肉戀を唯一の命として臭骸しほしも相いだかざればわが戀またく終りぬとなげき、うき世の望み絶えはてぬと佗ぶらむよ、されど夫はまだよし、その唯一の命とする戀の本尊を惡魔と知り外道としり夜叉としり、これが爲に我が命正に終らむとするを空に知りつゝも猶いさぎよく立はなれかねて、親をもわすれ子をもわすれはかなき思ひを胸にだきつゝ、終にはいかさまにならむとすらむ、戀は心にありて人にあらず、抱かんとすれば月もいなくべし花もいなくべし、厭ふとならば何か又するに難きものやある、かゞみに物のうつるはもの來たりて後うつるか、鏡あればこそ先うつるか、もとのかたちを極めに末おのづから明かなるべし、されども無窮の月花は彼の靈山のいたゞきにある、分けのぼる道はよしかはるとも終には我も人もひとしかるべし、色に迷ふ人は迷へ、情に狂ふ人は狂へ、現世にて一步天にちかづくとおのづからの天機にいざなはるゝ也、是非一道善惡不二。

廿日 晴れ。朝鮮防毅事件故なく落着したるよし其筋に電報達したるよし、或はいふ十七日の終局談判を十九日まで延期せしなりとも。

山梨縣に十五萬圓雨ふる。

吾妻山破裂調査として技師派遣、吾妻山は熊梯山の北五六里の處なりといふ。

東京に狂水病おこらんとす。

廿一日 雨降る。日曜なれば芦澤來る、姉君も來訪されしが少時に歸宅、西村君來る、きのふ母君金かりに參られしに折ふし來客中にても言はず歸られしかばいふかりて來たりしなり、壹圓かりる、直に菊池君に持參、かへすべき筈のものありしかばなり。此夜小宮山庄司來る、おぶん歸京の路用として金一圓五十錢爲替にさし出したれど猶何の返事もなし、此上は伴嘉一郎を迎として山梨に送らんといふ、嘉一郎は漸くかぞへの十三歳にて十歳何ヶ月の小兒なり、是れをしも唯一人手ばなし三十里の行程ことに知る人もあらぬ處へやりなるとする小宮山の心はすべてこれ惡魔の處爲なり、滿身の血も彼の毒婦の上に斗そゞぎて母をも子をもかへりみるに處なき也、過る夜の物がたりの時は一家三人共に袂をしぼりて哀れ此人をすくはゞや、ともかくもして眞の道にいざなひ、眞の人にせばやと力を盡したるものから、やう／＼言の葉のもと末を取り今日までの來歴を問ひ定めなどするまゝに、淺ましき肉戀のはてのみにあらず、人となりの正しからざることもほの／＼知らるゝに、今はこれまでなり、天は罪なき人を罪し給はず、毒を以て毒を制するとかや、古來いひ傳ふる事なり、双に血ぬらむもそれまでよ、あ

たら命うしなはむも定業よ、何かは我等があやまちなるべき、我等は我等のつとめを盡したり、成りぬべき人ならば正に道に歸すべし、言の用ひられざるは天のかくせしめ給ふなるべし、止なんかなと思辨して、我は一語をも出さず、歸宅せしは十時過る頃成けり。これより頭痛はなはだしく終夜くるしみて胸間もゆるが如く、人世の浮沈人情の非薄懐こも／＼感じ來りて、くるほしき事いふべくも非らず。

廿二日 曇。九時ごろまでふしどにあり、母君もおなじく血の道にてやまし、今日一日は何事もなく暮したり。夕方より雨ふる。

廿三日 も雨也。母君血の道なほよろしからず、今日より日課をさだむ、此夜小宮山より郵書來る、いよ／＼甲府に出立の心なるよし、今は又何をかいはん。十一時過る頃新聞號外來る。郡司大尉の一行暴風雨にあひ行方しれずとあり、又一報に大尉の行方はしれたり、委細はあとよりとありけり。

廿四日 雨。母君猶よからず、山梨縣廣瀬よりもろこしの粉郵送、これをもちに製して一同くふ、かしこにては日々の食のかてとして食するよし、我等いかにしても食し難し。此夕べ號外來る、北航端艇の中三番艇の行衛しれざりしもの青森縣上北郡宇砂ヶ森にたゞよひつきけるが、其乗組員一人もみえざるよし。

廿五日 晴れ。早朝西村君參らる、一同にて茶をのみなどす、雑談種々、はやうより我家と縁をくまんことを願ひてさま／＼かこちける事もあり、我邦子を得まほしきよしは母もいひ、みづからもうちつけに此二月斗前にいひ出でけるを、思ふ事ことなりて斷わりぬるより、いかゞおもひ取たるにか打たえ

てかつふつに音せず成ぬ。此人一人を厭ひぬるならばこそあらめ、天地の間乾坤のうち形の夫はもうけ  
じとさだめけるをや、何故にうらむらむ、あな心みじかや、相しり初てより今歳十三年、うらなく交り  
ぬる中にあやしき波風をたゝせなむこと、かつはかあ人みづからの心がらなうらましく、これよ  
りはありしにかはらず行かひしけるが、やうく心なほり氣げんあらたまりけん、此一兩度うちつゞけ  
てあしちかく通ひくる様に成ぬ、うきよにかたきを持たんことくるしきにかゝるささやかなる事なり  
ともいとうれし、西村君のものがたりの中に桃水うしが小説をほめられたる見るめなき人かなとをもへ  
どもにくからずかし。

今日の新聞廣告に同樂叢談とかや小説雜誌発行の廣告あり、正直正太夫、柳塙亭寅彦、果園主人など  
の顔なり、ありし武藏野におもかげ似たりとみるにも哀れむらさきの一もといかにやとおもひやらる。  
邦子今日より手内職をやめになす、日暮てより道太郎兄君の使ひに来る。

此夜はやくふしたれどおもふことありてねむり難かり。

雨ははれたり、軒ばのわか葉みどりすゞしく、

人はまつによしなし閑窓の中、

たゞ苗うりの聲ひなびくるをきゝて、

更によみつゞく唐詩選。

廿六日 雨。いと早く起出ぬ。漂流端艇乗組人行衛しれけるよし、電文簡単にて事實しれがたし。今

日も何事もなく一日をおくる。夜ははやくねたり。

廿七日 起出でみるに又雨也、しばしにて晴れにけれど夕立などの様に時々降りくる、かみさへおど  
ろおどろしくなり渡る。午後廣瀬七重郎控訴事件期日経過したるかどを以て棄却の判決下る、直に郵送  
したり。

同樂叢談批評出たり、二號には桃水、友彦などの作も出るよし、すべてありし武さし野にかはらず、  
岡田凌波、三品りん溪もあり、故郷人の會合をよそに聞くが如く今昔のおもひたえがたし。今日は甲子  
也、夕刻より邦子と共に小石川大黒天参りなす。

北航端艇三番艇乗組人行衛しれける様に聞しが、今日の報に寄れば死骸いまだ分らずとあり、何れが  
是なるべきにや。

朝鮮東學黨ます、勢力を加へけるよし、露國人の加はり居るやに風説すれば、同國政府の恐こう少  
なからぬよしに聞く。

童うたといふものゝことぞともなきものながら世につれてこそうたひ出らめ、いにしへのひぢりの微  
服して市街に遊び給ひしもこれが爲也、今のよの童どもよ、聞くに得たえぬ歌ども花やかにうたひて  
二人三人よたりいつたり大路をねり行くさまも何の兆なるらむ、すでによの中くされたりや將にこれ  
より亂れんとするや、朝にたち給ふ人のこゝろせさせ給ふべき事成かし。

稀有の日本人稻田眞之助あらはる。

故郷は忘じ難しはた忘すべからざるもの也、されど故郷なつかしとてひたすらに心引かれてのみあらば都會に出て、志ざす大事業のなるべきものかは、逢はてやみにし其人の上はたとふるに戀の故郷ぞかし、これをかけはしにして月を尋ね、花を尋ね、かすみを哀れみ、霧をうれひ、人世を知り、天地をしり、古來今に渡りて宇宙の美をもとめんとす、何ものゝさまたげぞ夢にもうつゝにも立はなるゝによしなく、彼のさゝやかなる天地より見ばほとんど芥子の實のこぼれたらむ様なる一現象に満身をつくして、人しれず泣きみ笑ひみ、心月に成らんとする時花にならんとする時又立かへりてはなごりををしむらんよ、などひたすらに忘れん事かは、故さとは我が故さと也、軒ばあれぬとも人の心あらたまりぬとも昔しをしのぶに難かるべきかは、只一あしごと志ざす方へ進まんこそよけれ、一あしはすゝまんことをねがひ一あしは歸らん事をおもふ我心そも何ものぞ、憂ひ來たりては彼の人をおもひ、力よはくしては彼の人をおもふ、よし今は更に人ともいはじ、清らけき眼ともいはじ匂ひやかなる口ともいはじ、何と得しれぬ一物の唯其人の名のりするものゝひし／＼と身にせまりくるこそ悲しけれ、ふる郷のごと忘るまじきはかへす／＼知りつゝ、さりながら其故郷のわすられなむ事をなく鹿の起ふし願はるゝかし、あやし我こゝろは二つあるか、かたへより見れば淺ましくもをしくかへりてはおろかにいやしくさへおぼゆるを、今一方にてはよし此身あればこそかゝる物思ひもするなれ淵にも入らなん海にもしづまん、すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きもおもはじなど様にさへ思はるゝよ、あはれ迷ひはいつの日にか晴れん、まことの美をばいつの日にか見む。

廿七日 雨。

廿八日 號外にて報を得たり、北航艦隊鼎浦丸又々難破、八の戸鮫浦宇大久喜に漂着、のりくみ一人人もみえざるよし、恐らくは三番艇と其終りを同じうせしものならむとあり、かなしむべき哉。

廿九日 曇天。窮甚し。金子かりに伊東夏子君を訪ふ、こゝろよく八圓かされたり、午後まで物がたる、宗教のこと哲理のこと中々につき難し、言ふ事／＼に反對ながら諸共に心胸かくす處なきぞ樂しき、邦子此日吉田君を訪ふ、野々宮君の事、喜多川君の事、奇談紛々、醜聞並び聞ゆ、此ごろ傳ふる處みるところ清くいさぎよき事ども少なくて、かくあさましき事多かるはよの中をしなべてにされるに由るか、されどもかたへをみれば伊東夏子ぬし、平田禿木君などしまだ若く世故になれざる人の心よ、神をしたひ神を敬まひ、道義の光を起さんとする人々も見ゆるを、あながちによの中にこれりとも定めがたし、思ふに一葉生じて一葉落つるは天地の理なり、正に大いに大宗教おこり、大教理おこなはれんとする兆としてかくはかくまでみだれ行にや、十九世紀の孔夫子及び釋尊いづこにか睡れる、天下は來らむとするものを先むかふるなるべし、詩歌文學の漸々下り坂に見ゆるはこも又大詩人、大歌人のねむりをさますものにあらずや、樂しいかなや、事をなすべき人の舞臺は今めの前にせまりぬるぞかし。

此夜凶報又到る、郡司大尉さめ浦に於自殺をなすと、又一報には變死なり、現場に判檢事出張すとあり。

されど我國新聞の報に寄れば、大尉は自さつせしに非ず、過失にて負傷したる也、きず又少なしと報ず。

卅日 雨。大尉の事をおもふに早朝心なやまし、我が新聞の報ずる處に寄れば破そん船體燒却の際右眼をやけどなしたる也といふ。

卅一日 雨。めづらしく空晴れたり。郡司大尉變死一條の誠に針少棒大の偽りにて、小負傷をなしたるのみ、五日を経ば全治すべしと聞く。

姉君より兄君うけとるべき筈の金子遣はさる、夜に通運にてさし出したり。

芦澤來る、金子壹圓あづかる、もとよりのと合せて二圓九十錢也。

今日も空さわきて一二度急雨來る、夕刻より又晴れ。山梨縣伊庭准次よりはがき來る、雜誌購求を依頼して也。

六月一日 晴れ。中島いく子君一年祭のむしもの到來、明日は祭典なればとて招かる、おこうさま參らる、古ゆかたを呈す、久保木姉君來訪、平田禿木君より書あり、文學界の事につきて也、此夜入浴おそく寝たり。此日土方邸行幸。

二日 曇天。午後より中島君に行く、雨に成ぬ、會する人二人にて誠に内輪なる會合成も、夜に入りより歸宅。伊東君よりよみ賣新聞かり來たりしまゝ十二時ごろまでこれをよむ。

此日土方邸行啓。

三日 雨。めづらしく晴れたり。北航遠征記を見る、そう難てん末の委しきを見るにも一讀三歎などかゝるをいふにや、大尉が心中おもひやるだにいたまし。

四日 晴れ。小石川稽古におもむく、午後より番町に三宅君を訪ふ、一月以來はじめて訪ひしなり、ひたすら家事に身を委ねて世上の事文事の事何にも耳に入らずとて極めて冷やかに成給へり、少時にて歸宅。

歸宅。

五日 雨。山梨縣廣瀬來りて一泊。

六日 晴れ。稻葉小君來訪。菊池隱居來訪、兵隊來る、一日ごた／＼に終りたり。

七日 晴れ。いなば君來訪、西村君來る、藤田東湖、龜田鵬齋の書人よりたのまれて賣却せんとするを中島先生などの中にしかるべきかひ手あらずやとて也。

片々

南洋諸島の中それがし島の王弟サミ氏來朝、こゝかしこにてもてなす、やかましきものは辯護士會長選舉のさわぎ、角石事件、花房君マーエツト氏侮辱事件、市ノ川鑛山事件、いさましきものは福島中佐遠征終りて近々に歸朝さるゝと聞く。

あはれなるものは

郡司大尉の一行、それも軍艦磐城に曳かれて五日には箱館に入りぬるよし。

隣りづから騒がしきは、

朝鮮東學黨、しづまりては又もえあがるよ。

八日 晴れ。寺島宮中顧問官薨去の報あり、夕刻より江戸川あたり散歩、田中君に手持参、此夜號

外來る、吾妻山第三回の破裂に調査技師三浦宗三郎同福西山西總吉死去とあり、いたましき哉。

九日 曇天。

十日 雨也。

三浦宗三郎、西山總吉兩氏とも内室懷妊中なるよしかさねていたまし。

此ごろの大とりもの、

河内國七人斬兇手は二人にて金剛山にたて籠りつゝ、警察十津川管下の警察官を盡くしてもとむること二十日、とらゆること能はずして終に自殺す。

片々

郡司大尉の一行ボート行を中止して汽船にのりゆくよし。

何故にまつらむとも覺えず、又まぢぬべきあてのあるにもあらず、聞て嬉しきたよりか聞かずしてかへりて幸ふくなるか、何方にもくおもひたどられず、門をはしる郵便脚夫の哀れ我家に寄れかし、かの人のたよりなれかし、一人は空しくすぎぬとも此つぐなるこそはとまどに寄りてしばくまつ、はかなく過ぬるもにくゝとなりに入ぬるもにくし、門札しばくながめてあらずとて行過たるいよゝくに

戀はこゝろにあつく身にはいとふ、

わすれぐさつまんとぞおもふすみよしのまつかひあらぬものならなくに

沖津波きしよる邊とねがはぬをくだくるものはこゝろ成けり

もろともにしなばしなんといのるかなあらむかぎりは戀しきものを

久かたのあめにまじりて我おらむみえぬかたちは人もいとほし

さるもの日々とうとしと人ごとにいへば、

しげりあふまどのわかたけ日にそへてうとしやなにのこと葉なるらむ

雨ふる日其人の著書をみる、

かきくらしふるは涙かさみだれの空もはれせずものをこそおもへ

見るもうし見ざるもつらし、

くりかへしみるに心はなぐさまでかなしきものをみづくきのあと

十一日 晴れ。午後より芦澤來る、少し雨ふる、今日は入梅なり。

片々

ひうちなだ事件やおさまる。

記日生蓬  
十二日 雨。寺島宗則君葬式と聞く、道路くるしかるべし、寺は海あん寺なりとか聞けり、今日はめづらしく老鸞の麗絶えず聞ゆ、郭公にあらそふらんをか、早朝星野君よりはがき來る、文學界にの

一すべき著作をうながして也、断りのはがき出す。

十三日

十四日 大石公使歸朝、新橋停車場出迎人の喝采萬雷くづるゝ如し。

十五日 雨。芝兄君来る。

十六日 雨。

十七日、曇。

十八日 狭客駿河の次郎長死亡、本日葬儀、會するもの千餘名、上武甲の三洲より博徒の頭だちたる

もの會する五百名と聞えたり。

十九日 晴れ。日没後國子とまりし天參りなす。

廿日 晴天。

廿一日 曇。山梨より芳太郎衣類着。

著作まだならずして此月も一錢入金のめあてなし。

廿二日 晴れ。今日は國子誕生日なれども祝ひのばして廿五日になさんと云ふ、此夜母君と共に近傍散歩、小石川に中島師君機嫌をきく、風邪也とて打ふし居られけるが物がたること多かり、みの子ぬしの品行日ましにみだれゆく抔覺ゆるはなどものがたたる、夏子ぬしの敬神の念いやますはよけれど、ただかたまりにかたまりてあのみならんには終に如何ならむとすらんなどかたたる、夏子ぬしの事はお

きてみの子ぬしのさるすきがましきは如何にぞや、いとうたてくも有哉、内々のことはとまれよそよりみんなは御門下の名のけづらるべきにあらず、我不學のよくしることならねど今のよの文墨にたづさわ人にして女子のしかるべき人ふつになしとぞいふめる、いかで御門下出身の人にして少し世にも聞え、よし學はとまれ、道徳たかゝらむ人をこそ出さまほしけれ、田中ぬしの不徳は今日にはじまりしにもあらざめれどいかでをしへさとし給ひて誠の道にみちびかせ給はらずやなど語るに、師はたゞ打なげきて、いなあたわじ、もとよりみの子の事はいふべきにもあらず、こは秘密のことなれど鳥尾廣子ぬしの少し此頃歌の口ほどけたるより世にあらはれん事をせちに願ふなることも又虚飾にて、誠のみちにこゝろざす人には非らず、夏子ぬしなどこそと思へどこれはた富家の處女いたづらに時世にも遊ばれてたたる心なしかしなど、たゞ門下の人をあしざまにのみ給ふめる、師は親なりおもふ事おはさばなだかの給ふにかたかるべき、おもてにはうつくしく時にしたがひたる事をのみ仰せて、さてかく右とひだり左と右おなじ友のたれかれの間には批判を加へてさみし給ふぞわりなき、我が事なども斯くこそ給ふめれ、いざや何事もよしむかしはか様のことをいといたくみて友のうちにもさる人あらばまじらはじなどさへに思ひたりき、今はおもへば人は我をけがすものならず、かゝる人ありてかゝる事をいふ成けり、しらずしてまどはされなんはわろし、知りての後に何事のあやふき事かはあると定めて、ただ大方の物がたりしてかへる、師君財政のいと困難なるよし物がたられし也、我がよもさる事は侍らじ、口に山海のちん味を味はひ、身には綾羅をかざり給ふとも、たゞいさゝかなる身一つなるをといひ

しに、否な我が上には何ほどの事かあらむ、兄の必死と困難の折に落入て此春よりこれをすくはんが爲にいくばくの苦勞をかなしにけん、されどもいさゝかのしるしも見えず、いまだに何事のもとも立たずなどものがたたる、何ぞや事を兄君に歸して自家不徳の資に供し給ふらむ、きくまゝに心地わろしとおもふも猶一を知りて十に及ばざる心からなめり。

廿三日、はれ也。芦澤明日よりかまくら地方行軍なるを、用なく休日なればとて来る、今日も何事なしに終る。日没少し前母君と共に右京山に花を尋ぬ。今宵より蚊帳つり初けり、はやく寐たり。

廿四日 晴れ。

さかりなるものは、

福島中佐歡迎沙汰、三浦西山が遺族扶助の義捐、いづれもくしかるべき事にていと嬉しきものから、何事も名のみ尊とぶ頃にて。

あはれなるもの、

郡司大尉一行のゑとろふにつきたりと聞くにむねしづまる心地しながら、此後の事如何なさんとすらむ、先に移りたる人々の食にもしくて死したるもありとか聞くを其たくわへなども多からずして出立ちにし人々よあはれこゝにも眼をはなつ人あれかし、北海道の紳士の遊び處にあらず、此人々ぞまこと身をすて、邦に盡さんとする人々ぞかし。

廿五日 晴れ、午後夕立来る。行水後國子と共に天王寺に中島老君寺参りす、夫より根岸に下りて御

行の松一覽、そのわたりの田、早苗いまを盛にとるなる、日暮るゝもしらず見るをか、國子の蓮の葉と芋の葉と取違へたるをかしかりき、歸路坂本の通りに出で五條天神の祭りみて池のはたより歸る、時しも夕ぐれにて歌ひめどもの行かふみるをか、馬見場にて福島中佐が歡迎場もうくるとてかどりたきつゝ工事いそぐもにぎはし、家ちかくなるほど又々雨こぼれ來ぬ、されどやがて晴れにけり、一人燈下に更るまで書見をなす。

廿六日 晴れ。

廿七日 晴れ。金策におもむく……………

此よ小柳町失火、山下兄弟來る。

廿八日 山下次郎來る。

廿九日 晴れ、薄曇也。福島中佐歸京に付歡迎もやうしのおびたゞしからむをおもひ、母君にも見せ参らせ度もろ共に正午より上野に行、此ほどの事かきつゞくべきに非ず、三時頃歸宅、上野伯父上及び清次君來る、上野行かへりなるよし、我れは直に一昨日たのみたる金の成否いかを聞きにゆく、出來がたし……………

伊東君より歸りくる、日没後なりし。此夜一同熟議實業につかん事に決す、かねてよりおもはざりし事にもあらず、いはゞ思ふ處なれども母君などのたゞ歎きになげきて汝が志よわく立てたる心なきからかく成行ぬる事とせめ給ふ、家財をうりたりとて實業につきたりとしてこれに依りて我が心のうつろひ



ぬるものならねど、老たる人などはたゞものゝ表のみを見てやがてよしあしを定め給ふめり、世渡りのむづかしきはこれをとるもかれを取るもおなじかるべし、これより行路難いかにぞや、されども我らはらからはうきよのほめそしりをかへり見るものならず、唯おのれのよしとみて進む處にすゝまんのみ、霜ばしらくづれなば又立なほさんのみ。

卅日 早朝母君かち町に金とりに行く。

芳太郎のあづかり金二圓四拾錢になる。

みゝづは鹽氣を厭ふと見えたり、海邊ちかき處などはさら也、深川たて川通りなどに至ればいかなる濕地とてもみゝづを得る事なし。

につ記

(二十六年七月)

人つねの産なければ常のこゝろなし、手をふところにして月花にあくがれぬとも鹽噌なくして天壽を終らるべきものならず、かつや文學は糊口の爲になすべき物ならず、おもひの馳するまゝこゝろの趣くまゝにこそ筆は取らぬ、いでや是れより糊口の文學の道をかへてうきよを十露盤の玉の汗に商ひといふ事はじめばや、もとより櫻かざしてあそびたる大宮人のまとゐなどは昨日のはるの夢とわすれて、志賀の都のふりにしことを言はず、さゞなみならぬ波鏡小鏡匣か毛なる利はもとめんとす、さればとて三井三びしが豪奢も願はず、さして浮上にすねものゝ名を取らんとにも非らず、母子草のはゝと子と三人の口をぬらせば事なし、ひまあらば月もみん花もみん、興來らば歌もよまん文もつくらむ、小説もあらはさん、唯讀者の好みにしたがひて此度は心中ものを作り給はれ、歌よむ人の優美なるがよし、涙に過たるは人よるこぼす、纖巧なるは今はやらず、幽玄なるは世にわからず、歴史のあるものがよし、政治の肩書あるがよし、探てい小説すこぶるよし、此中にてなどゝ欲氣なき本屋の作者にせまるよし身にまだつ覚え少なければどうるさゝはこれにとどめをさすべし、さる範圍の外にのがれてせめては文學の上だけに記も義務少なき身とならばやとてなむ、されども生れ出て二十年あまり向ふ三軒兩どりのつき合いな

一 からはず、湯屋に小桶の御あいさつも大方はしらず顔してすましける身の、お暑うお寒う、負けひけのか  
全 集 け引、間屋のかひ出し、かい人の氣うけ、おもへばむつかしき物也けり、ましてやもとては縊しんとい  
と細くなるからなんとなうしばしるの葉のこまつた事也、されどうき世はたなのだるま様、ねるもおき  
るも我が手にはあらず、造化の伯父様どうなとし給へとして、

とにかくにこえるをみまし空せみのよわたる橋や夢のうきはし

七月一日 晴れ。母君かお町より金十五圓受とりきたる。芦澤かまくらより歸京なしたりとて來たり  
しかば商業はじむべきものがたりして山梨より金五拾圓かりくる、様頼む、速座に手紙をかく、小づか  
ひ二十錢渡す、残り二圓二十錢也、此よ小石川より神田邊散歩。

28 二日 晴れ。早朝芦澤來る、母君山下君のもとに本をかへし、次郎君就職の結果を聞き來る、華族  
銀行の試けん及第なして百人ばかりの中より七人役につく様に成りけるよし、母君歸り後次郎君も來  
る、門にてかへる、我が近邊に華族銀行員のあるを訪はんとてなめり、午後野々宮君より書狀來る、當  
月末には歸京なすよし、此度はもはや辭職の決心と見えたり、其わけ／＼ひそかに聞わたるこそをか  
けれ、芳太郎日没ちかく歸らむとする折から思ひ寄らず我が門とふ人あり、母のしば／＼見て猪三郎な  
らずやといふ、打笑みつゝつと入る、芳太郎が腹がはりの兄にて十年半前我が家にかゝり居し人也、他  
郷にありて故郷人に逢ひぬるばかり嬉しきものなしか聞けるを、まして是れははらから也、うれしさ  
いか斗かとおもふに、事のおもひがけぬに胸をやうたれけんとかくの詞もなく顔のみ赤らめ居るもをか

29 し、直に芳太郎歸營、猪三郎は東京に商業の目的を立て、移住せんが爲也といふ、此夜ふくるまで物が  
たりす。

三日 晴れ。母君同道にて猪三郎家さかしに行く、淺草田原町、七軒町二ヶ處に氣に入しがあるよ  
し、夕がたより又ゆく、差配人不在にてまともならず、又明日行んといふ、暑は昨日九十六度、今日は九  
十五度なり、日中のあつさはいふべきにもあらず、此夜お鑛どの參らる、十一時頃まで話す、芳太郎に  
小づかひ又三十錢渡したり。

四日 薄曇。猪三郎早朝より淺草に行く、母君小林君に金子の相談に參り給ふ、あきなひを始めんと  
いふにいさゝか也とももとてなくては叶はず、せめては五拾兩ほどかり來んとてなり、されどももとよ  
りの借もあり只にてはとて家に藏したる書畫類十幅斗をあづけんとなす、父君愛し給ひしものながらこれ  
をうらんとなさば二十金の直打もあらじ、何か外に添ゆるものあらばなど母君も妹もいふ、何かこれ  
があたいにとて乞ふには非らず、我れに信用あらば白紙一枚百金にもあがなはるべし、なくば一毛も六  
づかしかるべし、遺愛の甘棠さるなかれとさへいふを時のやみがたければこそ手ばなさんともいふな  
れ、みるめがらにては不孝の人にもならん、先づはおのづからに任せ給ひて我がこゝろのまゝを取つぎ  
にて始終の物がたりせさへ給いて、其上にかり出すことの出來がたければ夫までぞかして、母君に其品  
つがきを參らす、正午少し前歸宅かしこにもいとこんぎつなる事ありて成否まだ知れがたし、されどもい  
記 さゝかの綱が有りといふなり、夫より淺草に猪三郎のもとを母君問ひ給ふ、田原町に家を持つ事に定め

一 たらば也、此夜國子と共に近邊散歩、歸後夕立來る。

五日 薄くもりめづらかに涼し、奈良わたりのひてりにて水論しきりに起り、雨乞などの風説聞くさへ哀也。

四五日此方、横濱銀貨相場おびたゞしき亂高下にて中には店をとちたるも有よし、獨り奇利をたくましくなしたるは正金銀行なりとか聞こえし、小林君より返書來る、金子調達なりがたし。此ごろかしましきもの、

教育宗教衝突事件、新聞に雜誌に議論かなへの沸く様也。

にくきものは、

密りよう船のはびこり、伊豆七島などにも出沒するよ。

公使二人の上、

大鳥と大石といかならんとすらん、支那も朝鮮もかゝはる處ちかければ。千島かんもまだ裁判終らざるこそ心もとなけれ、反訴とかやにくき事をぞいふめる、わが判官へんごしらに明らけくさとき人ありてときふせたらむにはいかに嬉しかるべきにや。

執達吏こそにくき役なれ、名のみ聞けば其人さへおにくしく情なからむとおもふに、又相しりたる人などのそれに成りてさしもにくげなくなどさへあるはをかしまや。

戀は、

見ても聞きてもふと思ひ初ぬるはじめいと淺し、  
いはておもふいと淺し、

これよりもおもひかれよりもおもはれぬるいと淺し、

これを大方の上には戀の成就とやいふらん、逢そめてうたがふいと淺し、  
わすられてうらむいと淺し、

逢はんことは願はねど相おもはん事を願ふいと淺し、

相おもはんも願はず、言出んも願はず、一人こゝろにこめて一人たのしむいと淺し、

名取川瀬々のうもれ木あらはればと人の爲我がためををしむらんたくひ、うきに過たる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものから身は引はなれてことさまに成行、さてはみさほを守りて百年いたづらぶしのたくひ、いづれか哀れならざるべき、されどもこれらは戀に酔ひ戀に狂ひ、此戀の夢さめざらん中々此夢の中に死なんとぞ願ふめる、おもへばいと淺き事也、されども浦山しきは此さかひ成るべし、まこと入立ぬる戀の奥に何物かあるべき、もしありといはゞみぐるしくにくく、うく、つらく、淺ましく、かなしく、さびしく、恨めしく、取つめていはんには厭はしきものよりほかあらんとも覺えず、あはれ其厭ふ戀こそ戀の奥成けれ、厭はじとて捨られなば厭ふにならず、いとふ心のふかきほど戀しさも又ふかゝるべし、いまだ戀といふ名の残りぬる戀は淺し、人をも忘れ我をもわすれ、うさも戀しさもわすれぬる後に猶何物ともしれず残りたるこそ此世のほかの此世成らめ、かゝ

一　るすゑにすべてたのしなどいふ詞を見出づべきにもあらず、さればくるしといふ詞もなかるべき筈と人  
いけんなれど、その戀あればこそ世にたゞよふなれ、捨たりといへど五體うごめき居らむほどは此苦も  
又はなれざるべし、佛者の佛となへ、美術家の美となふる、捨て／＼すてぬるのちの一物やこれ。

六日　晴れ。芳太郎来る、奥田老人来る、暑氣あたりにやいたくよはりたる様也。

七日　母君田部井のもとに衣類賣却の事たのみ参り給ふ、とても書畫などうりたりとてまとまりたる  
金子の得らるべきにもあらず、持つ人の手に有てこそ尊とびもせめ、好まざらむ人には反古にもひとし  
かるべきを、いでやこれも父君のめて給ひしもの也、冥々のさかひにおはしましてをしませ給ふに  
や、買人なきこそよけれ、今はうらじ、さりとて金子の才覺はせざるべからず、大方の衣類うり盡しぬ  
れど猶きぬちりめんのだくひ一つ二つはあり、我が中島師のもとに會合などあらむ時の料なれどこれを  
しもいふ時にあらず、さる頃まではいかに窮したりとも一つ二つは残してさる時の用意になどいひけ  
れ、萬はみな非也けり、敷島の歌のあらず田あれにける様を見しりけるより、すべてのよのあさましさ  
はかなさまでおもひたどられて何か又さらに花々敷むしろにつらなりおこめかしくひゞらき居ぬべき心  
地もせず、萬骨をすて、市井のちりにまじはらむとおもひたちける身に、花紅葉何のうるはしき衣かざ  
るべき、よしこれにて十金也とも十五金也とも得しほどをもて手とせむ、これをうしなはゞかれに  
つくべきのみとて成けり。

八日　晴れ。母君田部井に様子きゝに参り給ふ。

九日　ふたゝび趣く、十五圓ならば買手ありといふ、二重どん子の丸帯一すぢ、緋はかたの片かはと  
繻珍繻子の片かは、ちりめんの袷衣二つ、絲織一つ也、夫にてよしとて約束なる、此夕べ西村君来る、  
事情ものがたりて道具を買ひくれ度よしたのむ爲まねきつる也。

十日　晴れ。田部井より金子うけとる、此夜さらに伊せ屋がもとはしりて、あづけ置たるを出しふ  
たゝび賣に出さんとするなどいとあはたゞし。兄君のもとにはがき出す。

十一日　明日父君祥月命日なればたい夜として茶めしたき汁たてなどしてまねくといふほどならねど  
上野君を呼ぶ、午前より五時頃まで遊ぶ、此夜荻野を尋て荻野の妻来る、兄君来る、此度の計畫をも  
語るに何事の可否もなし、もとより我がおもふにたがいたるはらからが如何様の事なさんともそは關す  
る處ならず、されども見給へ末終になしとげらるゝ物には非らじ、まこと浮よのむづかしきを知り、た  
てたる心のをるゝ時あらば我も又よそに見んとはいはず、かしらを下げて来る事あらば母をも其身らを  
もやしなひては取らすべし、夫までの事は勝手たるべしとていとひやゝか也、深くかたる事もなくてふ  
しぬ、暑さはげしく更るまで寝がたし。午後師君のもとに中元禮に行く。

十二日　早起兄妹三人築地に寺参りをなす、歸宅後疲勞ことに甚だし、午後より裁縫をする、芳太郎  
来る、猪三郎の日歩がしをせんといひ居るよしかたる、ことばに絶たるもの也。

記　つ　に　號外来る、十一日午前九時發シカゴ博覽會特派員電文にはく、昨日當會場に大火あり、混雜甚だし  
く死者十七人と聞えし、いとみじかくて意を取がたけれど日本人はみな無事とありたるぞ先は嬉しき、

母君田部井のもとに行く。

十八といふとし父におくれたるよりなぎさの小船波にたゞよひ初て覺東なきよをうみ渡ること四とせあまりに成ぬ、いたりたき心のはかなきはなべてのよの中道を經がたくして、やう／＼大方の人にことなりゆくもとより我が才たらずおもふことあさからむをば恥おもへど、こゝろにはかりにも親はらからの言の葉にたがひ我がたてたる筋のみを通さんなどきしろひたる事もなきを、いかにぞや家貧にもものたらす成ゆくまゝに此處にかしこにむづかしき論出來てたゞ我まゝなるよをふるとて、知らず母などもくるしめ兄のたすけにもならざらんが如いひはやすよ、いでよしや大方の世はとて笑ふて答へざるものから、たれはおきて日夕あひかしく母のあな佗し今年さきにうせなば父君おはしますほどにうせなばかゝる憂きよも見ざらましを我一人残りともまりたるこそかへす／＼口をしけれ、否我が詞を用ひず、世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指すめる、邦も夏もおだやかにすなほに我がやらむといふ處、虎之助がやらむといふ處にだにしたがはゞ、何條ことかはあらむ、いかに心をつくしたりとて手を盡したりとて甲斐なき女子の何事をかなし得らるべき、あないや／＼かゝる世を見るも否也とて朝夕にぞの給ふめる、母は子のこゝろを知り給はず、子も又母のこゝろをはかり難ければなめり、おもふ事おもふに違ひ世と時と我にひとしからず、孝ならむとする事はかへりて不幸に成行くげにかゝるこそ浮上成けれと昨日今日ぞやう／＼おもひしらるゝ、是非のめじるしあらざらむ世にたゞよふ身ぞかし、寄せかくる波は高し、我身はかよわし、折々には巻きさられんとするこそかなしけれ、福島中佐が踏分こしうらるの山

は高かるべし、西比利亞の野の廣かるべし、冥々の中にひかえたる關のかくつらくかなしきを見ればいづれおなじき旅路也けり、こえ終らむほどは棺をおほふ驍なるから偕こそ善惡の評もさだまれ、今日此ごろの旅寢にしてほむるそしる聞及べき時にはあらず、かねてさだめ也、おもひたちたるまゝにて。

十三日 晴れ。母君田部井にゆく、午後伊三郎盆禮に来る、日没國子と近傍の寺廻りなす、伊三郎十時歸宅。

十四日 晴れ。母君田部井に今日もゆく、うりもの少し直段よく成たり、久保木佐藤盆禮に来る。今日より新聞東京朝日にかへたり、小説は三昧道人、桃水痴史也。久保木より李到來、母君菊地君もとに盆禮にゆく、隆一君新盆なればそなへもの持ちて。

安政年間子もり歌、

但し其ころの諸侯旗下などの中にのみとなへられけるものにや猶かんがうべし。ぼうちやん明神様へ行くときにや、栗毛のお馬にくら置いてむらさき手綱をお手にそへ、わかと一草に履とりおやりもち、はい／＼と参ります、かへりのおみやは何である、でん／＼大に笹の笛、起上り小法師に犬はり子。

わらべ歌、

ほーたる来い、山みてこい、あんどの光りをちよいとみて来い。

子もり歌、

ねん／＼ころりこおころりよー、ねんねのお守りはどこへいた、山こえて川こえて里へいた、おさとのおみやは何である、てん／＼たいこに笹のふん。

塵の中 (二十六年七月―八月)

十五日 より家さがしに出づ、朝日のかげまだ見え初ぬほどより和泉町、二長町、浅草にかけても鳥越より柳原塚前あたりまで行く、此度のおもひたちはもとより店つきの立派なるも願はず場處のすぐれたるをものぞまず、料ひくゝして人目にたつまじきあたりをとのさだめなれば、つとめて小家がちにむさむさとせし處をのみ尋ぬ。はやより世に落はふれてたよりなくさゝやかなる處にのみすみけるものから、猶門格子はかならずあり庭には木立あり家には床あるものとならひけるを、天井といはばくろくすゝけて仰ぐも憂く、柱ゆがみゆかひくゝ、軒は軒につゞき勝手もとは勝手手に並らびぬ、さるが上に大方は畳もなくふすまもなく唯家といふ名斗をかす成けり、はじめのほどはあまりの事にあきれて戸のそとより見けるばかり入りて尋ぬべき心地もせざりしが、かくて行々たりともはてもなしとまれ訪はんとて其隣の家につきてとふ、親切にこれかれ語りて聞かするもあり、にく／＼敷差配に行きて問ひ給へ塵といふもあり、差配と聞きし男の四十斗にてかしらはげたるが帳場格子やうなるものをひかへてそらばのんはじき居るうしろに中元の禮にやもらひけんさゝやかなる砂糖袋さては素麺などやうのものをひしと中ならべていと鷹風にもいふもにくし。三くら橋と和泉ばしとのあはひなる小路に四疊半二疊二間なる

一家あり、店は三疊ばかりも板の間に成りて此處には疊もあり建具もつきけり、長屋なれどもさまできたなからず敷金三圓家賃壹圓八十錢といふ、それもよし是れもよし唯庭のいささかもなくしてうらは直にうら道の長屋の屋根につゞきて木立など夢にも見らるべきに非らず、うらみは是れと覺ゆるものから、猶母君に見せ參らせてよしとならばよしにせむといふ、くに子のしきりにつかれて道ゆきなやむも哀なれば、今日はこれまでよとて歸る、まだ午前成し、家にかへりて猶さまざまに相談なす、幾そ度おもへども下町に住まむ事はうれしからず、午後より更に山の手を尋ねばやといふ、庭のほしければなり。駒込、巢鴨、小石川邊はいづれも土地が静かによき處なれど、何がしがしの別荘など多く、我が様なるいやしき商ひしたりとて買ふ人あるまじと覺ゆ、さては詮なし、牛込ならば神樂坂あたりこそと覺ゆれど、知る人ちかゝらむも佗しくかれこれさだまらずしてかへる、飯田ばしより御茶の水通りを來れば、今日は川開きとて此わたりに小舟うかべて客を引くよ、おかには馬車きしらせていそがするもあり、かちなるも美事によそほひ立て、其さまほこらしげなり、かへり見れば邦子のつかれにつかれけるあしを引きてしと汗に成てしたがひ來るあはれ此人もふびん也、いといとけなきに父兄におくれて浮よめかしき遊びをもしろず、萬はかなくて送るほどにやうやう浮よのかけりものに成りて、春の花のどかなるをのみ見てうれしとおもはぬほどに成ぬる、さてやこれよりの境界のあさましきをおもへば此人の爲も母の爲もかなしきは胸にみちてすゝむべき身もおぼえず、さりとして退ぞきて行かたもなし、心ほそしとはかゝる時をこそ。

十六日 晴れ。母君西村に行く、道具の事につきて也、芳太郎並に山下直一來る、午後より山下次郎が頼み事にて梅吉を青柳町に訪ひ給ふ、今日は一日こんざつに終る。

十七日 晴れ。家を下谷邊に尋ね、國子のしきりにつかれて行ことをいなめば母君と二人にて也、坂本通りにも二軒斗見たれど氣に入けるもなし、行々て龍泉寺町と呼ぶ處に間口二間奥行六間斗なる家あり、左隣りは酒屋なりければ其處に行きて諸事を聞く、雜作はなけれど店は六疊にて五疊と三疊の座敷あり、向きも南と北にして都合わるからず見ゆ、三圓の敷金にて月壹圓五十錢といふにいさゝかなれども庭もあり、其家にはあらねどうらに木立どものいと多かるもよし、さらば國子にかたりて三人ともによしとならばこゝに定めんとて其酒屋にたのみてかへる、邦子も違存なしといふより夕かけて又ゆく、少し行ちがひありて餘人の手に落ちん景色なればさまざまに盡力す。

十八日 晴れ。龍泉寺町のこと近邊なれば萬猪三郎にまかせたるに午後まで返事なし、さらばとて又母君と二人行く、道に行違ひて留守に行きけり、されども萬好都合におさまりたりと聞きしかばこれより轉宅のもうけをなす。

十九日 晴れ。早朝藤陰隠士をさるがく町に訪ひ二時あまりものがたりす、夫より伊東君を訪ふ、い座づれも轉宅の事かたりになり、藤陰のもとには小説の事につきはなし多かり、此夕かけて道具を西村に持參、これをうりてあきなひのもと手になさんとて也、同じ道なれば師君をも訪ふ、病氣にて打ふし居中給へり、もの語りしばらくおくらの參られしかば夫にゆづりて直にかへる、家の片づけは久保木手傳

ひて大方出来たり、今宵は何かむねさわぎで睡りがたし、さるは新生涯をむかへて舊生涯をすてんこと  
のよこたわりて也。

廿日 薄曇り。家は十時といふに引拂ひぬ、此ほどのことすべて書つゞくべきにあらず。  
此家は下谷よりよし原がよひの只一筋道にて、夕がたよりとゞろく車の音飛ちがふ燈火の光りたとへ  
んに詞なし、行く車は午前一時までも絶えず、かへる車は三時よりひゞきはじめぬ、もの深き本郷の静  
かなる宿より移りてこゝにはじめて寝ぬる夜の心地まだ生れ出て、覚えなかりき、家は長屋だてなれば  
壁一重には人力ひくおとこども住むめり、商ひをはじめての後はいかならむ、其ものども、お客なれば  
氣げんにさからはじとつとむるにこそ、くるわ近く人氣あしき處と人々語りきかせたるが男氣なき家の  
いかにあなづられてくやしき事ども多からむ、何事もわれ一人はよし、母は老ひたり邦子はいまだ世間  
をしらず、そがおもひわづらふ景色を見るも哀也、さてあきなひはいかにして始むべきなど千々にこゝ  
ろのくだけぬ、蚊のいと多き處にて藪蚊といふ大きな夕暮よりうなり出るおそろしきまで也、この  
蚊なくならんほどは綿入きる時ぞとさる人のいひしが、冬までかくてあらんこと佗し。

井戸はよき水なれども深し、何事もなれなばかく心ほそくのみあるべきならず、知る人も出来あきな  
ひに得意もふゆべし、そは憂しとても程なき事也。唯かく落はふれ行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終  
らばつひのよに斯の君に面を合はする時もなく忘られて忘られはて、我が戀は行雲のうはの空に消ゆべ  
し、昨日まですみける家はかの人のあしをとゞめたる事もあり、まれにはまれには何事その序に家

居のさまなりとも思ひ出で、我といふものありけりとだにしのばれなば生けるよの甲斐ならましを行ふ  
もしれずかげを消してかくあやしき塵の中にまじはりぬる後よし何事の上すがありておもひ出られぬと  
も、夫は哀れふびんなどの情にはあらで、終に此よを清く送り難くにごりにごりぬる浅まし身の身とお  
もひ落され、更にかへりみらるべきにあらず、かくおもひにおもへばむねつとふさがりていとゞねぶり  
がたく、曉のくるはやう聞えぬ、此宵は大雷にて稲づま恐ろしく光る。

廿一日 夕べより降ける雨なごりなく晴れていとしのぎよし、はがきしたゞめてこれかれ十軒ほど出  
す、今宵は少し寝られたり。

廿二日 晴れ。今日は土曜日也、小石川の稽古日いかならむとおもひやらる、母君中橋の伊せ利を訪  
ふ、あきなひの事につきて也、送籍のことたのみに久保木へ手紙出す、昨日今日は家内の掃除つくるひ  
などにてひまなし。

廿三日 晴れ。朝より伊せ利きたる、店に棚つりなどして午前をすく、午後かへるさながら問屋にか  
け合ひくれんといふ、誰にまれ諸共にとあるに、さらば我を伴ひ給へとて共にゆく、門跡前に中村屋忠  
七とよべるが伊せ利の昔し馴染なるよしにて此處へ周旋す、五圓斗の品とゞのへくれよといふ、手つけ  
塵として一圓渡す、明日荷はもち込むべき約束、伊せ利は明後日朝かざりつけに來たらむといふ、諸事し  
の終へてかへる、此五圓の金も今は手もとになし、かねて伊三郎の夫ほどはかならず調へんといひけるを  
中あてになしけるなれば、母君直に三間町に趣く、おもふまゝならぬこそ浮上成けりな、伊三郎が妻昨夜



より急病にて旅の空といひ持てる金も多からざる上、さる人にあづけたる金の返らざるなどにて右左むくよしもなき處へ故さとに残したる妻も俄のわづらひにて留守の騒ぎ大方ならざるよし、秋露のはきたてにかゝりける最中男手なくして佗合へるもさこそと思へば、此地の人の病ひ少しひま見れば一度ふる郷にかへりて又なす方もあらむなど、かしこにもいと難義の折からなりといふ、扱はせんなし、この上は西村の方をといふ、今日上野君來訪されたり。

廿四日 早朝うす曇り。母君小石川に行く、正午ちかくまで歸り給はず、問屋より今日荷の來べき約なればいか様にせんと案じわづらふ、十二時母君歸宅、西村にてととのひ難しといひけるよし、かねて道具を引受けるゝ約にて送り置ける其料二十金がほど早々といひけるを來月までといひ延びに成しなれど、かゝるいそぎの折から他に道もなし、五圓にてもよし、今直にをと母君の給ひけれど、三十日ちかくにはありいかにしてと斷りしかば、さらば何ほどなりとも出来るほどをととのへくれよ、かゝる次第なればと事のわけをうち明してたのみたまひけれど、いかにしても出来がたしと斷りける上、お常などの失禮なる詞いひけるよしの給ふ、かへるさに久保木にも頼みけれどもかしこにても出来ず、いかにせむとの給ふ、さてはせんなし、先づ問屋の方に斷りいひ置んとて直に家を出づ、田中より車にてはしらす、今荷ごしらへの最中成しかば事つくろいて一日二日の猶豫をいひ入る、こゝはわけもなくすみけり、これより直に伊せ利にも斷りいひやる、日没少し前母君三間町を訪ふ、伊三郎すでに歸宅の後也、此夜かれがもとへ金子たのみの文を出す、國子と共に吉原にあそぶ、一々記すことかたし、此日母君三

枝を訪ふ。

廿五日 晴れ。母君中之町の伊せ久におちよどのを訪ふ、仕事の世話をしたのみになり、心よく引うけくれたるよしにてゆかた一枚持參、これを手みせにこれよりは絶えせず世話をなさんといひけるよし、國子直に仕たてにかゝる、此夕べ國子と共に三間町に病人の安否をとひ、歸路花川戸町、待乳山下、山谷りより日本づつみをかへる、いぬるまで國子と共に家の善後策を案ず。

落ぶれてそでに涙のかゝるとき人の心の奥ぞしらるゝとはげにいひける言葉哉、たらぬことなき其むかしは人はたれもたれも情ふかきもの世はいつとてかはりなきものとのみ思ひてけるよ、人世之行路難は人情反ぶくの間にあるこそいみじけれ、父兄よにおはしましける昔の人も、こゝにかく落はふれぬる今日の人も、見るめに何れかはりも覺えざれど、心さまのいろゝをみれば浮世さながらうつろひぬる様にこそおぼゆれ、さればこそ人に義人君子とよばるゝは少なく、貞女孝子のまれなるぞ道理なる、人は唯其時々感情につかはれて一生をすごすもの成けりな、あはれはかなのよや、さりとは又哀れのよや、かの釧之助が我家に對して其むかし誠をはこびけるも昨日今日のつれなき風情も、共に其ころのうつし成けり、今にもあれ我が國子をゆるさんといはゞ手のうらを返さぬほどにそのあしらひの塵替りぬべきは必定也、をかしゃうきよのさまゝなるこゝには又かゝる戀もありけり、其かみは我家たかく彼家いやしく欲より入て我はらからを得んといひ願ひけめ、やうゝ移りかはりてはかしことみて我れ貧なるから恩をきせてをしいたゞかせんとや斗りつらむ、夫にもしたがふべき景色の見えぬをいと

つらく、口をしくおもひて、扱はこたびの事を時機におもひのまゝにくるしめんとたくらみけるにや、こは我がおもひやりの深きにて、あるひはさる事もあらざるべしとはおもへども、彼れほどの家に五圓十圓の金なき筈はあらず、よし家にあらずとて友もあり知人もあり、男の身のなさんとならば成らぬべきかは、殊に母君のかしら下ぐる斗にの給ひけるをや、とさまかうさまにおもへどかれは正しく我れに仇せんとなるべし、よし仇せんとならばあくまでせよ、樋口の家は二人残りける娘のあはれ骨なしかはらはたなしか、道の前には羊にも成るべし、仇ときゝてうしろを見すべき我にもあらず、虚無のうきよに好死處あれば事たれり、何ぞや釧之助風情が前にかしらを下ぐるべきかは、上に母君おはしますにこそ何事もやすらかにと願ひもすれ、此一度のふみを出して其返事のも様に寄りてはとおもふ處ありけり。

廿六日 雨。早朝西村に手がみを出す、字句つとめてうやゝしくひたすらにたのみてやる。母君中之町へ仕立ものゝ事につきて参り給ふ、午後出来あがりたるをもて又ゆく、我れも母も今日は例の血の道にてふしたり。母君日没少し前三間町に見舞にゆく、あしき方成しよし、今日は終日ひやゝかにしてわた入羽をりきる人も見うけたり。

あはれいかにことしの秋はみにしまむすみもならはぬやどの夕か是

いづれぞやうきにえたへて入そむるみ山のおくの塵の中とは

御隠居様など呼ばれけるは昨日也、こゝに移りぬる後はたれ一人むかしを知る人もあらず、あやしき

町風の詞にこそいはれんといひしに、隣の妻の御隠居様とやはりいふ、處がら伊せの漬をきもとの名をよばれんとしもおもはざりしを。

廿七日 晴れなれどもすゞし、すゞしといはんよりは冷やかなる方也。廿四日の寒暖計正午時九十三度とありしに、其夜より下りに下りて廿五日は七十度より八十度夜に入ては六十度にさへ成ぬ、昨日も今日も七十度代成り。午後區役處より呼出し来る、戸籍の事につきて也、母君地主に印もらひに行、西村来る、金子たのみやりたるほどとゝのひ難しとて三圓持参。

又もえ上りたるは、

相馬家の事件いかにおさまらんとすらむ。

大石辭して大鳥君の兼任されけるより、朝鮮人その勢ひつよく成けるやにきく。

天台道士杉浦君朝日の紙上に日支の關係を論ず、さりよと覺ゆる事多し。

廿八日 晴れ。寒暖計八十度なり。午前區役處に趣く、戸籍の上になし違ひたる處ありて本郷の區役處に照會するなど今日中にはまだとゝのひ難し、此夜お若たのみにより伊三郎へ文を出す。

廿九日 晴れ。お千代どの及び五十二殿参らる、正午まではなして羽織一枚たのみ行く、酒井の娘二人我がもとへ下稽古たのみたしなどいふ、今日もさしたる事なし、夜に入てより伊三郎より手紙来る。

廿四日に出したる手紙の返事也、たのみつかはしたる金たしかに送るべきよしひ越す、母君今日望月に例月のもの取にゆく、一錢も出来がたくして歸る。

三十日 晴れ。何事もなし、夕刻吉田、野々宮兩君來る、野々宮君は廿七日歸京されたるよし、例の婚儀の約と、のひて其支度の爲なるよしはかねて吉田君より聞居し事なれど、さも知らざるべし野々宮君のものいひたげに見ゆるもをかし、されど吉田君にはどかりてにやこゝにてはいひも出さず、これより諸共に燈籠見にゆく、其道にてしかくもの語る、をかききことども多かり、歸りしは十時頃なるべし、岩手みやげには名産豆銀糖とかや味はよからねどめづらしき物也、松島みやげの寫眞三葉、同じく穴なし竹の印材を送られたり。

三十一日 早朝雨ふる、量少なかりしかば今日はひねもすむして暑し。邦子職業の事につきて種々わづらひ多し、吉田野々宮のふたりに斗りて又せんすべも有べしとて此夜二人池のはたの吉田君が訪ふ、歸りは九時成し、甲府伊庭より轉宅見舞狀來る、伊せ久よりおいくどの來たりしよし。

八月一日 晴れ。芦澤今朝ならしより歸京せしよしにて訪ひ來る。中之町の燈籠今宵より又人形に改まるよしにて門すぐる車又おびたし、母君散步ながら見に行く、我れは七書をよむ。

此午前伊勢久がもとにたのまれの仕事母君持參、いたくほめられけるよし。  
二日 晴れ。終日事なし、日暮てより望月の妻來る、二十五錢持參、廣瀬より爲替來る、此夜家内相談ありけり。

46 三日 曇り。早朝家を出づ、根津片町にほうづき屋を尋ね、上野をぬけて郵便局に爲替うけとる、金七圓也、それより門跡前に廻りて問屋に持込の事をたのむ、歸宅後直に伊せ利がもとへはがき出す、母

47 君は廣瀬より來たりし由二圓をもちて伊三郎が留守宅にゆく、おわかには渡さんとて也、朝より今日は芳太郎來たりけり、午後より雨折々にふる、日くれてより國子と共に燈籠見にゆく、人形に變りける景況

を見んとてなり、歸路雨になる。  
人形は安本龜八及び門弟などの作なるべし、  
東京名處成けり。

毎夜廓に心中ものなど三味線に合せてよみうりする女あり、歳は三十の上いくつ成るべきにや、水淺黄にうろこ形のゆかたきて帯は黒じゆすの丸帯をしめ、吉原かぶりに手ぬぐひかぶりて、柄長の提燈を襟にさしたるさま小意氣にしやんとして其むかしは何成けん驚なかせし末なるべきか、まだ捨がたき葉櫻の色を捨てゝのあきなひと見れば、大悟のひじりの心地もすれど、あるひは買かぶりの我れ主義にて仇な小歌の聲自まんこれに心をとゞめよとにや、すけんぞめきの格子先、一寸一服袖引たばこ、あがれあがるの問答に心うかるゝたはれをはしらず、粹が身をくふおもふどし二かいせかれてしのびあし、籬にからむつたのもん、松の太夫とさゝやきの哀れ命を引四つのかねに限り、ゑんをう瓦上おく霜の明日をもまたじとおもひつめし身には、いかに身にしみて心ほそかるべき、ほそく澄たる聲はりあげて糸の音色もしめやかに大路小路とながしゆくうしろ姿、これが哀か、かれが哀か。  
○ 一昨日の夜我が門通る車の數をかぞへしに十分間に七十五輛成けり、これをもてをしはかれば一時間中には五百輛も通るべし、吉原かくてしるべし、さりながら多くは女づれなどの素見客のみにて茶屋かし

一座敷の實入りは少なきよしに聞く、伊せ久などにてすら客一人もなき夜ありとかいひし、さなるべし、今宵九時まで見ありきけるうち、かんばんを提げたる茶屋送りの客は一人も見うけざりき、されど角ゑびのみは大景氣に見えけり、此夜江戸町に迷子を助く、四つ斗の男子にて何事も分らざりしには困りき、後にしれたるが父母及び他に男女二人三人あり、こゝはさほど雑踏の處にもあらざりしを迷子になしける親のいかにうかつに見ありき居けるにかをかし、さて我が子を尋ねあてぬれどさして我れ等によるこびを述べんとにもあらず、やがて又向ひの横町に伴ひ行きける、をかしき人もありけるものなり。

四日 晴れ。終日まぢけれども問屋も来らず、伊せ利も来たらず、いかに行違ひしにかと一同まち佗ぶ、夕刻より問屋の様子き、に行く、違約のかどをいたく詫びて明日は早朝に持ち行くべしといふ、さらばとてこれより神田にゆく、雉子町の北川君がもとを訪はんとて也、途中にみやげもの買ひて三味せんぼり車にてゆく、邦子が友の中にて一の人と見えけり、少し軽忽にて重りかなる處は少なけれど馴れ安げに奥そこなきぞ却りては心深かるべきにや、詞つきも取なしも洒々落々せし人も、あきなひの事につきて種々たのむ、歸路はくらく成けり。

五日 晴れ。早朝根津のほうづき屋を訪ふはなしあり、下谷區役處に廻りて菓子小賣の鑑札をうけんとす、いまだ戸籍の事さだまらざればとてやめになす、今日も午後まで問屋来らず、伊せ利の手つだひにとて一時ごろに來たりければ中村屋に約束の爲ゆく、直に送るべしといふ、二時までまで來たらず、三時にもまだ也、四時も過けり、五時ちかく成りて來る、日没までにかざりつけ濟たり、二間の間口に五圓の荷を入れけるなれば其淋しさおもふべし、幸ひに田部井よりがらす箱を買ひおきしかばそれにて少しものにぎやかしに成ぬ、伊せ利には一こん出す、十時ちかくまで飲みて話しけり。

六日 晴れ。店を開く、向ひの家にて直に買ひに來る、中々にをかき物也、母君は例の奥田に利金拂ひ田部井に箱をあがなはんとて家を出づ、師君より書狀來る、一兩日中に伊香保へ湯治に趣き給ふよし、その留守にて我れ主と成りて數よみ催しくれよとの頼み也、斷りの文を出す。文につけて思ひ出たり、伊庭のもとに一昨日はがき出したたり。夕刻より着類三つよつもちて本郷の伊せ屋がもとにゆく、四圓五十錢かり來る、菊地君のもとに紙類少し仕入る、二圓ちかく成けり、今宵はじめて荷をせをふ、中々に重きものなり、家に歸りしは十時ちかく成りき、持參の紙類明日の朝店に出すべき様今宵のうちに下ごしらへをなす、十一時床に入る。七日 晴れ。早朝花川戸の間屋に絲はりをとめけり、しやぼんの割合中村屋よりは廉に覺えしかば一本もとめて來る、駒形の蠟燭屋にろうそくをかひ、看板の事などたのむ、歸宅後多事、西村より書狀來る、依頼なし置し金子ちかくに出來べきもやうをいひこす、本日區役處より入籍の件に付呼出し來る。

今日は昨日にくらべて商ひ少し多し。八日 晴れ。早朝髪をゆひて八時頃より區役處にゆく、母君の年齢芝區より間ちがひ來たりて今更に改たむること面倒なれば天保九年生れとなす、菓子小賣願ひの奥印をこひて東京府廳分署に行く、淺草

南元町とて既ばしのまだ先き也けり、印紙料三十錢、半年分税金五十錢を納めて事とのふ、歸路中村屋に蚊遣香の有無を問ひ、用たしすこしなす、他店のもやうをも知らんとて紙類少しづつもとめ來る、今日のあつさは又おびたゞ數、田圃道などは全く往來絶えたり、家に歸りしは正午、これよりしばしひる寝す、夕方より母君中の町に參らる、仕事持參、此夜習字。

此頃の事少し、

一 塊國皇太子來朝。

一 榎本子爵夫人たつ子死去、寺は駒込吉祥寺、葬儀五日。

一 伊藤總理の息式部官勇吉君函館にて大負傷、塊國皇太子奉迎の爲趣きけるが乗船の折ボートに落ける也とか、性命も六づかしかるべしと聞く。

一 知人笹岡君判事の退職を命ぜらる。

一朝日の小説一昨日よりなみ六になる、出しものは深見重三なり、例によつて例の如し。

九日 晴れ。早朝 二人あきなひあり、物馴れぬほどのをかしさは五厘の客に一錢のものをうり、一

錢の客に入厘のものを出すなど、後にてしらぶればあきれたる事をのみなすぞかし、此まゝにてをしゆかば中々に利を見ることの出來得べきにもあらねど其うちには又其うちの利口生ずべしなど語り合ふ、伊せ久のお千代どの買ものに来らる、二十錢斗商ひあり、午後上野君來訪、夕飯をいだす、日くれてより西村來る、金十圓持參、上野の房藏君徴兵の抽せんにのがれけるよし。

十日 晴天。早朝母君と共に森下にて菓子箱を買ふ、歸路母君三間町を訪ひ給ふ、伊三郎がつま昨朝逃亡と聞く、驚愕直に山梨へ書狀出す、北川君のもとへは明朝菓子買出しにゆくべきよしはがき出す。

七つといふとしより草雙紙といふものを好みて手まりやり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは英雄豪傑の傳、任俠義人の行爲などのそゞろ身にしむ様に覺えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき、かくて九つ斗の時よりは我身の一生の世の常にて終らむことなげかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出でしがなとぞあけくれに願ひける、されども其ころの目には世の中などいふもの見ゆべくもあらず、只雲をふみて天にとどかむを願ふ様成りき、其頃の人はみな我を見ておとなしき子とほめ、物おぼえよき子といひけり、父は人にほこり給へり、師は弟子中むれを抜けて祕藏にし給へり、おさなき心には中々に身をかへり見るなど能ふべくもあらで天下くみしやすきのみ我事成就なし安きのみと頼みける、下のころにまだ何事を持ちて世に顯はれんとも思ひさだめざりけれど、只利慾にはしれる浮よの人あさましく厭はしく、これ故にかく狂へるかと思れば金銀はほとんど、塵芥の様にぞ覺えし、十二といふとし學校をやめけるが、そは母君の意見にて女子にながく學問をさせなんは行々の爲よろしからず、針仕事にても學ばせ、家事の見ならひなどさせんとて成き、父君はしかるべからず猶今しばしと争ひ給へり、汝が思ふ處は如何にと問ひ給ひしものから、猶生れ得てこころ弱き身にいつ方に

もく定かなることいひ難く、死ぬ斗悲しかりしかど學校は止になりけり、それより十五まで家事の手傳ひ裁縫の稽古とかく年月を送りぬ、されども猶夜ごとく文机にむかふ事をすてず、父君も又我が爲にとて和歌の集など買ひあたへたまひけるが、終に萬障を捨て、更に學につかしめんとし給ひき、其頃遠田澄庵父君と心安く出入しつるまゝに此事かたりて、師は誰をか撰ばんとの給ひけるに、何の歌子とかや娘の師にてとしごろ相しりたるが、此人こそとすゝめけるにさらばとて其人をたのまんとす、苗字もしらず宿處をも知らざりしかば、荻野君にたのみて尋ねけるに、そは下田の事なるべし、當時婦女の學者は彼の人を置いて外にあるまじとてかしこに周旋されき、然るに下田ぬしは當時華族女學校の學監として寸暇なく、内弟子としては取りがたし、學校の方へ參らせ給はゞとの答へなりけれど、我がやうなる貧困なる身が貴紳のむれに入なんも佗しとはたさず、兎角日を送りて或時さらに遠田に其はなしをなしたるに我が歌子と呼ぶは下田の事ならず、中島とて家は小石川なり、和歌は景樹がおもかげをしたひ書は千蔭が流れをくめり、おなじ歌子といふめれど下田は小川のながれにして中島は泉のみなもとなるべし、入學のことは我れ取はからはんに何事の猶豫をかしたもふとてせちにすゝむ、はじめて堂のほりしは明治十九年の八月二十日成りき。

七月廿日より三十一日までの家賃六十錢三十一日渡す。

八月三日二十錢芳太郎に渡す、殘金四十錢に成り。

八月二日望月より二十五錢來る。

神田雉子町三十番地

本郷區根津片町十一番地

小石川表町六番地

淺草三間町二十番地

猿樂町二丁目二番地川合直方

北川 秀子

太田 芳之助

西村 釧之助

廣瀬 伊三郎

山下 直一

塵中日記

(二十六年八月—九月)

十一日 晴天。朝まだき家を出づ、北川君の許へ着きけるが漸く五時半頃なりけん、藤兵衛老人の周旋にて菓子並びに手遊ものなどのかひ出しをなす、まだ生れ出てよりかゝる處の景況を知らざる身にはそゞろ恐ろしきまでものはげし。

正午少し前家に歸る、かざり付くるも遅しとばかり買ひに來たる子供あり、よろづものなれずして間違ひのみ多きもをかし。

十二日 晴れ。母君は小石川、本郷、あのあたりに禮參りに行き給ふ。今日のいそがしさは又無類成らん、さて賣上の金はと問へば二十八九錢成しなるべし。

十三日 晴れ。かひ出しに多町へ行く、今日のうりあげは三十三錢。

十四日 晴れ。また多町にゆく、歸路はくるま。今日のうりあげ三十九錢。

十五日 晴れ。今日も相應に賣れたり。

十六日 雨。家のふしんをなす、商ひを始めざりし頃はさのみにも思はざりし店つきの兎角に都合好からねばこれを直さんとてなり、一日にして事終る。今夜野々宮君、大久保君來訪。

十七日 晴れ。多町にかひ出しに行く。今日埃國皇族新橋に着、市中國旗をかゝぐ。

十八日 朝來あれもやうにて風ものすさまじ。

歸宅後更に大音寺前にせんべいをあつらへ、駒形に蠟燭の註文をなし。門跡前にしふ團扇をあがなひ來る。

今日下駄をもとむ、後齒の白木にてさらさら形の革鼻緒成りしが、代金二十錢成し。夕刻より雨になる、風力さらに加はりてほとんど嵐に似たり、戸を明け置く事あたはざればはやくお

ろしてふしたり。

十九日 晴れ。風あらし。午前より西村の母君來訪、例の縁邊の事につきてはなしあり、夕ちかく歸宅されき。

塵中日記

明日は鎮守なる千束神社の大祭なり、今歳は殊ににぎはしく山車などを引出るとて人々さわぐ、隣りなる酒屋にて、兩日間うり出しをなすとて、かざり樽など積みたつるさま勇ましきに、思へば我家にても店つきのあまりに淋しからむは時に取りて策の得たる物にあらじ、さりとてもとてを出して品をふやさん事は出來うべきにもあらずよし出來たりとてさる當てもなき事に空しく金をつひやすべきにあらざ、いでや中村やに行きてかざり箱少しあがなひ來んとて夜に入りてより家を出づ、今宵即座に間はざりしかば明日のあさ持參すべき約束にさだめてまつち五十錢ばかりをあがなひぬ、そは金がさ少なくして見場のよければなり。今夜は更るまで大忙。

二十日 早起。雨もやうなり。多町にかひ出しに行かんも如何などしはしたゆたひけるが兎も角もとてゆく、歸りしは十時頃なりし。夫より門跡前にゆき、かざり箱並にみがき砂の類かひ来る、一日大忙。商ひは壹圓ばかりありき。日暮れてより雨になる。

廿一日 山車神輿の渡御などいときはし、されども商ひは多からず、然るは子供達の大道商人に引取られてなり。

廿二日 晴れ。

廿三日 晴れ。

廿四日 晴れ。今日は商ひ例より多し。各縣下暴風雨の報あり。

廿五日 晴。早朝芳山来る、廣瀬の事につきてなり。

今日も一日雨にくらしつ。

此處四五日、身のせわしきなみならざるが上に、腦のなやみつよくして寐たる日もあり、すべて日記を怠りぬ。

此頃の事

牛込原町中川三吉所有地處土窟のこと。

岐阜、愛知及び各縣下暴風雨洪水の件。

星亨並に相馬家の件。

九月一日 早朝より例の腦病起りてしばしもたつことあたはず、終日ふしたり。午後より雷雨おびただし。

三日 奈良孝太郎君厩橋邊なる質商佐野屋方へ奉公に赴く。

四日 早朝より多町へかひ出しに行く。前雇人吉太郎が八百屋になりたるに逢ふ。

飯田町に芦澤が爲替うけ取る。

この日、狂風砂塵を巻きて、御成道、廣小路あたりは面を向くる方もなし、車にてかへる。

廣瀬伊三郎歸京、参り居りしかど、腦痛はげしくしばしも起居ることかなはねば其まゝ打ふす。

此の一日二日腦痛烈しく、大方打ふしぎりなりしかば、日記も物せず。

七日 午前五時築地本願寺別院小使部屋より出火、太子堂を残して悉皆焼失せり。

八日 晴れ。

十五日 廊内俄はじまる、母君切符を人に貰ひて、検査場に勢ぞろひ見にゆく。

十六日 母君菊池君に行く、留守にて風船を仕入る。

十七日 中島師君より手紙来る。

十八日 星野君の郵書鎌倉笹目が谷より来る。

十九日 四五日腦痛烈しく、加ふるに商業忙しくて、何事をも物せず。



二十日 雨降る。彼岸の入りなり。

廿一日 おなじく雨。

此の頃の賣高、多き時は六十錢にあまり、少なしとても四十錢を下る事はまれなり、されど大方は五厘六厘の客なるから、一日に百人の客をせざる事はなし、身の忙しさかくて知るべし。

廿三日 薄くもり。早朝金杉なる菓子のおろしやに行く、こは毎朝の例なり。歸宅直に食事したゝめて、神田に繪紙かひ出しにゆく。

廿四日 雨少し降る。

過去無数の諸佛にも捨てられたるをばいかゞせん、現在十方の淨土にも往生すべき心なし、たとひ罪業おもくとも、引接し給へみだ佛。

尋ねべき君ならませば告げてまし入りぬる山の名をば夫れとも

けんもんしやの両面の水干に袖むらごに雀の居たるをぞ縫ひたりける、紫裾濃の袴をぞ着たる。

うすごうりにごる。

中々にたゞよふも亦おもしろし月の前ゆく空のうき雲

思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥啼くなり

世の中は何方かさしてやどならむ行とまるをぞかぎりと思はむ

下谷千束町三丁目十番地

あらもの屋

御徒町二丁目二十五番地

竹内 兼吉

塵中日記

(二十六年十月—十一月)

今是集

いみじくおこたりにける哉此日記よ、今日いにかしるさよりけむ、家のうちのことよの中のこと一時として静にあるべきかは、目になれ耳に聞えるものしたがいとおもひに成ぬるいとさわなれどこれもしも今しるさむとすればわづらはしさの堪え難きをいかゞはせむ、いざらば昨日の我に耻づる身ながらこりずまに今日是とみる所をしるさまし。

十月九日 晴れ。此二日より晴雨とも日々図書館にかよいて暮しけるが今日はえゆかて奥なる一間にこもりて書をよむ、店は昨日一昨日よりうれ高いと多く成りて邦子のいそがしきこと起居ひまなし、さるは近き處にもとより有ける家の我家にうりまけて店をとちけるが二軒あるよしに聞けばそれが爲なるにや、さしもきそひ心などの有るにも非ず、おのづからにまかせて商ふものから店をあづかる國子に運といふものあればなるべし。

60 十日 晴れ。早朝神田へかひ出しにゆく、一昨日かい來たりし半箱の風船の昨日中にうれ切れに成り

61 しかば、さらに一箱もとめになり。

塵中百首

樋口夏

秋朝

秋ふかく成にけらしな朝日かげはれたる空もさびしかりけり

秋夕

村がらす寝にかへりゆくこゑすなりあなみじかゝる秋の一ひや

秋夕雲

紅葉のうへのみならで夕日かげうつろふ雲もくれなるにして

野徑秋夕

鶉なく聲もきこえて花すゝきまねく野末の夕べさびしも

水郷秋夕

舟うたの聲うら淋しかり寝する淀の渡りの秋の夕暮

遠村秋夕

遠ざかるこゝちこそすれ夕ぎりのいや隔ゆく山もとのさと

山家秋夕

おもひすてゝ入ぬる山のかひぞなき秋の夕べは袖のぬれつゝ  
閑居秋月

花薄まねく人さへなかりけりあはれ淋しき宿の夕暮

秋夜

夜はながく成にける哉花がたみおさなきめさへさめがちにして

秋夜雨

いつのまに降出ぬらむさよ更てむしの音しめるにはの村雨

秋野

岐もなく成にける哉八千種の野はいろ／＼の花にうもれて

秋野露

浅ちふの小野のしの原しら露を玉とちらして夕風ぞふく

秋海

わだの原けぶりたてゆく大ふねの別れやいかに秋の夕ぐれ

秋里

からごろも打おとさへも高やすのさとの寢覺やさびしかるらむ

稻葉風

春がすみ立別れしはいつならんいなばの風に雁のねぞする

鶯花契我春

契るらんいく萬代の春かけてみそのゝ梅に鶯の聲

よろづよを契りかはして梅の花かをればうたふそのゝ鶯

鶯の聲の春さへのどかなりよろづよにほふそのゝ梅がえ

十一日 晴れ。今日は一日机邊にあり。

十二日 曇り。今日も多町に風船のかひ出しをなす、午後より雨ふる。

十三日 雨。議會召集令出る、十一月二十五日。

十四日 おなじく。

十五日 風雨はげし。岡山徳島洪水の報いたる。

十六日 雨。朝日新聞社員横川勇次君占守より歸京、明十七日より北海の實況紙上にあらはるゝよしに聞く。

見ちとせ

過去無数の諸佛にもすてられたるをばいかにせむ、

現在十方の淨土にも往生すべき望みなし、

たとへ罪業おもくとも引接し給へみだぼとけ、

尋ねべき君ならませばつげてましりぬる山の名をばそれとも  
 一相馬事件いつあきらかに成るべきにや、墓地發掘、死體解剖など漸く歩をすゝめて今は残る所あるま  
 じとおぼゆれど、すべて秘密を旨とすれば何事もまだ五里の霧中なり、さるが上に又井戸川忠とか呼べ  
 るはんじの新訴状を奉りたるさへあるやにきく、斯していつはつべきにや。  
 一密獵のこと去歳よりことは多しと聞く、又來るとしはいかなるべきにや。  
 一伊藤勇吉君ききずいえて參内、御禮申上ぬるよし。  
 一しかご博覽會日本品好評のよし。  
 一かしましかるべきものよ又ことしの議會。  
 一あさましきものは月日にそひゆくわいろ沙汰。  
 一巢鴨の某の町なる車夫名はわすれしが老父に孝なるをもて官より黄綬章をたまふ。  
 一後藤大臣及び齋藤次官の前送いかならむとすらむ、かの取引所條例の通過に際し密に内議にあづかり  
 たりとのこと斗らずも改進黨新聞對星亨誹毀事件の公判より世にあらはれせめしかば朝野の一問題と成  
 ぬるをや、第五議會の開設も近づきぬる今日此頃。  
 十七日 大雨。岐阜、岡山及び各府縣の暴風雨のさた聞くもすさまじし。  
 十八日 雨やうやくやむ。午後西村母君來訪、釧之助に縁談とゝのひぬるよし。

十九日 母君小石川によるこび持參。  
 二十日 今日にはし村が婚禮なり。  
 二十一日 相馬家事件局面一變、順胤君はじめ被告一同無罪被免、原告錦織夫妻辯護士岡野寛及  
 び山口豫審判事拘引せらる。  
 二十五日 晴れ。午前神田にかい出しをなす、午後平田禿木子來訪、來月の文學界にかならず寄書な  
 すべきよしを約す、七月以來はじめて文海の客にあふいとうれし、旅宿は日ぐらしのさと花見寺の隣家  
 にて妙隆寺とかいへるよし、此夜田邊査官來訪、貧民救助の事につきてはなしあり、縁談の事申來る。  
 二十六日 雨。  
 此ほどしるすべきことなし。  
 三十一日 文學界十號及び五號以下を送らる。  
 十一月一日 晴れ。多町にかひ出しをなす。  
 二日 久保木姉君來訪、金子の事たのむ。  
 三日 晴天。皇運萬歳。  
 四日 圖書館に書物みる、本日平田君より書狀來る、久保木より秀太郎金子持參、金五圓なり。  
 五日 多町にかひ出し、さくら香より小間物仕入る。

六日 図書館にゆく、本日より十二日まで蟲ぼしの爲閉館のよしやむを得ずかへる。今日もかい出し多し。

七日 晴れ。

八日 薄くもり。今日は初酉なりとて例の通り市どもたつ、日くれ前少し人の出はげしかるべき頃より雨ふり出づ、周章狼狽といふの外なし、おもはぬ儲は馬車、人力、飲食店、かさやなどなり。

九日 晴れ。多町にかひ出し。

十日 はれ。

十三日 山梨より廣瀬来る、例の訴訟事件にてなり、今宵我家に一泊。

十四日 はれ、初霜しろし。

日暮里花見寺の隣

妙隆寺内

平田 禿木

千束町二丁目二十五番地

廣瀬伊三郎

北かく全盛みはたせば

軒は提灯電気燈

いつもにぎはふ五丁町

春は櫻を植ならべ

毎日毎晩客の山

三味せん太このたえまなく

これも勉強するが爲

全盛じゃ〜愉快じゃ〜

むかしにかはらぬ別世界

秋は燈籠に初にわか

日曜旗日は猶のこと

シヤン〜〜の手をそろい

勉強するもさとの爲

萬歳〜萬々歳

男仁和賀福島中佐の内

全盛歌

麴町元ぞの町一丁目十八番地

ストロング 長生堂

定価十錢郵券代用一割まし

外に郵送料二錢

塵中日記

(廿六年十一月—廿七年二月)

人しらぬ花もこそさけいざらばなほ分け入らむはるのやま道

わだつみの沖にうかべる大ふねの何方までゆくおもひ成らむ

さとれば去此不遠、

まよへば十萬億土、

雲まよふ夕べの空に月はあれどおぼつかなしやみち暗くして

有無ふたつなし一切無量、

花ちらすかぜのやどりも何かとはむながれにまかす谷川のみづ

十一月十五日 師君を小石川にとふ、七月の十九日に別れけるより今日をはじめて也、かたみにいはんとする事多かり、思ひせまりては涙さへさしぐみてとみには詞も出ず、およそ半としがほどにかはりけるよの中のさまんくを正木のかづら散々にかひつゞくれば、

水野せむ子ぬし會津侯に嫁せられたる、

龍子ぬしの子うみたる、女子にてしかもすこやかに大きな子のよし、

中村禮子ぬしのつまをむかへて又さりたる、師君が養子と呼たる、大野さだ子のうせける、加藤のつまの足痛になやむなる、

猶社中にあたらしき弟子のましたるなど種々多かるが中に、舊に依て舊にことならざるは稽古の土曜日なる、日の短長を問はず二題四首詠、花にたはぶれ月をもて遊びうきよはよしや浪たゞばたて風ふかばふけ枕言葉に風情をやしなひ、野川の名處に文學のたらざるをおきなふ仙人界のゞどやかなる、さては梅のや、くちなし園がをかしきなからひなどのみぞことなりたる處もなきや。

もとよりせまからざる家の又去年にことしとたてそへたる室どもかぞふれば十にもちかゝるべし、庭はたくだが手を盡くし、家の内のかざりにこがねをしまねば物とゞのひてたらざる處もなし、身は今よの女傑とたゞへられて、ふるびたる門表にさへ光りある如く、出入くるぬり車につかれをしらず、あやにしきはつんでくらにみつべし、今日は式部長官鍋島侯のもとに祝宴ありとて冬の月よのすさまじからぬほどによそほひをこらせば、こし元はした右左に助けて衣裳つけおごそか也、入てはうやまはれ出ては尊とばれ、かくて天年を終りたまはむには、かしつぎの小枝さへさだまり給へり、何事の思ひあらじとおもふを、猶述懐の詞にいはいはく、あはれ何方の野にまれ山にまれわたり尺なる金剛石一つほり出してし哉、我世を終るまでの財とほしからず持たらんには、うきよを毀譽の外にのがれてこゝろのどかに送りぬべきものを、よに交はればこゝろのほかのへつらひも言はざるべからず、おもひのほかの仕わざをもなすべし、今年二十若からんにはあらん限り力を盡しあらんかぎりの樂をなしたりとも老て

一の樂をこゝろがくべけれど、今さらの齡の末に我力もてわがよをのどかにと願ふとも及ぶべきに非ず、あはれ慾ならねども尺の金剛石は得まほしきぞかしの給へり。

三寸の舌にきよを出してしかも浮よのきよをば厭ひ給へり、何故ぞこゝろの中の金剛石をすて、さのみ野山にもとめ給ふらむ、これをみがばまづしき人をとめる人にいたし、にがりたる身を清らかにもなすべし、たとふるに塵世はくされたるくつの如きか、これが取捨はすべて我こゝろのまゝならずや、有財無財何のかゝはりかあらむ、さるも猶すてがたしとあるはそもやうきよの風情にて、かくてぞ戀を出し、迷ひを出し、義理とからみ、欲となづけ五十歳を苦樂のちまたにさまよわすなれ、おもへば塵中又をかしからずや。

椽に出て見れば黄白のきくにほひこまやかに、露にぬれたるけしきもなつかし、我も昔しはこゝに朝夕をたちならして一度はこゝの娘と呼ぶるゝ斗、はては此庭もまがきも我がしめゆひぬべきゆかりもありしを、今はた小家がちのむさくしき町にかたる乞食など様の人を友として厘をあらそひ毛を論じてはてもなき日を過すらむよ、家においてはさりともおぼえざりし惑の此處の景色にもよふされてにや、何故とはしらず涙さへさしぐまるゝよ。

70 さて何故の涙なるらむ、かくあやにしきのよを経んとならばあながちにくるしみもだへずして過されぬべき一生を我から落て流れゆきし今日、満足の笑みに物おもひあらざるべきをあなたものぐるほしや、我れにこゝろ二つあるか、もしはこゝろに眞偽あるか、こゝろにむかひてこゝろの偽をいふか。

こゝろにいつはりなし、はた又こゝろはうごくものにあらず、うごくものは情なり、此涙も此笑も心の底より出しものならで、情に動かされて、情のかたち也。

師は我が訪ひしを喜びて、とみには行くべき處に出てもやらす、何くれかくれもの語に時のうつるををしみ、我も又たち別るべき方を忘れて今しばしと語る、此中に紙一枚の隔てもなく、師は誠に慈愛深き師也、弟子は誠に温良の弟子也。

かつて浮薄の徒とのしり、偽賢の人とうしろ指さしたる師は何方あげたりけん、をしへにもとり我身をたつる不良の子とあざみし弟子は何方にさりけん。

たとへば魚の水における如く、何故ともしらず愉々快々に半日を暮しぬ、此間のこゝろいにし半井ぬしを訪へる時のおもひにおなじ。

げにや花はさかりに月はくまなきをのみめづるものにあらず、ひとへに相見るをのみ戀といふかは、谷間の水の下にしのび、高峯の花の折られねばこそもだえくてもおもひはますらめ、たとへば芝居に遊ぶ日の見たらん後は見ぬ前にまさりやはする、いにしへ人のいはゆる苦は樂の種ならずして苦中の奥が則樂也。

あらゆるうきよをつまはじきせしも偽り、あらゆるうきよに爪はじきせられしも偽り、おもへば此戀の誠をしらざりしなり、うきよ行く處として善人なからむ、はた又悪人なからむ、萬人が萬人に對しての處爲はしらず、我が見るめひとつにては何方いかなる處にも至美至善なる人はあるべし、我が満足

得んと思はゞつねに満足ならぬほどになしたるぞよき、満足の上に満足あらんやは、もちの夜くもりて月もかくるゝならひぞかし。

十六日 雨。図書館にゆく。

十七日 はれ。

十八日 はれ。禿木子來訪、文界の事につきてはなし多し。

十九日 はれ。神田にかひ出し、明日は二の酉なれば店の用事いそがはし。

文學界に出すべきものもいまだまとまらざる上に、昨日今日は商用いとせわしくわづらはしさたえ難し。

二の酉のにぎはひは此近年おぼえぬ景氣といへり、熊手、かねもち、大がしらはじめ延喜物うる家の大方うれ切れにならざるもなく、十二時過る頃には出店さへ少なく成ぬとぞ、廊内のにぎはひおしてしるべし。

よの中に人のなさけのなかりせばものゝあはれはしらざらましを

二十一日 晴れ。

二十二日 おなじく。

72  
二十三日 星野子より文學界の投稿うながし来る、いまだまとまらずして今兩日は夜すがら起き居たり。

二十四日 終日つとめて猶ならず、又夜と共にす、女子の胸はいとよはきもの哉、二日二夜がほど露ねぶらざりけるにまなこはいとよさえて氣はいよ／＼澄行ものから筆とりて何事をかゝんおもふことはたゞ雲の中を分くる様にあやしうひとつ處をのみ行かへるよ、いかで明日までにつゞり終らばや、これならずんば死すともやめじと只案じに案ず、かくて二更のかねの聲も聞えぬ、氣はいよ／＼澄ゆきぬ、さし入る月のかげは霜にけぶりて朦々朧々たるけしき誠に深夜の風情めにせまりてまなこはいとよさえゆきぬ、かくても文辭は筆にのぼらずとかくして一番どりの聲もきこえぬ、大路ゆく車の音きこえ初ぬ、こゝろはいよ／＼せはしく成てあれよりこれに移りこれよりあれにうつり、筆はさらに動かんともせず、かくて明けゆく夜半もしるく、向ひなる家となりなどにて戸あくる音、水くむなどきこえ初るまに唯雲の中に引入るゝ如く成て、ねるともなくしばしふしたり。

二十五日 はれ。霜いとふかき朝にてふとみれば初雪ふりたる様也。ねぶりけるは一時計成けん、今朝は又金杉に菓子おろしにゆく、寒さものに似ざりき、しばしにてもたましるをやすめたればにや、今日は筆のやすらかに取れて午前の中に清書を終りぬ、郵書になして星野子におくりしは一時頃成しか。

午後禿木子にはがき出す。

菊池隆直殿参らる、隆一君が一周の祭なりとてむしもの到來、廿六日にとて母君を招く。  
廿六日 晴れ。寒し、今朝洲崎辨天町火あり、夜の三時頃よりと聞えしかば過半はやけうせしなるべし、母君正午時より家を出給ふ、留守上野君來訪、あはれなるけしきなり。



廿七日 晴れ。天知子より狀來る、一兩日中に來訪あるべきよしなり。

廿八日 晴れ。國子吉田君を訪ふ、野々宮君のことにつきて悲慘のはなしあり、今日前なる家より小兒の誕生日也とて赤飯送らる、いはるもの持參。

廿九日 晴れ。禿木子より狀來る、歌あり、

音にきくさとのほとりに来てみればうべこゝろある人はすみけり

とやありし、天知子よりの文は詞のたくみあり、ものなれ顔にさら／＼としたるものからいひもてゆけば事好みたらむ様にもみゆる、禿木子のはまだわかやはらかく愛敬ありてとゝのはざるしも末たのもしき様也、今宵くに子と共に吉原神社の縁日みる、例の歌うたひが美音をきく。

三十日 雨。

十二月一日 晴れ。文學界十一號來る、花圃女が文章めづらしくみえたり、山の井勾當がことを書しなるが文辭いたく老成になりてこゝ疵とみゆる處もなくとゝのひゆきぬ、今の世に多からぬ女文學者の中この人などやときは木のたくひには後のよまで傳はりぬべきなめり、おのづから家の筋人さまなどもうちあひて。

孤蝶子がさかわ川、無聲が哀縁などをかきき物なり、哀縁はおきてさかわ川にいん文といふべき物にもあらず、五七の調にてうたふべき様にもあり、淨るりに似て散文體にもあり、今一息と見えたり。いひふるしたるみじか歌の月花をはなれて今のよの開けゆく文物にもなひ難きあまり新體などいふ

も出くめり、もとよりさえかしこく學ひろき人々がものすのなめれど、猶わかう人が手になれるは好みにかくよりすきにへんしてあやしうこと様のものになれるもあり、よに人の指さしわらふもげにと覺ゆることなきにしもあらず、さりとしてみそひと文字の古體にしたがひて汽車汽船の便あるよにひとりうしぐるまゆるゆるとのみあるべきにあらず、いかで天地の自然をもととして變化の理にしたがひ、風雲のとらへがたき、人事のさま／＼なる三寸の筆の上に呼出してしがな、さはいへかくおもふは我人共の願ひなるべけれどそは天才といふ人の世に出ざるかぎり成りたつまじきものなるにや、俗中に風流ある風流のうちには大俗あり、新しい詩歌の俗の様に覺えて、かのみぢか歌のみやびやかに聞ゆるはならはしみのしかるにあらず、人の心に入て人の誠をうたいしかも開けゆくよの觀念にともなはざれば也、詞はひたすら俗をまねびたりとも氣いん高からばおのづから調たかく聞えぬべし、さても學び易くしてうたひがたきは猶この道の奥にぞある。

此夜號外來る、議長不信任問題上奏案の可決したるよし。

二日 晴れ。議會紛々擾々、私行のあばき合ひ、隱事の摘發、さも大人げなきことよ。

半夜眼をとちて靜に當世の有さまをおもへばあはれいかさまに成りていかさまに成らんとすらん、かひなき女子の何事をおもひたりとも猶蟻みゝずの天を論ずるにもにて我れをしらざるの甚しと人しらばいはんなれど、さてもおなじ天をいたゞけば風雨雷電いづれか身の上にかゝらざらんや、國の一隅にうまれ一隅に育ちて我大君のみ惠に浴するは彼の將相にも露おとらざるを、日々せまり來る我國の有さ

一ま川を隔て、火をみる様にあるべきかは、安きになれてはおごりくる人心のあはれ外つ國の花やかなるを、  
全集 葉 をしたひ我が國振のふるきを厭ひてうかれうかる、仇ごころは、なりふり、住居の末なるより、詩歌、  
政體のまことしきにまで移りて、流れゆく水の塵芥をのせてはしるが如く、何處をばとどまる處としら  
ず、かくてあらはれ來ぬるものは何ぞ、外は對韓事件の處理むづかしく、千島艦の沈没も我れに理あり  
て彼れに勝ちがたきなど、あなどらるゝ處あればぞかし、猶條約の改正せざるべからざるなどかく外に  
はさまざまに憂ひ多かるを、内は兄弟かきにせめて黨派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利を  
はかりて公益をわするゝのともがらかぞふれば猶指もたるまじくなん、にされる水は一朝にして清め難  
し、かくて流れゆく我が國の末いかなるべきぞ、外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙あり、印度、  
埃及の前例をきても身うちふるひ、たましひわなゝかるゝを、いでよしや物好きの名にたちてのちの  
人のあざけりをうくるともかゝる世にうまれ合せたる身のする事なしに終らむやは、なすべき道を尋ね  
てなすべき道を行はんのみ、さても耻かしきは女子の身なれど、

吹かへす秋の風にをみなへしひとりはもれぬものにぞ有ける  
四日 晴れ。神田にかひ出しをなす、久し振にて伊東の夏子ぬしを訪ふ、もの語り多くて日没ちかく  
まで話す、宇治拾遺並びに西行選集鈔かり來る。  
七日 晴れ。多町にかひ出しながら喜多川君に菓子箱かてす、歸路奥田は利金入るゝ、此日伊三郎よ  
り金五圓かりる、高利の金にて俗に日なしといふもの也、かゝる事物覺えてはじめての事なり、此夜山

76  
梨縣に手紙出す。  
金子のこと後屋敷に申つかはし、雨宮のもとへも頼み文出す。  
八日 晴れ。母君神田邊より本郷に趣き給ふ、久保木に金子のこといはんとてなり、此日淺草紙二し  
め仕入る。  
伊東君のもとにて聞ける事よ、彼のほし野天知子が今日斯道にこゝろを盡すことの本末もあら／＼知  
られぬ、はやうまだ年などのいとけなかりし時の事也けん、唄ひ女とか聞えし娘にはあるまじき人に迷  
ひて、いか成けるにか遂に狂氣したりけるを、小松川の病院に久しく有ていえたる成りとか、あはれ悲  
戀のこゝろをつねにうたひて文辭の我等が胸をさすも實にかゝればこそかゝるなれとおもひ當りぬ、あ  
はれはかなの人や、今日此ごろのおもひよ、空なる月日の雲はかゝれど霞はおほへど上は明らかにはれ  
たるがごと、たのしみくるしみ身をはなれて一人もの靜にあるべきにや、さらば迷雲折々にかゝりて  
一步地にあり一步天にあり、道の二道を知り絲の黑白をおもひ、なきて然かしていよいよくるしむの人  
か、問ひがたきこゝろの底いよ／＼哀なり。  
十六日 雨宮にはがき出す、かの後屋敷のことたのみやりたるより日かす今日までに成りぬれど、例  
のたよりも聞えざれば其返事聞かんとてなり、さるに日没少し前伊三郎來訪、種々もの語りあり、到底  
郵書の上にて事とゝのふべきにもあらざるべし、一度はかならずかの地に趣かざるべからず、すでに年  
も終りにちかきを來年といはゞ又事のびなん、我も送りてゆかんに日はせまらざるほどになさまほし

77  
全集 葉 記日中塵  
のたよりも聞えざれば其返事聞かんとてなり、さるに日没少し前伊三郎來訪、種々もの語りあり、到底  
郵書の上にて事とゝのふべきにもあらざるべし、一度はかならずかの地に趣かざるべからず、すでに年  
も終りにちかきを來年といはゞ又事のびなん、我も送りてゆかんに日はせまらざるほどになさまほし

一 きを、今日出したる文の返事を取りてなどいはいはななくにうるさし、ゆかば今より直にゆかん、天氣のうれひもあらざるを今宵支度して明日の朝はやくにとすむ、さしもおもひさだめざるほど成しが、母も邦も我も夢の様にてさらば直にと約す、未明に家より出立せんは近き家々がおもはくもいかゞとて、今宵伊三郎が家に泊りてあすもろ共にといふ俄にてまことも覺えぬ様と、伊三郎一あし先に出て母君は邦子が送りてゆく、路金などの事はすべて伊三郎が支度をなしけり。

十七日 寒氣いふべくもなし、母君のことをおもふにくに子も我も終日むねいたみともすれば涙のみなり。

十八日 夕ぐれちかく後屋敷より廣太郎来る、我れよりのふみにつきて雨宮の談もあり、そのまゝ有べきに非ずとて出京したる成るべし、されども請求に對しても異論ありげなる口ぶり見ゆ、何はとまれ此人來べきをしらば母君を長途の旅にも出し參らせじを、雨宮よりも此人よりも一通の狀も來らざりしぞ残りをしきなり、歸りて後邦子とかたる。

十九日 伊三郎が留守宅に利金持參、待ち山に風を仕入る。

母君のもとに一書出さんとおもへど廣太郎が電報をうつべきよしひけるまゝ、さは今日あすがほどには歸り給ふべしとてそのまゝまつ。

78 廿日 まだたよりなし。

廿一日 いまだし、日々夜々に子とかたるは此こと也、たがひに覺つかなさのあまりはものいひす

79 る事もあり、此日頃大方なみだ也。

廿一日 雨宮よりふみ来る、十九日出にしてしかも母君來甲のこと一字もなく、廣太郎が上京の事もなし、談判の都合あしからず、一週間内にはともかくもなるべしとて、かれよりが志しを以て金五圓爲替にて送る、此人に金子かりんとはあらざるを。

廿二日 何事のたよりも聞えず。

廿四日 伊三郎が宅に行く、廣太郎昨日歸郷なしけるよし。

廿五日 伊三郎が妻来る、今日明日には歸京なるべしなど語る。

廿六日 の夕母君歸京、旅づかれもなくいと嬉し、後屋敷にての談判はすべてしるしつくるあたはず、母君が一錢の金をもち歸り給はざるにて大方はしるべし、歸路の路用は字之助よりさし出したるよし。

27日 初雪ふる、母君一日やすみ給ふ、天知子より狀あり。

28日 母君寺參り、伊せ利より通運便にて金子五圓五拾錢來る、奥田の元金井に利金なり、天知子よりもひとしく金壹圓半送り來る、文學界十二號に出したることのねの原稿料なり、平田君より狀來る、今日より大宮の方にゆくよし、新年また逢はんなどあり。

廿九日 奥田に金持參、神田にかひ出しをなし、小石川師君に歳暮の進物持參、くら子どのにあふ、はなし多し、こゝは又別天地なり。

三十日 もちをつく金壹圓、上野君父子歳暮に来る。議會解散。

三十一日 あきなひ多し、二時まで起居る。

廿七年一月一日 あさのほど少し雪ちらつく、やがてはれたり。今日のせわしさとふるものなし、終日くにと我れと立つくすが如し。禮者なし。

二日 おなじく。西村禮に来る、久保木来る。

三日 上野房藏来る、佐久間夫婦来る、同日伊三郎来る。神田へかひ出し。

五日 より常の如し。

六日

七日 芝より兄君来る。むかひがはに同業出来る。

八日 よりあきなひひま也。

十日 平田君より状来る、五日歸京したるよし、今月の双紙にも何か出してくれよとて也。末文に古藤庵無聲が我宅を訪ひ度よしかたりたりとて紹介をなす。

これより年賀の状を出したるは山梨にて野尻兄弟、雨宮、古屋。越後の坂本ぬし、札幌の關場君、東京にては三宅、伊東、田中、半井、櫻井、喜多川君、并びに兄君成り、かれより來たりたるは此人々のほかに志方君などもあり。

十三日 午前星野君はじめて來訪、かねておもひしにはかはりていとものなれがほに馴れ安げの人

也、としの頃は三十斗にや、小作りにて色白く、八丈もめんのかきものに黒もん付の羽をり二重まわしを

はおりて來りき、物語多かりしがさのみはとて。

十四日

十五日 平田君より狀来る、寺住ひの寒さにおそれ、ちかくの横川醫院とかいへるに轉じたるよし、

そのうち訪はんなどありき。

今日をあきなひいと忙し。

十六日 はれ。一日あきなひせはしくして終る、一時の暇なし、坂本君より狀来る、新發田區裁判所の判事に成けるよし、今宵よし原にまゆ玉かふ。

十七日 晴れ。つねの如し、須藤君來訪。

十八日 晴れ。

十九日 はれ。終日何事なし、今夜讀書曉にいたる。

廿日 はれ。植木屋寅次郎来る、午後平田君來訪、文學界寄稿のこと尋ねに成り、露伴子作五重塔男はすべて重兵衛のやうに口かず多からざるぞよき、さればとてこの更につくろひ顔ならんはにくけれど萬こゝろえがほになれ、敷は才たかく學ひろしとても何となくあなどらるゝぞかし、春の花のうるはしきけはあらずとも天雲たな曳くたか山のそとる尊く恐ろしき様にもあり、わづかにあふぎ見る様なる中に何となくなつかしきけしきをふくみたらんぞよき。

二月二日 年始に出づ、きるべきものゝ塵ほども残らずよその藏にあづけたれば、假そめに出んとするものもなし、邦子のからうじて背中と前袖とありさまんにはぎ合せて、羽をりだにきたらましかばふとははぎ物とも覺えざる様に小袖一かさねこしらへ出たり、これをきて出るに風ふくごとの心づかひものに似ず、寒風おもてうちて寒さ堪がたき時ぞともなく冷汗のみ出るよ、此月やいふべき金の何方より入るべきあてもなきに、今日は我が友のうちにてもこしらへ來んとて家を出づ、さはいへど伊東ぬしのもとにはかねてより負財も多し、又我心をなごりなく知りたりとも覺えぬ人にかゝる筋のこと度々いふべきにもあらず、いかにせんと思ふに、かの西村が少なからぬ身代にはらふるを五圓十圓の金を出させなばいつにても成ぬべし、我はもとよりこびへつらひて人の惠みをうけんとはあらず、いやならばよせかし、よをくれ竹の二つわりにさら〜といふてのくべきのみとおもふ、車を坂本よりやとふて先湯島に安達君を訪ひ、久保木がもとに門禮して、直に小石川にゆく、西村には後によとて門をたゞ過ぎにすぐ、師君のもとより車をかへして入るに才子君折よく居合せらる、種々かたる、師君のもの語に三宅龍子ぬし家門を起し給ふこゝろのよし、さるは雄次郎君の内政のいとくるしくたらずがちなるに、例の才女のかゝる方におもむくこゝろ深くかくとはおもひたゞれし成るべし、師は我れにもせちにすゝめ給ふ、いかで此折過さず世に名を出し給はずや、發會當日の諸入用及びすべてのわづらひは憂ふるべからず何方よりも何ともなるべく、かへりては利益のあるべしといとよくすゝめ給ふ、すべて斷りて聞入れねば、師君猶申すべきことあり、そのうち來給へとて今日は末松君にけいこある日なればと出づ、我

れも直に辭しさりて西村にて晝飯、種々ものがたる、金子は明日もやうをつぐべきよし、これより車を神田にはするに藤陰君は根岸に轉居されたるよしにてかひなし、夏子ぬしを訪ふに家をうりて明日明後日のほどには何方へか移られんとていとうろがはしかりしが、此中にてもの語りす、夜ふくるまでありて、車たまはりてかへる。

二月十七日 平田君より狀來る、文學界の投稿うながし來る也、ほし野君よりもおなじことにて狀來る。

十八日 十九日 執筆いそがし、小説花ぐもり四回分二十枚斗なる。

二十日 清書、午後平田君にむけ出す。

二十二日 かみあらひ。

二十三日 根岸に藤陰君をたづぬ、令嬢の別戸されたる物がたりあり、猶文界の事につきてもさまざまありき、今日は本郷に久佐賀義孝といへる人を訪はんのこゝろ成しかばこゝには長くもとまらで出づ、久佐賀はまさご丁に居して天啓顯眞術をもて世に高名なる人なり、うきよに捨ものゝ一身を何處の流にか投げこむべき、學あり力あり金力ある人によりておもしろくをかしくさわやかにいさましく世のあら波をこぎ渡らんとて、もとより見も知らざる人のちかづきにとて引合せする人もなければ、我れよりこれを訪はんとて也。

大阪東區内淡路町二丁目九十三番屋敷

志方 鐵

そなたより訪はずばこれよりもとあるに、

よしいまはまつともいはじ吹風のはれぬをしも我がとがにして

かまくらやまだみぬ友のあたりまでおもかげうかぶ冬のよの月

紅葉がりいざといふべき友もなしきのふもけふも時雨のみして

つゆしづく (二十七年一月)

あしびきの山にも野にもすみてけり光くまなき秋の夜の月

たちまよふ市のちまたの塵のうちにつれなくすめる月のかげ哉

もろともにすめばすまるゝ世なりけり野山の月もおのがこゝろも

水の上にあともとどめぬうたかたのあわにむすべる我がいのち哉

よの中も何かいとはん水の月のとまらぬかげをこゝろにはして

いとふべきほどだにもなしよの中はかぜにむすべる青柳のいと

中島歌子

かぎりなき光をそへてよの中の人のかどみと成し君かな

おもふどちふきはしたるふゑたけのむかしの音こそ戀しかりけれ

くれたけのすぐなりとおもふ我にしもあやしきふしを人はつけり

ある人の来る日をまつとありしかば、

すみよしの松は誠かわすれぐさつむ人おほきあはれうきよに

鶯も聲せぬやどのはるぞとはしらてや梅のかにほふらん

これをだにありしかたみとうつし植ていと涙の軒の梅がえ

梅の花さける斗をはるにしてうぐひすだにもとはぬやど哉

ある折に、

宵々の夢に斗はみえよかしまつには人のつれなかりとも

はかなしや我こゝろからみる夢のたゞさばかりの戀もする哉

今日し又うはの空にて過ぬなりなにおもふらん身としらねども

ある折に、

まくづ原うらみし秋は夢なれやあともあらしのおとのさびしさ

これをしも戀とはいふや山柿のみだるゝ斗むねのくるしき

今はとておもひ絶たる中川にあやしく袖のぬれ渡る哉

おもふ事ありて、

あれぬとてたゞに過なば敷島の歌のあらす田たれかすくべき

すがれよとまねく袂たもともうかりけりひとりやたゝんたゞひとりにて

打寄うちよする波なみにも花はなは咲さものをたゞにくだけてわれやまめやは

いとこのうせたる時

消きにける露つゆの玉たまのをたえてよにあはれ〜といふ人ひとやなき

かたち美みにして才さいたかき女をんなは、よしやしもがしものしなゝりとも、遂つひにあま雲ぐも棚たな引ひ位ゐ山やまのたかきにものぼりがたからじと言いひしに、いなさしもしからじ、そはみさをといふ物ものなき人ひとならてはと邦くに子のいふに、

くれ竹たけのぬけ出いるさへあるものをふしは此こゝよになにさはるらむ

野々宮のゝみや君きみ來き訪ほう、

池いけの面おもにあそぶ蛙かはづのみなれてはしらずがほなるさへぞをかしき

本郷ほんがう龍岡りゅうおう町まち十五番地

市谷いちがや町まち八十五番地

池ノ端いけのはた七軒しちけん町まち三十番地 小島方

日暮里にっぽり村むら妙隆寺みょうりゅうじ内

芝神明しはしんめい町まち二十五番地 古山銓太郎方

本郷ほんがう西片にしがた町まち十番地二ノ二十二號

三番丁さんばんぢやう四十三番地に轉居

本郷ほんがう真砂まご町まち三十二番地

馬場ばば勝かつ彌や  
孤こ蝶てつ子こ

稻葉いなば寛かん

平田ひらた喜き一いち

山下やまの直な一いち

菊池きくち隆たか直な

久佐くさ賀か義ぎ孝こう



日記ちりの中

(二十七年二月—三月)

90 ひるは少し過たるべし耳なれたるとうふうりの聲の聞ゆるに、おもへば菊坂の家にてかひなれたるぞれなりけり。あふみ坂上の静かなる處ぞ眞砂町三十二番地と人をしゆるまゝに、とある下宿屋のよこをまがりて出ればやがてもと住ける家の上なり。大路よりは少し引入りて、黒ぬり塀にかしの木の植込みえたる、入るべき小道にしるしの招たて、雨露にさらされたれば、文字はうすけれど天啓顯眞術會本部とよまれたるにぞ此處也とむねとどろく、入りて玄關におとなへば、おうとあらゝかに答へて、書生成べし十七八の立ながら物いふ男二間なる障子を五寸斗あけてものいふ、下谷邊より参りたるものなれど先生にこまゝお物語せまほしく御人少なゝる折に御見ねがひたければ何時出でしかるべきにや、お取次給はるべしといへば、鑑定にはおはしませずやととふ、いな鑑定にはあらずといふ、さらば事故にこそ御名前はと又とふに、はじめて出たるなれば通じ給ふとも名前の甲斐はなけれど秋月と申させ給へとこたへけり、男入りてしばしもあらず出て來つるが、何の事故にや師は只今直にてもよろしとあるこゝろ安きに先うれしくて、さらばゆるし給へとみちびかる、襖一重のそなたは其鑑定局なるべし、敷つめたる織物の流石に見にくからず、十疊斗なる處に書棚ちがひ棚、黒糊など何處の富家よりおくられ

91 けん、見るめまばゆし、額二つありしが、一つは靜心館とやありし、今一つは何成けん、床は二幅對の絹地の畫也、床を背にして大きやかなる机をひかえ、火鉢の灰かきならし居るは其人ならん年は四十斗りにや小男にして音聲靜かにひくし、机の前に大きな火桶ありて、そが前にしとね敷たる、それにせよとてしきりにすゝむ、我も彼れもしばしは無言成しが、いでや御はなし承はらん、何等の事故おはしますにやとかれより問ひ出づ、つれづれの法師が詞に、名を聞よりやがて實はおもひやられるれど、逢見れば又おもふ様のかほしたる人ぞなきとありしが、げにしかぞかし、さればかくいはんといはんとおもひまうけしことは、時にあたりてさもいふまじきこともあり、さらに我がわねを開くこともありかし、先はことに先だちて申すべきはおしかけに參ての罪あさからざると、女子の身にてきまりをこえのりのほかにしりなど、聞給ひてはものぐるはしとやおぼし給はん、それには故ありもとあり、天地ををさめ給らんとおもふそのひろやかなる御胸のうちに、愚言の愚なるも、卑言のさもしきも捨て給はず、愛憎好惡さまんの塵あくたの外に埋もれながら一節きえぬ誠のこゝろを聞しめして、おぼしめし給ふ處を仰せ給はらば嬉しかるべし、我れはまことに窮鳥の飛入るべきふところなくして、宇宙の間にさまよふ身に侍る、あはれ廣き御むねのうちにやどるべきとまり木もや、まづ我がことを聞きたまふべきやといへば、よし、おもしろし、いで聞かんと身をすゝます、我身父をうしなひてことし六年、うきよのあら波にたゞよひて、昨日は東今日はにし、あるは雲上の月花にまじはり、或は地下の塵芥にまじはり、老たる母、世のことしらぬいもとを抱きて、先こそまでは女子らしき世をへにき、聞たまへ先

92

一生、うきよの人に情はなかりけるものを、わがこゝろよりつくり出たのもしき人とたのみ、にござるよをも清める物とおもひて、我れにあざむかれてこゝに誠を盡しにき、一朝まなこの覺めぬるは、我が宇宙にさまよふのはじめにして、人しらぬくるしみ此時より身にまつはりぬ、あえなくはかなく淺ましき物とおもひ捨て、今は下谷の片ほとりにあきなひといふもふさはしかるまじきいさゝか成る小店を出して、こゝを一身のとまりと定むれど、なぞやうきよのくるしみのかくて免がるべきに非らず、老たる母に朝四暮三のはかなきものさへすゝめ難くて、我がはらからの佗び合へるはこれのみ、すでに浮世に望みは絶えぬ、此身ありて何にかはせん、いとをしとをしむは親の爲のみ、さらば一身をいけにゑにして運を一時のあやふきにつかた、相場といふこと爲して見ばや、されども貧者一錢の餘裕なくして我が力にて我がことを爲すに難く、おもひつきたるは先生のものと也、窮鳥ふところに入たる時はかり人もとらずとかや、天地のことはりをあきらめて、廣く慈善の心をもて萬人の痛苦をいやし給はんの御本願に思し當ることあらば教へ給へ、いかにや先生、物ぐるはしきこゝろのもと末、御むねの内に入たりやいかにと問へば、久佐賀はしばし我おもて打ながめて打なげくけしきに見えしが、年はいくつぞ生れはと問ふ、申歳生れの二十三にて三月二十五日出生といへば、さても上々の生れかな、君がすぐれたる處をあげたらば、才あり智あり物に巧あり、悟道の方にもゑにしあり、をしむ處は望みの大に過ぎてやぶるゝかたち見ゆ、福祿十分なれども金錢の福ならで、天稟うけ得たる一種の福なればこれに寄りて事はなすべきにこそ、商ひと聞だに君には不用なるを、ましてや賣買相場のかちまけをあらそふが如きは

中のり記日

93

さえぎつて止め申へし、あらゆる望みを胸中よりさりて終生の願ひを安心立命にかけたるぞよき、こは君が天よりうけたる天然の質なればといふ、をかしやな、安心立命は今もなしたり、望みの大に過ぎてやぶるゝとは何をかさし給ふらん、五うん空に歸するの曉は誰れか四大のやぶれざるべき、望も願も夫までよ、我が一生は破れくゞて道端にふす乞食かたるの夫こそは終生の願ひ成けれ、さもあらばあれ、其乞食にいたるまでの道中をつくらんとて朝夕もだゆる也、つひに破るべき一生を月に成てかけ、花に成て散らばやの願ひ、破れを願ふほかにやぶれはあるまじやは、要する處は好死處の得まほしきぞかし、先生久佐賀様、此の好死處をしへ給らずや、世に處す道のさまゝもうるさし、おもしろく花やかにさわやかなの事業あらばをしる給へとやう／＼打笑みて語り出れば、其處也、そこ也と久佐賀もあまたたび手をうつ、されども圓滿を願ふはうきよのならひにして、圓滿をつかさどるは我がつとめなり、破れの事は俄かに語るべからず、そも君は何を以て唯一のたのしみと覺すぞや、それ承んとある、錦衣九重何かたのしからん、自然の誠にむかひて物いはぬ月花とかたる時こそうきよの何事も忘れはてて、造化のふところにおどり入ぬる様には覺ゆれ、此景色にむかひたる時こそとたふ、あはれ自然の景を人間にうつして御覽ぜよ、はじめに我が性の偶然ならざるを知り給ふべし、あやめ、撫子さまさまの性をうけて、おのがさまゝにほひ出る、これこそは世の有様なれ、草木に植時の機あるをしれど、人の事業に種まきの機節をはからざるはいと愚ならずや、遠因近因來る處一筋ならず、人々只今の苦を知りて、根原の病ひをしらざれば、もだえはいたづらに空に散じてつるにもとをいやすによしなし、人

一 さかりにしては天の力も及ぶかたなし、盛なる時は我があづかりしる處ならず、我れは精神の病院に成  
て、痛苦の慰問者にて、人世のくずやになりて、ぼろ、白紙、手ならひ草紙、あれをもこれをもちひ  
集 全 葉 あつめ、撰分て其むき／＼の働きを爲させんとす、ぼろとすてたりける小袖のちぎれも道に寄てすきか  
へさば、今日有用の新紙と成ておほけなき御前に出る折もあり、ふるきをかへして新たに破れをと  
のへてまつたふするは我が役なり、のたまふ處は我が賛成する處にして、君が性は我が愛し度本願にか  
なへり、月花を愛し給ふ心の誠をもとゝしたらば、其ほかの出来ごとは瑣事ならずや、小さき憂の大き  
に身にかゝるは日々々の運用よろしからざるによる、運用の妙はこゝにありてしかも運用はたやすき物  
也、本源のさとり開かれぬる後に日々々の運用何事かはあらん、さりながら、人を知る人の我を見るは少  
なきがごと、本原は知るといへども枝葉にまよふはこも又無理ならざる處ぞかし、我が會員日本全國三  
萬にあまれり、その人々個々一様ならず、事によりては我れにまされるもあり、我れより師とあほぐも  
あれど、三世にわたり一世を合するは又別物にしてと、かたり来る久佐賀もいよくこと多く成て、會  
員のもの語、鑑定者のさま／＼、談じ來り談じさり、語々風を生ず、我れも人も一見舊識の如し、もの  
がたり四時にわたる、其うち會員の質問に來たりしもの一人あり、大阪米相場の高下電話にて報じ來た  
るなど、ろうがはしく成ぬるに、時もはや日暮れに成りぬ、我れもいさゝかかんがふべき事など聞き出  
たるに、今日はこれまでとてたつ、後藤大臣同じく夫人の尊敬一方ならざるよし、および高島嘉右衛門、  
井上圓了が哲學上の談話など、かたること多かりし。

二十五日 西村君來訪、午後まではなす、平田君來訪されたるより前者はかへる、例のせまやかなる  
部屋の内に物がたること多し、五時まで遊ぶ。女學雜誌に田邊龍子、鳥尾ひろ子のならべて家門を開か  
るゝよし有けるとか。萬感むねにせまりて、今宵はねぶること難し。

二十六日 星野君來訪、文學界十四號原稿料持參、社を當月より三の輪にうつされたるよし、車を待  
たせて直に歸宅す。

二十七日 田中君を牛込に訪ふ、新小川町を轉じてつくど前にうつりたるを知らざりしかば尋ね佗に  
たり、柴又に參詣して留守也、されども切に逢はまほしきことあれば、此まゝに歸らむをしく、さら  
ば神田にかひ物して又更にこんとて出づ、多町に手遊類かひて又こゝにかへる、田中君歸宅を待てかた  
る、伊東のぶ子君も折ふし來訪、談は中島の師が上なり、品行日々にみだれて、吝いよ／＼甚だ敷、歌  
道に盡すこゝろは塵ほども見えざるに、弟子のふえなんことをこれ求めて、我れ身しりぞきてより、新  
來の弟子二十人にあまりぬ、よめる歌はと問へば、こぞの稽古納めに歌合したる十中の八九は手にはと  
とのはず、語格みだれて歌といふべき風情はなし、座に他の大人なかりしこそよけれ、なげかはしきお  
とろへ方と聞ゆ、田中君などが詠草一月にも十月にも満ぞくに直しなど興へられたる事なしといふは偽  
のみにもあらざるべし、かねて我が上にも知ることなれば、かゝるが中にこの有様を知りつくしたる龍  
子ゆしがこれに身を投じて家門を開かんとすと聞こそおぼろげのかんがへにはあらざるべし、秋の紅葉  
のさかりは今一時なる師が袖にすがりて我世の春をむかへんとするの結構、此間にかならずあるべし、

鳥尾ぬしがことはもとより論ずるにたらず、師が甘き口に酔ひて我が才學のほどをもおもはずうきよに笑ひ草の種やまくらん、すべててんぐがたきの世とかたる、いでさらば何事をも言はじおもはじ、我はもとよりうきよに捨て物の一身を何のしわざにか歎くべき、田中ぬしはしからず、なまなかあらはし初たる名を末弟におされて、朝の霜の此まゝに消なんはいかに口をしからずや、師に情なく友に信なくとも、何か又そは厭ふにたらず、念とする所は君が手腕のみ、うきよは三日みぬ間の櫻なれば君もむかしの君ならで歌學大にあら給ひしか知らねど、我が知りたるまゝならば、此世はとまれ、天下後代に残してそしりなきほどの詠あるべしとも覺えず、いかで萬障をなげうちて歌道に心を盡し給はずや、我れもこれより君が爲におよぶ限りの相手にはなるべし、かずよみをもなし、各判をもなし、論議辯難もろ共にみがうてやは、我は今まで小商人の、歌よむことをもなさざりしかと、君は常におこたりなくつとめ居たまひしに相違あるまじきが、玉をみがくに他山の石を以てすとか、一人にてはいかてかとす、む、君にそのこゝろおはしませば我が喜びは上もなきぞと田中ぬし喜ぶ、此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるこゝろならぬはしれど、おもて清くしてうらにけがれをかくす龍子などのにく、いやしきに、よしけがれはけがれとして、多數のすてたる此人にせめては歌道にすゝむ方だけをはげまさんとて也、右もにこれり、左もにこれり、師も龍子も此人も何れにのりのうちなるを、あれをすてゝこれをたすくるは、時のよはきを見るにしのびず、人はたのまぬ義をおこして、我れから苦悶に身をなやます我が浅はかさあはれむにたえたり、ものがたること多くして日も暮れぬ、車をもて送られぬ。

二十八日 早朝久佐賀より書あり、君が精神の凡ならざるに感ぜり、爾來したしく交はらせ給はゞ余が本望なるべしなどあり、頃日臥龍梅満開の時なるにいかで同行して天地の花時と人生の花時をならべ賞せんはたのしからずや、適日を期して返章を賜はらん事をとあり、又別紙に、君がふたゝび來たらせ玉ふをまちかねてとて歌あり、

とふ人やあるとこゝろにたのしみてそゞろうれしき秋の夕暮

歌もよからず、手もよく書たりとは見えねど、才をもて一世をおほはんの人なるべし、梅見の同行はかれに趣向あるべし、我れは彼れが手中に入るべからずとほゝ笑みて返事したゝむ、貧者餘裕なくして閑程の天地に自然の趣をさぐるによしなく、御心はあまたゝび拜しながら御供の列にくわゝり難きをさる方に見ゆるし給へ、よしや袂にあまる梅がゝは此處に縁なくとも、おこゝろざしを月とも花とも味はひ申すべく、不日參上御をしへをうけんとして、かへしならねどかくなん、

すみよしの松は誠か忘れ草つむ人多きあはれうきよに

二月一日 文學界十四號來る。早朝田部井より狀來る、妻の急病にてうせたるよし、すべて夢かとおきる、母君直に吊ひにゆく。

二日 曇り。かしらなやましくて終日打ふす。夕刻號外來る、衆議員當撰者の報なり。

三日 小雨ふる。

此ほどすべてことなし。

九日 雨。今日は銀こんの大典也、都市府縣をこなべて、こゝろくの祝意を表するに狂するが如しとか聞しが、折あしき雨にて、さのみはにぎはしからぬやにきく。菊池の奥方高齡をもて恩賜金をたまはりたるよし、亡老君の五年祭をかねて祝義あるべきよし沙汰ありければ母君いはる物もちゆく、歌一首をそふ、

めづらしき御いはるにさへ逢にあひて君かさぬらん千代も八千代も

よからねどかくなん。此夕べ樋口くら来る。

十日 くら逗留。雨天。

十一日 おなじく雨天。山下直一君死去の報来る、すべて夢とのみあきる。

十二日 母君山下君を吊ふ。おくら猪三郎のもとにゆく。禿木子及孤蝶君來訪、孤蝶君は故馬場辰猪君の令弟なるよし、二十の上いくつならん、慷慨悲歌の士なるよし、語々癖あり、不平々々のことばを聞く、うれしき人也。

數よみ、

春雨十首

朝春雨

ふしながら聞しはいつぞ朝市のたちるくるしき春雨の空

夜春雨

春雨のおとを枕にきくよ半ぞむかしの花の夢はみえける

對二春雨一言志

あづさゆみやよ春雨にもものはむめぐむは露の草木ばかりか

田家春雨

たち出てみれば春雨かすむ也わがせやかへる小田の中道

閑居春雨

春雨のふる物がたりきかせてん小窓までこよ庭の鶯

十三日 晴れ。眞砂町に久佐賀を訪ふ、日没歸宅。おくらいまだ歸らず。

十四日 田中君を訪ふ、かずよみせんとて也、夕べはがきを出したれど引ちがひてかれよりも文を出したるよし、今日は小石川師君と共に鍋島家に參賀の事ありとて支度中也、例の龍子ぬしが一條、いよ二十五日發會と發表に成ぬ、されば右披露をかねて鍋島家の恩顧をあほがん爲、今日の結構はある也けり、田中ぬし出てさらし後、一人残りて暫時かずよみず、題は三十題成し。醜聞紛々、田中君の内情みゆる。

中根岸町二十六番地

藤本藤陰

上根岸町三十九番地

芝濱松町一丁目十五番地

中根岸町八十一番地

佐藤東

山下信忠

井岡大造

いはでもの記

(二十七年三月)

よき衣裳して似つかぬ人あり、さるは下さまのやつ／＼敷なへたるなどをめしたるぞよき、身にそなはらぬは、よきに過るもあしきに過ぐるもよからぬもの也。

申々におもふ事はすてがたく、我身はかよわし、人になさけなければ黄金なくして世にふるたつきなし、すめる家は追はれなんとす、食とぼしければこゝろつかれて筆はもてども夢にいる日のみなり、かくていかさまにならんとすらん、死せるかばねは犬の糸じきに成りて、あがらぬ名をば野外にさらしつ、千年の後萬年の春秋、何をしるしに此世にとむべき、岡邊のまつ風にうらむは同じたくひの人の末か、わびし。

記のもてはい

ふみもて来てさる人のこれあきらめさとし給へといふ、何ぞととへば、貝原益軒、室鳩巢などが書ける書どもなり、よみもてゆくに、たど／＼敷ところのみぞ多かる。

塵の中日記

(二十七年三月)

日々につり行こゝろの、哀れいつの時にか誠のさとりを得て、古潭の水の月をうかべるごとならんとすらん、愚かなるこゝろのならひ、時にしたがひことに移りて、かなしきは一筋にかなしく、をかしきは一筋にをかしく、こしかたをわすれ、行末をもおもはて身をふるまふらんこそうたても有けれ、こころはいたづらに雲井にまでほりて、おもふ事はきよくいさぎよく、人はおそるらむ死といふことも唯風の前の塵とあきらめて、山櫻ちるをことほりとおもへばあらしもさまでおそろしからず、唯此死といふ事をかけて、浮世を月花におくらんとす、ひとへにおもへば其いにしへのかしこき人々も此願ひにほかならじ、さる物から、おもふまゝを行なひておもひのまゝに世を経んとするは大凡人の願ふ處なれど、さも成がたきことなれば、人々身を屈しことをはどかりて、心は悟らんとしつゝ、身は迷ひのうちに終るらんよ、あはれはかなしやな、虚無のうきよに○もなし○もなし、○といふそもく、偽也、○といふも又偽也、いつはりといへどもこれありてはじめて人道さだまる、無中有を生じてこゝに一道の明らかなるものあれば、人中に事をなさんとくはだつるものかならず人道に寄らざるべからず、天地ことくくのみ盡して有無兩端をたなぞこににぎりたりとも、行はざる誠は人みるによしなし、我身

きよしといへども、感は人のこゝろにありて耳にあらねば、かひなきは放言高論のたぐひなり、世に文章家といふものありて、華文麗辭をつらぬるによく、和歌俳句たくみに詠ずるもあり、又辯士とて悲歌慷慨の語をなして一時の感を起すもあめり、さる物からこれ等はくくつの木偶をまはして人めをよろこばしむるたぐひにも似て唯一時のよろこびばかりならんのみ、一時におこりたる感は一時にして消えぬべし、一代をつゝみ百世に残りぬべきわざをとおもふに、事は我身にありて人にあらず、我み清しとて人をおとすはまだよし、人を論ずるを知りて我身の誠をあらはすをしらず、國政をそしり大臣をなみし大家名流の非をあげてあげつろふとも、かれは耳目にあらはれたる人なり、これは唯ひとつの口を動かすのみ、いかに又みにくからずや、こゝろは天地の誠を抱きて、身は一代の狂人になりも終らば、人に益なくうきよに功なく、清濁いづれをまされりとせんや、さればいにしへのかしこき人はこゝろの誠をもとゝして人の世に處するの務をばげみたりき、つとめは行なひ也、行は徳也、徳つもりてはじめて人の感おこる、此感一代をつゝみ百世に渡り、風雨霜雪やぶるによしなく、一言一世に功あり、一語人に益あり、こんくたる流れは濁を清にかへして人生是非の標準さだまらんとす、我一身の欲をすて、たのしみを捨、しかして後にわがおもふまゝの世を得んとす、花をも實をもはじめより得んとしてはいかてか得んと、かき置し人も有をや、机上の論はもと虚にあらず、虚にあらずと雖行ひ熟ざれば實といふを得ず、論者はおこなはず、おこなふものはいはず、いはずといへどもおこなひのあとはいかづやはする、是れを百世に残すといへども、必竟は虚也、無なり、天地の誠は虚無のほかにあるべからず

といへども、人世の誠は道徳仁義のほかにあらず、これをたつとんでかれをすつるは愚也、かれを取らてこれに背もいまだし、虚は空にして實は存す、無はうらにして有は表也、四時の順環、日月の出入、うきよはひとりゆかず、天地はひとり存せず、地に花あり天に月あり、香は空にして色は目にうつる、あれも小とし難く、これも大とはいひ難し、されば人世に事を行はんもの、かぎりなき空をつゝんで限りある實をつとめざるべからず、一時の勇はいまだ勇といふべからず、一人の敵とさしちがへたらんは一軍にいか斗のこうかはあらん、一を以て十にあたるいまだし、萬人の敵にあたるはかの孫吳の兵法にあらずや、奇正此内にあり、變化運用の妙天地をつゝんでしかも天地ののりをはなれず、これをしるものは偉大の人傑となり、これをうしなふものは名もなき狂者となる、さるからに法は奇にして濁にあらず、清流一貫、古來今にいたる、おもへば聖者は行みづのながれの、とどこほる所なからんぞうら山しき。

魚だにもすまぬかき根のいさゝ川くむにもたらぬところ成けり

十四日 おくら丸茂醫學士のもとにゆく、幸作が件につきて也。

十五日 雨。丸茂の事件こと故なくとゝのひぬれば、おくら歸國の途につく。

十六日 はれ。吉原神社祭典、にはか出来る、此夜母君とゆく。

十七日 はれ。廣瀬伊三郎来る。お倉が事情をきく。

十八日 はれ。久保木姉君并びに秀太郎來訪。平田君よりはがき来る、本月の文學界寄稿可成澤山に

104 得まほしきよし、二十一日頃までといふ孤蝶子の傳言、ならびにその身も學校のいそがしさ片づき次

第とはんなどあり。

十九日 はれ。木村ちよ殿来る、酒肴を出す、當人の頼に寄てなり、同じくたのまれて小堀何某、長

堀何がしにはがき出す。



## 塵中につ記

(二十七年三月—五月)

おもひたつことあり、うたふらく、

すきかへす人こそなけれ敷島のうたのあらす田あれにあれしを

いでやあれにあれしは敷島のうた斗か、道徳すたれて人情かみの如くうすく、朝野の人士私利をこれ事として國是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん、かひなき女子の何事を思ひ立てりとも及ぶまじきをしれど、われは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず、かすか成といへども人の一心を備へたるものが、我身一代の諸欲を残りなくこれになげ入れて、死生いとはず、天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も、男も女も、何のけぢめか有るべき、笑ふものは笑へ、そしるものはそしれわが心はすでに天地とひとつに成ぬ、わがこゝろざしは國家の大本にあり、わがかばねは野外にすてられてやせ犬のゑじきに成らんを期す、われつとむるといへども賞をまたず、勞するといへどもむくひを望まねば、前後せばまらず、左右ひろかるべし、いでさらば分厘のあらそひに此一身をつながるべからず、去就は風の前の塵にひとし、心をいたむる事かはと、此あきなひのみせをとちんとす。

國子(くにこ)はものにたえしのぶの氣象とほし、この分厘(ぶんりん)にいたくあきたる比(ひ)とて、前後(ぜんご)の慮(おもんばかり)なくやめにせばやとひたすらすむ、母君(ははきみ)もかく塵(ちり)の中(なか)にうごめき居(ゐ)らんよりは小(ちひ)さしといへども門構(もんがま)への家(いえ)に入り、やはらかき衣類(いりょう)にてもかさねまほしきが願(ねが)ひなり、さればわがもとのこゝろはしるやしらずや、兩人(ふたり)ともにすむる事(こと)せつ也、されども年比(としご)り盡(つ)し、かり盡(つ)しぬる後の事(こと)とて、此(こ)みせをとぢぬるのち、何方(いつかた)より一錢(せん)の入金(にゅうきん)もあるまじきをおもへば、こゝに思慮(しりょ)をめぐらさざるべからず、さらばとて運動(うご)の方法(はうほう)をさだむ、まづかち町(ちやう)なる遠銀(えんぎん)に金子(きんす)五十圓(ごじゅうげん)の調達(てうたつ)を申(まを)しむ、こは父君(ちちきみ)存生(ぞんじやう)の比(ひ)よりつねに二百(にひゃく)の金(かね)はかし置(お)きたる人(ひと)なる上(うへ)、しかも商法(しょうぽう)手(て)びろくおもてを賣(う)る人にさへあれば、はじめのことゝてつれなくはよもとかゝりし也、此(こ)金額(きんがく)多(おほ)からずといへども、行先(ゆきさき)をあやぶむ人は、俄(にわか)にも決(けつ)しかねて、來月花(らいげつはな)の成行(なりゆき)にてといふ。

廿六日(にじゅうろくにち) 半井ぬしを訪(たず)ふ、これよりいよく小説(せうせつ)の事(こと)ひろく成(な)してん(ん)のこゝろ構(がま)へあるに、此人(このひと)の手(て)あらば一(ひと)しほしかるべしと、母君(ははきみ)もの給(たま)へば也、年比(としご)りのうき雲(くも)唯(ただ)家のうちだけにはれて、此人(このひと)のものとを表(あらわ)だちてとはるゝ様(よう)に成(な)ぬるうれしとも嬉(うれ)し、まづふみを參(まゐ)らせて在宅(ざいせ)の有無(うむ)を尋(たず)ねしに、病氣(びやうき)にて就(す)幕中(まくちゆう)なれどいとはせ給(たま)はずはと返事(へんじ)あり。

此日(このひ)、空(そら)もようよろしからざりしかど、あづさ弓(ゆみ)いる矢(や)の如(ごと)き心(こゝろ)のなどしはしもとどまるべき、午後(ごご)より出(い)づ、君(きみ)はいたく青(あお)みやせて、みし面(おも)かけは何方(いつかた)にか残(のこ)るべき、別(わか)れぬるほどより一月(ひとつき)がほどもよ

き折なく、なやみになやみてかくはといふ、哀れとも哀也、物がたりいとなやましげなるに、多くもな  
さてかへる。

廿七日 小石川に師君を訪ふ、田邊君發會昨日有べき筈の所、同君病氣にてしばしのびたるよし、その  
席に我上をも、いかで斯道に盡したらんにはなど語らる、我が萩の舎の號をさながらゆづりて我が死  
後の事を頼むべき人門下の中に一人も有る事なきに、君ならましかばと思ふなどいとよくの給ふ、ひた  
すら頼み聞え給ふに、これよりも思ひまうけたる事也、さりとはもらさねど、さまざまに語りてかへ  
る。

廿八日 母君は音羽町佐藤梅吉に金策たのみに行、むづかしげ也しかば、歸路西村に立よりて、我中  
鳥の方へ再度行べきよしを物がたりて金策たのむ、直にはむづかしげにみえしとか聞しが、母君歸宅直  
に車を飛して釧之助來訪、金子の員を問ふ、その親などにはいければ成べし。

108  
四月に入りてより、釧之助の手より金子五拾兩かりる、清水たけといふ婦人かし主なるよし、利子は二  
十圓に付二十五錢にて、期限はいまだいつとも定めず、こは大方釧之助の成べし。  
かくて、中島の方も漸々歩をすゝめて、我れに月々いさゝかなりとも報酬を爲して手傳ひを頼み度よ  
し師より申こまる、萬事すべて我子と思ふべきにつき、我れを親として生涯の事を斗らひくれよ、我が  
此萩の舎は則ち君の物なればといふに、もとより我に大任を負ふにたる才なければそは過分の重任なる  
べけれど、此いさゝかなる身をあげて歌道の爲に盡し度心願なれば、此道にすゝむべき順序を得させ給

はらばうれしとて、先づはなしはとゝのひぬ、此月のはじめよりぞ稽古にはかよふ。

花ははやく咲て散がたはやりけり、あやにくに雨風のみつゞきたるに、かぢ町の方上都合ならず、  
からくして十五圓持參、いよゝゝ轉居の事定まる、家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、  
さゝやかなる池の上にたてたるが有けり、守喜といひしうなぎやはなれ座敷成しとて、さのみふるく  
もあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ。

店をうりて引移るほどのくだゝ敷、おもひ出すもわづらはしく、心うき事多ければ得かゝぬ也。

五月一日 小雨成しかど轉宅、手傳は伊三郎を呼ぶ。  
二日 小石川師君を訪ふ、轉居のことかたる、歸路西村にも報ず、いづれもそのすみやかなるに驚か  
る、久保木にも一兩日過ぎてしらす、驚のほどしるべし。

千束町二丁目三十五番地  
小石川餅差町十八番地

三番丁四十三番地

千束町二丁目三十五番地

今村けい

菊池隆直

廣瀬伊三郎

水の上

(二十七年六月―七月)

四日 ばれ。午後より小石川亡老君の墓参をなす、天王寺也、きのふ三年の祭成しを得ゆかざりしかば、邦子と共に参る也、墓前に花を奉り、静に首をあげてあたりをみれば、何方より來にけん小蝶二つ、花の露をすひ、石面にうつり、とかくさりやらぬさま哀れにもさびし、邦子としはしこゝにかたりて、それより寺内を道ゑうす、雲井龍雄の碑文などをみる、夕日のかげくらく成ほど雨雲さへおこりたちて、空の色物すさまじきに、そゝやといそぐ、團子坂より藪下を過ぎて根津神社の坂にかゝる、のぼり口の左手にさゝやかなる枝折戸して黒木の階段かうくしくふりたる庵の有けり、二十二宮人丸とかきたる文字も故ありげなるに、邦子は常にかゝる方をあやしきものにいひくだせば、ひたすらにこれを笑ふ。

110 五日 かの丸の異様成しがこゝろにかゝれば、かゝる處に又おもしろき人もやとてその庵を訪ふ、異談一ならず物語をかしかりき、人はいくつ斗にや、髪ながく髻しろく、なへばみたる小袖の長やかなるを着たり、家は三間なれど、天井もなくくりやめく物もなし、雨戸といふ物一ひらもなく、雨風はいかにしのぐらん、あやし、七八年を遊歴に送りて、この庵へはをとゝし斗よりときく、訪人ありとて

111 も、我が厭ふべきには逢はずとて、門にそのよしかいしるしあるも、さのみはいかてとをかし、しばし有けるほどに、人の來たりければ又とてかへる。

世はいかさまに成らんとすらん、上が上なるきはに此人はと覺ゆるもなく淺ましく憂き人のみ多かれば、いかで埋もれたるむぐらの中に共にかたるべき人もやとて此あやしきあたりまで求むるに、すべてはかなき利己流のしれ物ならざるはなく、はじめは少しをかしとおもふべきも、二度とその説をきけば、厭ふべくきらふべく、そのおもてにつばきせんとおもふ斗なるぞ多き、かつて天啓顯眞術會本部長と聞えし久佐賀のもとに物語しける頃、その善と惡とはしばらく問はず、此世に大なる目あてありて身を打すてつゝ一事に盡すそのたくひかとも聞けるに、さてあまたゝびものいふほどにさても淺はかに小さきのぞみを持ちて唯めの前の分厘にのみまよふ成けり、かゝるともがらと大事を談じたらんはおさな子にむかひて天を論ずるが如く、勞して遂に益なかるべし、おもへば我れも敵をしらざるのはなはだしさよと我れをさへあざけらる。

九日成けん、久佐賀より書狀來る、君が歌道熱心の爲に、しか困苦せさせ給ふさまの、我一身にもく水らべられていと憐なれば、その成業の曉までの事は我れに於ていかにも爲して引受べし、され共唯一面の識のみにて、かゝる事をたのまれぬともたのみたりともいふは、君にしても心くるしかるべきにいでやその一身をこゝもとにゆだね給はずやと、厭ふべき文の來たりぬ、そもやかものしれ物、わが本性

一をいかに見るにかあらん、世のくだれるをなげきてこゝに一道の光をおこさんとこゝろざす我れにして、唯目の前の苦をのがるゝが爲に、婦女の身として尤も尊ぶべき此の操をいかにして破らんや、あはれ笑ふにたえたるしれものかな、さもあらばあれかれも一派の投機師なり、一言一語を解さざる人もあらじとて、かへしをしたゝむ。

一道を持って世にたゝんとするは君も我れも露ことなる所なし、我れが今日までの詞、今日までの行もし大事をなすにたると見給はゞ扶助を興へ給へ、われを女と見てあやしき筋になど思し給はらばむしろ一言にことわり給はんにはしかず、いかにぞやとて、明らかに決心をあらはしてかなたよりの返事をまつ。

文を出すの夜返事來る、おなじ筋にまつはりてにくき言葉どもをつらねたる、今は又かへしせじとてそのまゝになす。

かの人丸も我家を訪ひたり、かゝる人に似合はしからずと見ゆるは、かへすゝ我れを浮世の異人なるよしとて、長き交際を結ばまほしきよしなどいふ、おもしろからぬ者ども也。

四日 出づ、この日は田中ぬしが發會なりければ、手傳ふ事多かる身は朝よりゆく、來會者二十三人は有けり、人々かへりて後しばし小出ぬしとかたる、切に歌をよむべきよしすゝむ、君が業とする著作の事もとよりあしからず、そはおもしろかるべけれど、小説は書く人世に猶ほ多かるべし、歌道はし

からず、今の此よに天然の歌才を得て一身をこれに打入れて世にたゝんとする人かつふつ有ことなし、されば中島の社中人多しといへども、我みたる所にて君を置いてこれかと思ゆるもなきに、君にしてふるひ給はゞかならず千載に名をのこして不朽の事業たるべしとおもふに、いかで世にたち給はずやとすゝむ、歌論もさまざまありける中げにとおぼゆるふし少なからず、此人よろしからぬ人なれど、さすがに一ふしと見ゆる説ども聞ゆ。

十五日 師君のもとにて前田家たのまれの詠草をしたゝむ、奥方の也。

十六日 早朝禿木子來訪、天知君より文あり、花ごもり二度目の原稿料送りこさる、禿木君も學校のいそがしき頃とてはやくかへる。われは小石川稽古にゆく。

此日三宅龍子ぬしより使にて依縁軒漫録かさる、坪内ぬしよりかりたる小説もろとも今宵通讀、一時に及ぶ。

二十日 午後二時俄然大震あり。

我家は山かげのひくき處なればにや、さしたる震動なく、そこなひたる處などもなかりしが、官省通勤の人々などつとめを中止して戻り來たるもあり、新聞の號外を發したるなどによれば、さては強震成しとする、被害の場處は、芝より糶丁、丸の内、京橋、日本橋邊おも也、貴衆兩院、宮内、大藏、内務の諸省大破、死傷あり、三田小山町邊には地の裂けたるもあり、泥水を吐出して其さま恐ろしとぞ聞上く、直に久保木より秀太郎見舞に來る、ついで芝の兄君來訪、我れも小石川の師君を訪ふ、師君は此日

四谷の松平家にありて強震に逢たるよし、床の間の壁落ち、蔵のこしまきくずるなどにて、松平家は  
大事成しとか。鍋島家にて新築の洋館震に逢て、珍貴の物品どもあまたそこなひ給ひけるよし、師君の  
もとにはさしたる事もなかりき。

此夜更に強震あるべきよし人々のいへばとて、兄君一泊せらる。この夜十時過る頃微震あり。  
見舞状の來たりしは、横須賀にて野々宮君、静岡にて江崎ぬしなどなり。山梨へも見舞の状出す、例  
の返事はなし。

この頃の事、すべて書盡しがたし、朝鮮東學黨の騒動、我國よりの出兵、清國との争端、これらは女  
子の得よくしるべき事にもあらず、かつは此頃打つべき心のせわしきに、その日の事をその日にした  
めあへねば、やがては忘れて散うせぬも多かり、又折をまちてかいつけてん。

北里、青山兩醫博士黒死病しらべとて、香港に渡りたるはいみじき名よなりしや、青山博士のその病  
につかれてあやふげなる電音おぼつかなし、知らぬ人にもあらぬ中なれば、殊に哀なり。

樋口幸作兄妹此地に四月の半より來たりて、櫻木病院にありけるよし、二十六日の夜おくら來りて當  
時の病状をかたる。

二十八日 くらより人來り我をむかふ、留守成しかば、母君かはりて趣き給。

七月一日 芳太郎來訪、しばしありて横須賀より野々宮君參らる、かなしく淺ましくかつは哀れにも  
はづかしくもさまざまなる物語をかたり出る、失敗の女學生が標本ともいふべきにや。十時頃成けん櫻  
木町より使來り、幸作死去の報あり、母君驚愕直に參らる。

からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ、淺ましき終をちかき人にみる、我身の宿  
世もそぞろにかなし。

二日 早朝母君およびおくらと共に日ぐらしに、骨ひろひにゆく、山川程を隔てにる叔甥のおなじ所  
に烟とのぼるはこものがれぬ宿縁なるべきにや、おはしまさばと、今日はなき人に成し父上嬉しとおも  
ふ。

五日 小笠原家の數よみなり、會する人四人。

七日 小石川稽古日也。十二日までは是非金子の任用あるに、此月は別していかにともなすによし  
なく、師君に申てこそとこゝろは定めたりしを、さても猶いひおくれて、昨日までに成ぬ、今はいかに  
しても言はではあらぬ時とて、夕べ書物おはりて歸るさに文したゝめて机の上に殘し置き、されば今  
水日の稽古日に何とかの給ふ可きは道理なり、よきこたへならば嬉しけれど、例の氣質も知らざるにはあ  
のらぬ師君が、いか様なる事やの給ふらん、顔に………  
八日 平田君來訪、田中ぬしがかまくら紀行いづこの雑誌にか記載のこと頼む、これより森鷗外君の

一もとに趣けば、同君にたのみてしがらみ草紙などに出さばやとてかへる。午後中島くら殿來訪、物語多し、夜食を馳走してかへす。樋口のくからも来る、明早朝一番汽車にて歸郷したとあるに、今宵はみやげ物などとのふる爲本郷通へ諸共に行く。

九日 早朝くらを送て上野に行、上野町の小松屋といへる旅店に知人の待合せ居りて、共に歸郷をなすよしに付同家までゆく、上野よりにはあらで新宿の汽車にて行よしなれば、我れはこゝより歸宅。

朝飯をしまひて、無沙汰み舞に伊東、田中の兩家を訪ふ、日くれまで遊ぶ。田中ぬしのもとにありける龔道通鑑とて五冊もの、隨筆めける、小出ぬしの藏書のよしなるをかりる。

十日 禿木子より狀あり、森君のもとにて田中ぬしの紀行よろしきよしに付、本名宿處報道あり度しとなり、返事つかはす。奥田君來訪。

十一日 師君のもとへ行く、田中ぬしも盆禮として來訪、雜誌の事を語るに喜色あふるゝやう也。師君いかなるにか、衣類その他を質入して、金子をとゝのへ給へるよしにて、加藤の妻より我れは金子をうけとる、師君はやく出稽古に趣給ひぬ。此日、日くれ前より雷雨、中々に晴がたし、夜に入りてより歸宅。佐藤盆禮に來たりよし。

十二日 到來物のありしかば半井君を訪ふ、めづらしくこゝろよげにてにこやかに物がたたる、されども來客のありければ長くもかたうて歸るに、いづれちかくに御音づれ申べし、十五六の兩日のうちに雷雨なくばかならずといふ、たけくを、敷此人の口よりかみなりの恐ろしきよしを聞こそをかしけれ。

静かにかぞふれば誠や此人とうとく成せぬるはをとゝしのけふよりなり、隔たりゆく月日のほどに幾度こゝろのあらたまりけん、一度はこれをしをりにして悟道に入らばやとおもひつる事もあり、一度はふたゝびと此人の上をば思はじ、おもへばこそさまゝのもだえをも引おこすなれ、諸事はみな夢、この人こひとおもふもいつまでの現かは、我れにはかられて我と迷ひの淵にしづむ我身はかなしとあきらめたる事もありき、そもゝ思ひたえんとおもふが我がまよひなれば、殊更にすつべきかは、冥々の中に宿縁ありてつひにはなれがたき中ならばかひなし、見ては迷ひ、聞てはこがれ、馴ゆくまゝにしたふが如き我れならば遂に何事をかなしとげらるべき、かく斗したはしくなつかしき此人をよそに置て、おもふ事をもかたらず、なげきをももらさず、おさへんとするほどにまさるこゝろは、大河をふさぎてかへつてみなぎらするが如かるべし、悟道を共々にして、兄の如く妹のごとく、世人の見もしらざる潔白清淨なる行ひして一生を送らばやとおもふ。

十四日 小石川稽古にゆく、榊原家よりゆかた地、中村君より帶止、はんけち到來此夜更るまでねぶり難し、あすの雷雨いかにや。

十五日 はれ。早朝芝の兄君來訪、少し物がたるほどに半井君參り給ふ、少し面やせたれども、その水昔しよりはいげんいよく備はりて、態度の美事なるに、一樂織のひとへに嘉平次のはかま、細にてはのあるまじき羽織のいと美事なるをはふり給ふ、門に車をまたせ給へるは長くあらせ給ふべきにあらじと上て、しるてはとゞめず、鶏卵の折到來。

兄君は日くれまで遊び給ふ。夜に入りてより西村の禮助來る。此夜の月又なく清し。  
 十六日 是れ。風秋に似たり。  
 十七日 平田君より書狀來る、避暑として奥羽の旅にのぼりしよし、雜誌のこと申來る。  
 十八日 小石川に趣く、前田家の詠草したゝめ終る。  
 十九日 小説やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたし、此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までにのぼし給はらずやと頼む。  
 二十日 芦澤奈良志野より歸營、今日は土用の入なればとて、蒲燒を芳太郎おごる。  
 隣家に此ほどよりかゝり居る女子あり、生れは神戸の刀劍商にて、然るべき筋の娘なれど、十六の歳より身の行よからで、契りしは何某の職工成ける、父なる人の怒にふれて侘し暮しを二三年がほどなしつる、かゝりしほどに男子一人まうけて、二人が中にはあくこゝろもなかりしを、男の親の心悪しく、此女いかにしてもかくてあらぬ時は來りぬ、今はせんなしとて別れて家にかへる時、子は我が方につれもどして、その身はそれより大阪中の島の洗心館に中居といふ物に成りて、ことし五年がほど過ぬ、さるほどに此女生つき活達の氣象衆客の心になひて、引手あまたの全盛こゝにならぶ物なく、洗心館のお愛と呼ばれては、紅葉館のお愛と東西に嬌名たかく、我ぞ手折て我宿のと引かるゝ袖のさりとはうるさや、一つ心をぬし様にと思ひこみぬるはかの地に名高きぼう易商、こゝにも人ぞしる森村市藏が一家に廣瀬武雄とてしは二十六、當世様の若大將、粹は身をくふ合はれの中おもしろく、互にの

ぼる二階三階、せきはとどめぬ帳場の爲にも、大盡客とて下にもをかぬもてなしを、猶やぬし様御顔よかれと、みえにはそろひの惣はつび、女子にちらす紙花の、哀れや女もつまりに成りて、双手にあまりしこがねの指輪、一つは内處、二つはそつと、三つ四つと賣つくせば、やがては客のひゞきに成りて、岡やき半分なぶらるゝ、座敷の敷は昔のまゝとて、我が手にのらぬそれ鷹のねらひたがへば、互がひの上にもみゆるぞかし、まけじ氣性は今更の戀に火の手つりて、御免候へ、我にも可愛き人一人、のろけはならひぞ、うら山しくば眞似ても見給へ、花を見捨る藪住居もぬし様故なら大事なき身とおもて晴たる取なしに、長くはあらぬ此家をはなれて共にと斗、息子も折ふし使ひ過しの詮議むつかしく、こゝの支店に左せん的身となれば、とるや手に手を鳥が鳴とはふるし、東に行て暫しの辛棒をと、落人ならねど人前つゝましき二人づれの汽車の中、出むかひの手前は、さる大家の嬢様學問修業にこれへとあるを我れに托されて同道とくるむれど、誰が目に見てもそれ者あがりのなりふり、さりとはむつかしの乳母がもとに、しばしの宿をととめける。  
 我れも家とくは四五年の後なり、部屋住の身の思ふにまかせぬほどは、そなたも修業ぞや、つらくとも堅氣の家に奉公ずみして、やがて花咲く春にもあはゞ、假親まうけて奥様とはいはすべし、頼むとありけるぬしが詞勿體なく、骨身にきざんでさらばと出立てば、全盛うつたる身に一人女子のはしり使ひ、何としてたへらるべき、我れこらゆれども、お主様御氣に入らねば甲斐なや、出もどりの敷を盡して、乳母の手前はづかしやと、こしらへ言の底情なくわけて、京の大家の嬢様と聞きましたるは偽り、九

尾の狐の我が若旦那様手の中にまろめて、手だてあふなや、大切は若旦那様が上とて、乳母が怒りに取  
つく島ふつとはなれて、我とはとかぬとも綱に行衛は波のわだ中を流れ小舟の身の上助くる人なくて、  
乳母が前への謝罪はこれと、をしや三日月の眉ごそりとそりぬ。

すくひ給へとすがられしも縁也、我身にあはぬ重荷なれども引受ますれば、御前様は此家の子も同  
前、いふ事きいて貰ねば成ませぬ、東女はどんな物か、狭けれども此袖のかけにかくれて、とかくの  
時節をお待なされと引うけたるは今日也。

二十一日 早朝孤蝶君よりはがき来る。續稿は二十二日中にてよしとのこと、嬉しき人也。今日午後  
より田中君のもとを訪ひて、お愛がしばしの宿にたのまんとす。日ぐれ少し前よりゆく、留守成しかど  
しばし待つ、かにかくと断がましく言を左右に托せど、見かけて頼みし我れに對し、厭とあらばお前  
様女子にはあるまじ、横に車かしらず、長くとにはあらず二月か三月、それもむつかしくば一月にても  
よしとて、おしつかへしつのはてに、さらば試に二日がほどをよこし給へといふ、雷雨はげしく、か  
へりは車にて送らる。

二十二日 晴れ。今朝やみよの續稿郵送。

朝鮮開戦の期漸く近づきぬ。

青山博士追々快方、北里技師かの地出立。

郡司君十九日入京、こそ墨田川にくらぶれば心ある人の涙衣をうるほすべし。

二十三日 早朝田中君より断の手紙来る、まことほうしるぐらき處ある人の、我れにはひたすらつ  
つまんとする物から、我よりつかはしたる女子に家内の様子しれなば、つひには身の爲よからじとの心  
なるべし、あな狭の人ごころやなとをかし、さるにてもお愛のなげき一方ならず、いかでかく非運薄福  
の身と打なくさま、哀れにいらしければ、さらば今一度我が師のもとを訪ひて頼みてみると家を出  
づ、師には事情残りなくうちあけて頼み聞えたるに、師はその人となりの表面上よろしからざるにこれ  
を引うけてかくまふといはゞ、我も君もこれよりの前途に一大障碍となりて、遂に救ひがたき大難を生  
ずべしとて聞入れ給はず、今はかひなし。

歸宅後、猶ほよくおあいと相談す、さらば一直線に武雄ぬしのもとを訪ひて、諸事談合の上に、いか  
様とも策のほどこし方はあるべし、木挽町は物の表にして、これにはつくるひもあるべしはゞかりもあ  
らん、武雄ぬしの中は紙一枚の隔てなく、かくしだての入るべきならず、又よしや世人は何ともい  
へ、君にしていのちと頼むは此人なるべし、箱根にいますと定まりたらば、宮の下か芦の湯か、いづこ  
まれ尋ねてしれぬことはあらず、いざ給へ行き逢見て後の事とうながすに、さらばと思ひ起して直に  
支度す。

隣家の妻がとむる詞のうるさかりしかど、さま／＼に頼み聞えて出づ、出がけに、木挽町より帯取  
寄る爲とて文したゝむ、隣の妻が名前にて、ぬしのありかし居らば此文のはしにしるし給へとかく。



集全葉一

送りし車夫の歸りしは午後三時過る頃成し、首尾よく策の當りて宿處を教へたるよし、まづはうれしかりしに、隣家の主歸宅の後、直に木挽町に實事を打あけんといふ、そはよろしかるまじとてとどむるに、猶くどくとのしりて、乳母のかたへの義理を思ふ、哀れなるは小人とるべき道をあやまりたる人なり。

本郷向ヶ岡彌生丁三番地

相州箱根芦の湯松坂屋方

櫻井榮三郎

廣瀬武雄

しのぶぐさ

(二十八年一月—二月)

浪六のもとより今日や文の來るとまちてはかなくとしも暮れぬ、かしこも大つごもりのさわぎいかなりけん。

まちわたる人のたよりは聞かぬまにまたぬとしこそまづ來たりけれ

三日の朝年禮にとてなから井のうし門までおはしぬ、何事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき。

ますかどみわれもとり出ん見し人はきのふとおもふにおもがはりせる  
聞えし美男にて衣裳などいつもきらびやか成し人なりけるを。

おなじ日 さる人の來て、いでよせ聞にと引ゆるがすに暮ちかく家を出づ、三人也、菊坂の通を過て眞砂丁にのぼり、病院あとの原を過れば、月かげいつかたもとにあり。

さぐぶのし  
あづさゆみ春はいまだの中空にかすむとやいはん月おぼろなり  
この夜新がたの坂本ぬしより賀狀來る、これよりはまだやらざりし也。

わすれぬもさすがにうれしからごろもつきにといひしなごりおもへば

猪三郎は商店を開き、信三郎は銀行を出したりといふ、ともにいとことち也。

梅の花ひらきしやどのあまたあるをおくれ咲にも成ぬべきかな

君の男にをはしまさば、青簾などの評をやうけ給はん、なま物しりのゑせものとくに子のそしるを聞けば、げにしか見ゆらんものぞとはづかし。

をり立し和歌の浦わのあだ波に人のもくずとならんとやみし

四日 此よ本郷のあたりをそゞろありきして、にしき繪うる家になみろくが軍記はととふに、版の出來しはこそなれど、今は品きれたりといふ、五百部よりほかはまだ世に出ぬなめりとうなづく。

谷のとの氷やかたき年たてどまだよにいでぬ鶯のこゑ

初音ときかば、われも春めかんものを。

となりに酒うる家あり、女子あまた居て客のときをする事うたひめのごとく遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとてわがもともて来る、ぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまさは誠にそまる色もありつや

うしろは丸山の岡にてもものしづかなれど、前なるまちは物の音つねにたえず、あやしげなる家のみいと多かるを、かゝるあたり長くあらんは、まだ年などのいとわかき身にて、終にそまらぬやうあらじと、しりうごと折々に聞ゆ。

つまごひのきとすの鳴音しかの聲こゝもうきよのさがの奥也

ゆしまの坂通は、此ほどまで町やにていとぎやかなりしが、家をこぼち道をひろげて岩崎ぬしのやしきに成しより、石垣たかくつみて木立ひまなく、やみのよなどいとさびしく成ぬ。

月まではいかにやいかによの中のみかりはおのが物になしても

十五日 戸川の達子はじめてわがもとをとふ、残花道人といふ父なる人の質はしらねど、雨よのしなさだめにいひけるかしこ人とはかゝる人をや。

残りなくしらせ盡してくれたけのむなしかるべきむねのうちかな

ことしあらたに我家をとひそめし人ふたりみたりあり、かほよきは學の際などさしもあらず、ものゝ

才ありと見ゆるはすがたぞ取所なきやいとうし。

から衣いづれをつまと撰らびてはおもひたゝれぬさびならまし

おとこならぬこそこゝろやすけれ。

やゝかれがたなる男の、人めの關などことづけて文いひおこせたる、それがかへしをと女のこへるに  
書てやる。

はゞかりはたが人めにかしらかはの關路よりこそ秋は立なれ

廿日 残花君にとはる、みなわ集一册これ見よとて也、なほ毎日新聞が日曜附録にもものせよとたのま  
る、稿をば二十六日までにといふ、文學界のかたもせまれるをこはいとあわたし。

分けいればまづなげきこそこられけれしをりもしらぬ文のはやしに

二月一日 友のもとをとひしに、折から雨ふり出ていとしめやかなり、高殿に茶を煮て静かにうき世  
をかたる、障子を開らけば墨田川の流れしろきぬのをしきたるやうにて、堤にゆきゝのひとかげもをか  
しく、川を隔てゝかしこよし原のくるはと指さしつゝあるじのさんげ物がたりあはれふかし、此人を骨  
のあらしをと世にうたふはいかなるにか、筆取てはさこそ優柔華奢の風情もあらざらめど、大方人より

は情も深く、義にいさめるかたもおくれたりとは見えず、ものがたるまゝに落花たちまち雪に似たるの  
おもひあり。

落たぎつ岩にくだけて谷川のそこには塵もとどめざりけり

つまなる人は、かしこのくるはにこそまで有ける身とや、無垢の女の数は盡せぬよにとさんげの一  
巻、世には心なく見すぐす人もあめり、我れこの人をすてゝ望みを世に求めば、我れは男の一生こそ  
満足なるべけれど、あはれや我ゆる沈みつる淵の出でがたく、苦しき海にうき寐のかなしさ、よそには  
えこそ見過しがたけれ、いでよしや、人には長短のあるならひ、我れは此身をおくれたる方にして、一  
生のあやまちもおもひ置べし、更に世上の年わかき人いはんには、つまをむかへば申立によりてこ  
そ、わたくしには取かへしがたき悔もあるをと、うちなげく物からさすがにいとをしう捨がたきものに  
おもひたるいと情ふかし。

春浅きそのゝ若草わかればおふしもたてよつみはゆるして

ともいはまほしかりし、雨はをかしき物かな、降こめられてかゝる事も聞けるぞかし。

女友たちの久しう打絶てとはぬなどをば、いかにしてかくはなどおどろかしもすべし、男にはつつま  
しうてさる事もなさねば、いよくなつかしうこひしとおもふこともあり、月のよなどは更也、雨の日

つれづれと文机によりそひて文ども取散らし、その人の筆のあとなど、そこはかと思すさぶもあはれな  
り、かうやうの事人にはゆめいふまじかりけり、やがては名取川ぬれ衣くちをし。

よろしき女友達などあらばいみじうこゝろなくさむわざならましを、さる人もたねば折ふしのをか  
しきをもあはれなるをもかたらはんにかひなく、さしむかひてはたゞ人のこゝろやぶらじとさしいらへ  
などする、我がうへに有つる事どもかたるに、すこし聞よきをば物ねたみし、やがてしりう言をもすべ  
し、よろしからぬをばまのあたりにあざけりて、しかもこゝろよげなるなど、すべて淺まし、男はさは  
いへど萬におほらかに、かたらふ事のかひもありと見ゆれどそれもさるものにていさゝかやましきこ  
とそはぬにしもあらず、心やすきはひとり昔しのふみなどくりひろぐるなりけり。

いにしへの人のあとふまじとにはあらねど、ふるきを尋ねて新らしきをしるなどいへるはいかなるに  
か、いさゝかおもひ得たるふしをことにまれうたにまれ、いひ出しきこえ出すに、やがて人はこと様な  
り、あやしむることいふ物かなどそしるめる、それもさこそはあれ、大方人はいにしへの人の書置けるあ  
とをのみあなたうといかてかうはおもひうかべけんよまたどうどにはあらじなどいひひて、さらにそ  
れがもとのこゝろをさぐらんとおもひたらず、流れの末に酔て世を終るにこそあらめ、ひかゞ源氏の物  
がたりはいみじき物なれど、おなじき女子の筆すさび也、よしや佛の化身といふとも人のみをうくれば  
何かはことならん、それよりのちに父さる物の出こぬは、かゝんとおもふ人の出こねばぞかし、かの御

時にはかの人ありてかの書をや書とゞめし、此世には此世をうつす筆を持て長きよにも傳へつべきを、  
更にそのこゝろもたるもあらず、はかなき花紅葉につけても、今のよのさまなどうたへるをば、いみじ  
ういやしき物にいひくだすこゝろしりがたし、今千歳ののちに今のよの詞をもて今の世のさまをうつし  
置たるをあなたあやしかゝるいやしき物更にみるべからずなどいはんものか、明治の世の衣類、調度、家  
居のさまなどかゝんに、天曆の御代のことばにていかてうつし得らるべき、それこそはことやうなれ、  
もしさるかき物の後の世に残らば、人あやしみてものゝこかげにやおかん。

芝居はをかしき物なり、よせは猶いやしきもよきもたゞよりに寄てうちとけ物がたりなどもすめる、  
高座にのぼりて三味ひきうたうたふのみ見る物かは、こゝら立ちこみたる人こそいみじき見ものにはあ  
れ、圓左といへるが離縁のつまのはなしをしたりし時、大方の人はたゞその詞のをかしくおどけたるを  
のみめでくつがへりてどよみをつくりて笑ひたりしが中に、みそぢあまりの男、官吏ならましかば奏任  
がほどかと思えつる、黒きなゝこの三つもんつけたる羽織きし人一人うつむきて手巾にて目をしぬぐひ  
居たりしこそ、いかなるにかあはれ成し。

人傳などに聞つる時は、いといみじとおもひつる人の、逢見るにみおとりするこそ口をしけれ、さて  
は世にいみじとつたへいふは大方かゝるにこそ、めづらしげなし淺ましなど思はんはいかにぞや、それ

一 ざる物なればこそ、世はいよくあなどるまじかりけれ、よろしき名ある人のかくいひがひなきが如く、かくろへしのびてありとも人しらぬほとりにおもひのほかなるかしこきもぞまじれる、不定の世なれば、目もたのまじ耳もたのまじ、位やんごとなきをも何かはおそれん、はにふの小屋なるをも何かおとしめん、名は實にあらず、實は名にあらず、せんずるにあなどるまじきは世の中也。

丁汝昌が自殺はかたきなれどもいとあはれなり、さばかりの豪傑をうしなひけんとおもふに、うとましきはたゝかひ也。

中垣の隣の花のちる見てもつらきははるのあらし成けり

水の上日記 (二十八年四月—五月)

春雨ふりて今日はいとつれなくなり、なすべきことしも一わたりはてゝ身のいとまやうく得らるるに、田中とじがもと、伊東夏子ぬしなどとはやと家を出づ、柳町より車いそがす、みの子ぬしはさる人と共に花見のもよほしなど折あろかりしかば直にかへる、夏子のもとにてものがたり多し、やがて中島の師がりとひて、博文館よりのたのまれ雑誌の題字、題歌など、爵位高き人々にとたのむ、二時頃家にかへる、西村の母とじ参り居らる、ともにひる飯したゝむ。ほかにことなし。

十七日 いまだ談判の後報来らず。

十八日 平田ぬしに文を出す、今日兄君来訪。來客は馬場君及び野々宮、安井の二人也、及びおかう様、西村の老婆。

十九日 早朝平田君より返事來る。おかう様来訪、ついて馬場君來る、西村の婆君も來る。終日馬場君とかたる。午後より雷雨、家の中くらし。

二十日 早朝大橋君来訪。

小石川けいこ也、日没近く家にかへれば久佐賀來訪、西村君もありけり、久佐賀ぬしと共に夜ふくるまでかたる、金六十圓かり度よし頼む。

二十一日 文を乙羽庵に出す、例の題字の事につきて也、穴澤の清次郎君來訪、隣家のうら島轉宅す。

二十二日 はれ。早朝おかう様來訪、小柳丁よりもち月のつまも来る。となりより緋鯉三尾あづかる。はがきをほしの君に出して文學界の寄稿を辭す。

うき世にはかなきものは戀也、さりとしてこれのすてがたく、花紅葉をかしきもこれよりと思ふに、いよく世はかなき物也、等思三人、等思五人、百も千も、人も草木も、いづれか戀しからざらむ、深夜人なし、硯をならしてわがみをかへりみてほゝむ事多し。

にくからぬ人のみ多し、我れはさはたれと定めてこひわたるべき、一人の爲に死なば、戀しにしといふ名もたつべし、萬人の爲に死ぬればいかならん、しる人なしに、怪しうこと物にやいひ下されんぞそれもよしや。

よの人はよもしらじかしよの人のしらぬ道をもたどる身なれば

二十四日 午後馬場君來訪、本町にておもしろからぬ事ありしげにや、ものいひいと激したるやう

也、夕げ共にしたゝめて更るまで語る、雨俄かに降出ぬるにかさを参らす、駒下駄にては如何と、女ものにてをかしけれど、それをも参らすれば、笑ひてはきゆく。

二十五日 木曜なれば野々宮、安井の兩君來る。これより先、馬場ぬしの下駄かへしに参られしが、しばしにて歸る、けふ平田を伴なはゞやと思ひしに、まだ身のゆく方さだまらねばとて、いと耻かし氣なるに、そのあたりまではつれ來しかど、得伴なはぬなどかたられし。

二十六日 大橋乙羽君早朝に來訪、ながくもの語りす、此夜小出君來訪、もの語多し、西村君も來られしがはやくかへる。

二十七日 小石川けい古なり、さしてをかしきことも聞えず。

二十八日 此朝護國寺に花みる、上野の房藏來る、穴澤の清次、西村の禮助及び本宅の子息など來訪、夕暮ちかく野々宮君参りて、弟子への教授方などつげらる、此夜馬場君來訪、きのふも此家の上まで來たりしかど、さのみはとて得も立寄らざりし、小金井の紀行文、社よりは掲載をことはられたるに、君だに見すて給ひそとて見す、此夜もいたくふけてかへる。

二十九日 午後俵田初音けいこに來る、此次より日曜にといひやる。日くれ近く小出ぬし來訪、くちなしの花一部送らる。

三十日 ことなし、午後師君を訪ひて、前田家が題字の催促をなす、今一兩日のうちにけかならずといふ。

五月一日 書を久佐賀のもとへ送る、金子早々にとたのみやる、鳥田の妻來りて手紙をたのめるに書  
てやる、午後久佐賀より書あり、博覽會見物がてら京都へゆきてかの地よりの狀なり、六月末ならては  
歸宅すまじとの事、さては留守へ文さし出したる事成しと笑ふ、金子の事さらばむづかし。

浪六のもとへも何となくふみいひやり置しに、絶て音づれもなし、誰れもたれもいひがひなき人々か  
な、三十金五十金のはしたなるに夫すらをしてみて出し難しとや、さらば明らかにとへのへがたしといひ  
たるぞよき、ゑせ男を作りて、鬚かき反せなどあはれ見にくしや、引うけたる事とのへぬは、たのみ  
たる身のとがならず、我が心はいさゝ川の底すめるが如し、いさゝかのよどみなく、いさゝかの私な  
く、まがれる道をゆかんとにはあらず、まがれるは人々の心也、我れはいたづらに人を計りて、榮耀の  
遊びを求むるにもあらず、一枚の衣、一わんの食、甘きをねがはず、美しきをこのまず、慈母にむくひ、  
愛妹をやしなはん爲に、唯いさゝかの助けをこふのみ、そも又成りがたき人に成りがたき事をいはん  
や、我れたのみかれうけ引けばこそ打もたのむなれ、たのまれて後いたづらに過すはそもたれの罪とか  
おぼす、我れに罪なければ天地おそろしからず、流れにしたがひていかなる淵にもおもむかんれど、  
しばらくうきよの淺はかなるをしるして、自をしるをしへの一つにかぞへんとす。

二日 早朝書あり、安達の妻よりかねてのかり金催促の趣き、五圓斗のなれどもいまは手もとに一錢  
もなし難きを如何にせん、其よしいひて今しばしの日延をと母君にたのむ、午後歸宅故なく濟みつるよ  
し、かしこにては今年あらたに新室を作りて、それが壁額を我れにしたゝめもらひたしとてひながたよ

こす、うき世はつねなし、つねは我身貧にしてかれとめるから、無心合力など恐ろしうて、え近づかせ  
じとふるまふを、さるおのれらに、我が常住の室の壁にかゝくる額書かせんとするよ、さまざまなる  
かなと打ほゝゑまれぬ、久保木より小でまり、白つゝじの花をもてく。四時頃より野々宮、安井も來  
る、和歌一巡おはりて源氏もの語講義をなす、のちには打とけてさまゞ物がつたるに、野々宮は例のあ  
ざれ出して、此ほど廊下にてすれ違ひたる馬場ぬしの事を評す、容貌は如何成しかよく見ず、人物のあ  
たへはある人なりといふ、遠慮なき評をかの人に加へば、これより多望の時ならずば失望の時來たらん  
ことうたがふべからず、そは大いなる失望か多望なるべしとほゝゑむ、一人しのびてはじめは笑ひし  
が、ゑたへかねて高く笑ふ、何故ともしらで聞居れば、猶詞をつぎていふやう、君にしてかの人の妻た  
る事をうべなひ給はゞ、かの人は幸福の人也、君にしてこれをしりぞけ給はんか、かの人は大失望のさ  
ま目にみゆるやう也とかたる、そは又ようゐならぬ事よと笑ふに、一座こそりて笑ふ、日没近く人々は  
かへる。此夜母君及び國子として伊せやがもとはしり給ふ、金四圓五拾錢かり來る、はやく臥たり。  
三日 朝來かぜはげし。午前より田中ぬしが月次會におもむく、家を飯田丁にうつされてよりはじめ  
ての會也、いたく尋ね侘にたり、歸宅せしは日没前。留守に馬場君來訪ありしよし、いと失望して歸ら  
れしとか、氣のどく成し。

さりし日、孤蝶の君と秋骨ぬしとふたりして來る、秋骨少しほゝゑみながら、孤蝶君の君に參らせ度  
ものあるよしにさむろふうけさせ給ひなんやといふに、そは何をと問へば、何にもあらずと孤蝶子打け

す、しばし物語るほどに、過る日社中打つどひて寫眞うつしたるよしに聞きけるを、一度は見せ給へな  
 どいひ出づるに、そは事なしと出し給へと秋骨そゝのかせば、孤蝶子笑ひてふところをさぐる、半身  
 像の寫眞也、例には似ずあら綺のねんねこといふ物をきてそりかへりたるさま、何やらの親方おぼえて  
 をかし、いとよくうつりたる事とたゞゆれば、孤蝶子満足におぼすべしと秋骨かへりみる、やう／＼か  
 たりて源氏のあげつらひなどするに、我れはいかにもをかき事あり、よにすき物の仇人としてそこに  
 かしこに色めき渡るかの君にして、うきよのひまなきを打なげくをかしさよ、ほんやくの筆せはしきに  
 も非じ、洋書の取しらべむつかしきもあらざらましと秋骨のわらふに、そは君達あやまれり、人しら  
 ぬ戀に心を盡して、秋の長よをいも寐られず、細殿わたりたゞづみありき、起るて一人文かきやるな  
 ど、いかでか心のいとまあらんや、大やう戀は人いはいはれぬくるしみなればこそさよの中いとまなき  
 やうに覺えけめ、戀する身ほどつかはるゝはあらじをといへば、さは今のよは開けにけるよ、我れは  
 かゝる人をかく戀わたるに此事なりなんやなど友どちひかはすに、そはおもしろし、大方は成らん、  
 さらば橋渡しを君にたのまん、よし引うけぬなどいふをこそ者もさむるふとて孤蝶子をかへりみて笑ふ  
 に、これも苦るしげに笑ふ。

孤蝶子が父君ことしは七十三に成り給へるが、我が爲にとて筆筒にあしにかにの方ほりて給りぬ、こ  
 れをも孤蝶子もて来て、返禮には歌よみ給へとせむ、秋骨何かものいひたげにありしが、孤蝶子の君を  
 おもふこと一朝一夕にあらず、その熱度のたかきこと斗り難しといふに、そはかたじけなきこととほ  
 笑み居れば、さすがにあとのつきかねて口をつぐむ、多く聞かんは佗しかるべし、かうやうの事何より  
 もつらし、かくありける後いと孤蝶子のあし近きなんあはれなるやうにてかつは心ぐるし、ものへ行  
 ては一日もかゝず文いひおこし、野べにつみつる花なんど送り來たるうれしけれどもわびし、人につ  
 つむなるひめ事もらさずもの語りなど、いよ／＼はかなし、君をばたゞ姉君のやうに思ふよなどいひ  
 ひてとひよるに、五日とほどを隔てたる事なし、あはれ此おもひ今いくかつぐべき、夏さり秋の來る  
 をも待たじと思へば、ゆく水の乗せてさる落花にも似たり。  
 いづくより流れきにけん櫻花かき根の水にしばしうかべる



水の上

(二十八年五月)

五月四日 小石川けい古也、早朝よりゆく、田中ぬしが來會おそからんとの事成しかば事かゝさじとてなり、ひるすこし前君も來る、今日入門の人、波多野初枝とて十五斗のむすめあり、紹介は堤ぬし成き、午後早々にみの子君かへる、古今集講義われのみにて終りき、人々の歸る頃より師君頭痛はげしきよしをもて床にいる、さしたる事にはあり氣にもあらず。  
此夜馬場君、平田君來訪、ものがたること多し、ふけて歸らるゝに雨降り出づ、平田ぬしに傘のなければこゝなるを參らせぬ。

五日 母君芝の兄君がもとへゆく、金子少しもらはんの約束ありし也、午後山下の信忠及び西村の劍之助來訪、日没少し前母君歸宅、清正公御守り頂戴し來れりとして西村にもやる、此夜安達よりたのまれ額を書く、太陽五號來る。

138  
六日 早朝母君は奥田へ、われは安達へたのまれの物もてゆく、老人のよろこびいとことくし、新聞雜誌などに折々わが名の見え渡るを、物馴れぬ人の目にかゞけうなる事と思ひけん、當り難きほめ詞など中々にはなじるまれぬ、亡父君あらばいかに悦ばれん、あはれ見せたかりしなど、老人はほろ

ほろと打なきてさへいふめり、我がはし書の文すこぶる心を得たりとてあまたゝび吟じかへす、歌は水戸の烈公が借樂園にかゝげ置しそれをとのたのみ成しかば、はし書はたゞ斯くぞ、

水府何がし園のうち、亭あり、壁上にかゝぐる所の文字優に源烈公がおもかげをしめせるもゆかしければと、こゝにかり來て、市のちまたのかくれ家におく。

やがて新室の壁にかゝげて貴覽に備ふべしなど家内こぞりて喜ぶ、しばしかたりて歸る。日没少し前野々宮君來訪、次の木曜日中島の月次會なればけいこは金曜にかへ給ひてよと文したゝめし所成き、折よしとしてその旨つぐる。

小出つばらぬしが家集、くちなしの花といへる名もいとことなれりや、紫のおもとがそしりし和泉式部のそれとはうらうへの心ばへなめり、大方世にもてはなれてひとり思ひ得たるまゝを筆にすなれば天真らんまんとやいけん、豪放なる體などはいふを得べし、なほ子細に見もてゆくに、誠に君は智慧の人也、常々我れにさとし給ふやう、和歌をつくらんとおもふなかれ、おもひ得たるまゝをよみ給へかし、人智かぎりあり、天地のきわみあるべからず、學もと用なし、經驗恐るゝなかれと仰せられしものから、猶君の歌にも智慧あるこそうたてけれ、しるてをさなびたるは誠の心ならねばかひなし、君が歌は幽玄のさかひを極むることいまだ百里のかなたなるべく、富士の根の歌にいはく、  
一たびはのぼりてみると昔しより見るたびおもふ雪のふじの根

心情すてにをさなからず、無欲世界に到らんこと君の身として成るべきや、智恵はしばし人智をかすめて天真に近しと見せしめしのみ。

七日 母君ちの道氣にてなやましうせさせ給ふ。午前浦島の妻來りて郵書をたのむ、かきてやる、午後西村の禮助あそびに來る、夕ぐれまでありたり、かゝりしほどに馬場、平田の二君上田柳村君を伴ひて來られしに禮助はかへる、まとのむしろ酒なけれども酔へるが如く、一さらのすもじをかこみて三人の客が論難評語わらひつかたりつ平田ぬしなど積日の苦をみながら忘れぬといふ、こよひを戰の門出として孤蝶、禿木の兩君は例のしけんにかゝられんとす、萬は凱旋の上とて意氣すこぶる高し、上田君名は敏、帝國大學文科生にして帝國文學の編輯人なるよし、温厚にして沈着なる人がらよき人也、はや中島のもとにて姉弟子也し乙骨まき子ぬしがいとこと聞くに、初見とも覺えずいとしたりしれぬ。馬場君袖をかゝげ膝をうちて、我れは言はんと欲する所をいふのみ、我れを一葉女史にこぶるもの

あやまるなかれ、よきをよきといひあしきをあしといふもと我がこゝろ也、太陽第五號にのする所の一篇ゆく雲を見てよしと思ひしは我がおもひし也、一葉女にこびるならずと、其いふ處さかん也、平田君は萬づ言少なにて、耻かし氣をつくれるもをかし、馬場君戀をとけば、顔をそむけてもはや止め給へとくるしげなるも此人に似ずとかつはほゝゑまれぬ、人物評に詞まじへず、人の聞をはゝかるに似たり、頭髮みじかくはさみあげて、今朝のほど床やが手にかゝりしとおぼしく、衣類など見よげなるをまとひて來たり、先きの夜君のもとにて平田はしくじりの詞をならべしかば、君にいたく論じられていとくる

しがりて逃げしが、道すがら我れにしぼくいふやう、今日は歸り際いとわろかりし、一葉君誠にいかりしにあらずや、もしさらばいかにせんと心細げにいひぬ、今日は又我がもとに來て、我れはこれより一葉君をとほんと思へど、一人にては何となくつゝまし、君もろ共に行て罪を謝し給ひてよと三拜してたのみしはをかしかりしと馬場君興に乗じてかたれば、そは偽也、そは偽也、我れはさる事いひし覺えなしといふ、何覺えなしといふか、その顔を今一度見せよ、この偽りものめと、さかんなるは孤蝶子也、われは一葉君の我まゝ息子なれば此家にては遠慮をせぬに極め居れりとして、膝をくづすも落の風中々にをかしけれど、平田ぬしがおもゝち常ならず見えぬ、歸宅せしは夜も十時にちかゝりし。

夏はやし女あるじがあらひ髪  
とは馬場ぬしが當座の句成し。

此夜西村の劍之助君も來訪。更けて火事あり、九だん坂のほとり成るよし。

八日 晴れ。あす木曜日なるに中島の會さし合へば、野々宮、安井兩君のけい古を今日の方になす、安井君より松島の硯を送られぬ、暮てかへる。

此夜西村君刀劍及び南州の軸物持參、これを質入して金子五十金斗得たしといふ、母君同道伊せやが水もとへゆくに、目利とゝかねばとてとゝのひ難し、すでに今宵は十時を過ぎぬ、明けぬればやがて入るべき追證據の金也、いかにせんと當惑の額をあつむ、さらば致し方なし衣類をもて來給へ、明早朝伊せやを口説き、三十四十は作るべしといふに、さらばと約して西村君かへる。

九日 早朝禮助衣類を持參、六品あり、その外に銀時計一箇、合せて四十金と申せしに、伊せや中事、事むづかしういひて僅かに二十二を用立しのみ、さらば甲斐なし、これを一まづ西村に持せやりて、此日くれまでには、あらんほどの我等が衣類取まとめて猶明日の追證據を作らばや、そのほどには又よそより金子のかり入れもつくべしなど語りあふほどに、劍之助も參る、右の事をかたりその金子の不足ならんと問へば、いなこれほどあらば何とも成るべし、今日だにすまばその後は事なしといふ、さらばとて一同むねを安めぬ、十時ごろより我れは中島の月なみ會にゆく、會する人三十人斗、しるすほどの事なし、今日久保木の長十郎來る。

我急を見て手を空しくせず、うらはとに角表面上なすほどの事をなしくれたる人、我にても又むくはざるは道ならず、西村ぬしの爲に力を盡す事このほかに何事もなし、機一髪のみつかしき商買に身をゆだねればかゝる事折ふしあらんとす、あやふきをもて樂しみとするも又人の一くせならずや。

十日 姉君來訪、ついで秀太郎も來る、長くあそびたり、日暮れて馬場君、平田君袖をつらねて來る、今日高等中學同窓會のもよほしありて平田ぬし其席につらなりしが、少し酒氣をおびて一人寐んことのをしく孤蝶子を誘ひて君のもとをとひし成りといふ、このほどの夜とかはりていと言葉多かりし、孤蝶子例によりてをかしき事どもいひちらす、哲理を談じ、文學をあげつらうにほこ先つよし、夜はいつしか更て十時にも成ぬ、いざ歸らむと馬場君いへば、禿木子窓にひぢをもたせてはるかに山のかたをながめつ、いかにしても僕は歸ることのいやに覺ゆるといふ、こはあまりにうちつけ也、少しつゝしめ

よと孤蝶子大笑すれば、今しばし置かせ給へと、此度は時計を打ながめていふ、月は今しも木のまをはなれて、やゝのぼらんとするけしき、村くも少し空にさわぎて、雨氣をふくみし風ひややかに酔ひたるおもてをなでゆけば、平田ぬしあはれよき夜やとかうべをめぐらしてはたゝへぬ、いかで一句と孤蝶子をうながすに、

月のまへにわか葉のそよごよひかな

是は句をのみ情を没して、黙々の間にたゞよきよと斗おもはるゝもをかしと例の笑ふ、いかに禿木子さはあらずや、我れは一葉ぬしがもとを訪ふごとに、唯しばし物語りせんのことろいつとなくゆるびて、いつも日をつるやし夜を更して歸りては、しばしば氣の毒のねんおこりながら、こゝにある間は何事もみなからわすれて歸り難きはあやしけれど、こは我れのみにもあらじ、君はいかにといふに、誠にさ也、今日はことに一時間斗のこゝろ成しをとてともにわぶるもいとをかし、試験も近づきぬ、かくそぞろに遊び居るを秋骨きびしく異見などつらければ、かく夜更て歸らん事侘し、今宵は孤蝶子のもとに泊ませ給へ、かれのきびしきにはほとゝ難義を極めぬとかしら重げ也、そぞろによもふけぬ、十一時をうつかねの音に、さらばとて二人共にたつ、をかしき辻占をひらきて、これたまはらんと孤蝶子袖にしてかへる、こゝろ多き人よの。

の 時は五月十日の夜、月山の端にかけくらく、池に蛙の聲しきりて、燈影しばゝ風にまたゝく所、坐上するものは紅顔の美少年馬場孤蝶子、はやく高知の名物とたゝえられし兄君辰猪が氣魂を傳へて別に詩

文の別天地をたくはゆれば、優美高傑かね備へてをしむ所は短慮小心大事のなしがたからん生れなるべけれど、歳はいま二十七、一たびおどらば山をもこゆべし、平田禿木は日本ばし伊せ町の商家の子、家は數代の豪商にして、家産今やうやくかたぶき身におもふこと重なるころとはいへれど、文學界中出色の文士、としは一の年少にて二十三歳也とか聞けり、今のまに高等學校、大學校越ゆれば、學士の稱號めの前にあり、靜かに後來を思ひて現在を見れば、此會合又得べしや否や、長やかなるうなじを延べて、澁茶一わんまた一わん、酔醒は甘露の味と舌打しつゝ、辻占を開らきては甲笑ひ乙うらむ、二人の間に遠慮なき談笑を交せて時に大議論の評者になるなど、つくづく思ふてをかしきこと二なし、わが身は無學無識にして家に産なく、縁類の世にきこゆるもなし、はかなき女子の一身をさゝげて思ふ事を世になさんとすると、こゝろに限あり、智慧の極みしるべきのみ、かれは行水の流れに落花しばらくの春をとゞむるの人なるべく、いかでとこしへの友ならんや、親密く、こはこれ何のここの葉ぞや、平田ぬしとはをとゞししの春より友也、馬場ぬしは一年の知を得たる斗、さりとも人情のさかんなるに乘じては相逢ふ事しばしももだし難く、一と月のほどに七度の會合多しとせず、それが中にていかにつもる言の葉ぞや、二度三度の文さへおこしぬ、我れよしや運ありて雲井の庭に遊ぶとも君がやへもぐらかならず訪はん音づれぬべし、はにふの小やは物かは、水火の中也ともその志は見すべしといふ、偽のなき世也せばいか斗此人々の言の葉うれしからん、人ははかなき世にはかなき言の葉をならべてとかくの契りなどこはもと夢の中なるたはむれ成けり、此人々と我れもとかり初の友といふ名のもとに遊ぶ身

也、うき世の契りに於ていと輕やかなる友の中也、さりとも猶此輕やかなるちかかさへ末全からんや、まして情にはしり情に醉ふ戀の中に身をなげいるゝ人々いかに秋風の葛のうらみつらからざらん、夜更て風さむし、空ゆく雲の定めなきに月のはれくもる事今さらの様におもはれて、燈火のかけにもものいふ孤蝶子も、窓によりて沈黙する平田ぬしも、その中にたちて茶菓取まかなふわれも、たゞ夢の中なる事ぐさに似て、禿木ぬしがいはゆる他界にあるらん誰人かの手にもて遊ばるゝ身ならずやと、思ふ事深し、きのふは他人にして今日は胸友たり、今日の親友あすの何ならん、花は散るべき物とさだめて猶暮春の恨みたれもありぬべき事、こよひの會合をしばらくしして、袖の涙の料にとたくはへぬ。

十一日 小石川の稽古日なり、來る人二十人に近し、空あれて雨さへ降出づ、太陽五號中村君持參されてわが小説を人々に見する、小笠原ぬしかりてゆくに、田中ぬしも見たしと約す、家にかへりしは日没ちかゝりし、夕飯終りてはやく床にいりし。

十二日 晴れ。野宮君より添書ありて石黒とら子入門、つれづれ草講義、雅俗の文章まなび度よし、二時間斗をしへて歸す、同じ時に三枝の信三郎君來訪、十二時ちかくに歸る、中島の師君より前田侯爵、同夫人の書を郵びんにたくして送りこさる、こは博文館が百科全書の禮式の部にかゝるべき題字也、侯爵のは禮の一字、奥がたの歌は師君代作なるべし。

水 里人も田に引く水のあらそはでみちをゆづれるよと成にけり

上 かくぞ有し、かしこにても取いそぎつゝあらんを思へば、直に車夫にもたせやる、主人不在なりとて

状箱を取置たるまゝ使ひをかへされき、此夜入浴の後、師の御縁日に草花みる、よふけて寐たり。

十三日 早朝、野々宮ぬし及び在清國芦澤より書状来る、日清講和とのへればやがて無事歸國なすべく、當時は金州附近に宿營のよし通知也、野々宮君よりは、音楽會の切符とのへ置たれば、他より求むる事見合せ給へとの事也、十八日美土代町にてあるべき青年音楽會の也けり、十時に近きころ大橋君のもとより使あり、きのふの禮及び太陽五號にのせたる我小説をば原抱一庵の國民の友にて細評するよしいひ居るとか、夫丈申こされたり。

十五日 午後馬場君來訪、春陽堂がしやしん畫報及び文藝くらぶ四號をかさる、夕はん共にしたゝめて、夜にいりてよりかへる。

十四日 ほしの君より、文學界の寄稿かならずとたのみこされたる物から、いまだ一文字もしたゝめ難し、今日は十七日也、今いく日のほどもあらねばころしきりにいらるゝもせんなし。

今日夕はんを終りては、後に一粒のたくはへもなしといふ、母君しきりになげき、國子さまんゝにくどく、我れかくてあるほどはいかにともなし參らすべければ心な勞し給ひそとなくさむれど、我れとて更に思ひよる方もなし、朝いひ終りて後、さらば小石川へだに行こゝろみんとて家を出づ、風つよくしておもてもむけがたし、師君のもとへゆきて博文館よりの禮などのぶる、流石に金子得まほしきよしをもいひがたくて、物語少しするほどに、師君起て例月の金二圓ほどをもて來給ふ、うれしともうれし、やがて暇をこひて歸るに、家には宮塚の老母訪ひ來居られたり、ひるいひ出しなどす、午後伊東夏子ぬ

し來訪、ものがたり少しして、同人は齋藤竹子ぬしがもと訪はんとてゆく、日くれ近く宮塚の老母かへる、引違へに西村君來訪、齋藤ぬしよりつかひにて手製のすしを送られき、人々歸りての夜にいりて、國子しきりにわか竹にかゝり居る越子一座の明日の上限りにてよそへ行くべきをいかで聞かばやとうながすに、さらばとて家を出づ、午前けけふかぎりの食とて胸を痛めし身が、夜にいりてはよせへ遊ぶ、世はすべて夢也、聞しはこし子が三かつ酒や、こし六が太かう記、そのほかにもありけり、こし子はとし廿四五斗、あやの助にくらべて三だんの上居るべく、小清にくらべて三だんの下なるべしなど評す、熱意は聞く人の情をうごかして、此としわかなる藝人が前に鬚男のなくもの多し、冷語聞えず場面静か也き。

十五日 馬場君來る、しけん第一回首尾よし。

十六日 木曜なれば野々宮、安井けい古に來る、おかう様も來訪ありしが、母君淺草へ參られし留守成しかば早く歸りき。

十七日 一日雨ふる。かしらのわるくていと寐ぶたきに、終日床にあり、夕ぐれよりおき出づ、師君より明日興風會例日なればけい古は日曜にはがき來り、關場君のもとより藤子が病氣の容體申こさる、星野君より文學界の寄稿かならずと申こされしは十四日成しが、いまだに筆取ることのものうく

上 水 の、一回の原稿もしたゝめあへず、二十日ごろまでにと思ふにいよくかしらいたし。時は今まさに初夏也、衣がへもなさてはかなはず、ゆかたなど大方いせやが藏にあり、夕べごろより

蚊もうなり出るに、蚊や斗は手もとにあるなん、これのみこゝろ安けれど、來月は早々の會日などひとへだつ物まとはではあられず、母君が夏羽織これも急にに入るべし、ましてふだん用の品々いかにして調達し出ん、手もとにある金はや壹圓にたらず、かくて來客あらば魚をもかふべし、その後の事し斗がたければ、母君、國子が我れを責むることいはれなきにあらず、靜に前後を思ふてかしたら痛き事さまぐ多かれど、こはこれ昨年こぞの夏がこゝろ也、けふの一葉はもはや世上のくるしみをくるしみとすべからず、恒産なくして世にふる身のかくあるは覺悟の前也、軒端の雨に訪人なきけふしも、胸間さまぐのおもひをしはし筆にゆだねて、貧家のくるしみをわすれんとす。

梅雨のふるき板やの雨もりにこやぬれとほる袂なるらん

隣にすめりし人家移りすとて、その池にかひたる緋ごひ金魚などかずく我家にもて來てあづけぬ、大なる魚共のひれを動かし尾をふりておよげるさまいとおもしらく、來る人ごとにほめたゆれば、いつとなく我物のやうにおぼえて、斗らざるに庭上の奇觀をそへたるなどよろこびあひし、ほどへてかしこの妻なるものその家に池のほれしかば魚たまはらんとさてなどもて來たり、いざとりて行給へといへば中にいりて追ひ廻るに隣りよりおこしたる少さきは得よくも取がたく、もとより我が池にありし大いなるをのみあつめて、數にみたしてもて歸る、それしか非じともいふにうるさければ取るにまかせてやるを、母君などいにくがり給ふ、かくあるにて思へば、世は誠に常なきもの也、きのふおもしろしと見る事なくば、今日の残りをしき思ひあらんや、斗らざるに景色をそへ、斗らざるに景色を損す、つ

くづくおもふて、榮華も富貴も一朝の夢なるを思ふ事切也。

十八日 昨夜はじめて大音楽會場にのぞむ、新知己を二人得たり、場のありさま心よはき身の胸つぶるゝ如し。

十九日 午前のうちだけ小石川稽古を斷りて、石ぐる虎子がけいこをなす、野々宮君やがて來訪あり、もろ共にひるいひたべて我れは小石川へゆく、歸りしは日没近かりしが、西村君來訪ありけり、留守のうち穴澤の清次及び半井のぬしおけしたるとか、清次の事は事なし、半井ぬしはいかにしておはしたるにや、夢かとたどられて何事を仰せられしと聞くにあわたし、むし菓子一折を送られしよし、別しての物がたりもおはせざりし、姉君を迎へこんと幾度もいひしが否さしての用事も侍らず、久々にて御不沙汰見舞に参りつる也とて歸られしといふ、とにかくにむねつふる。

二十日 野々宮君及び兄君にはがきを出す、兄君のもとへは家に不用の蚊やあり時節柄入用あらば送り参らせんとて也。野々宮へはきのふ半井ぬしのいひたる令妹上京中なれば暇を見て訪はせ給はんはいかにと也、夜にいりて馬場君及び秋骨子來訪、孤蝶君けん定しけん第二回を本日受け給ひしよし、かならず落第ならんとてかしたら重ねにしをれて見えき、物がたりさまぐして夜更てかへる。

水 二十一日 午後門にあわた敷くつの音してはせ入る人あり、たれかと思れば孤蝶子、きのふのしけん首尾よく行たりし事今見て來たりぬ、少しも早くしらせんとてかくはいそぎ來つるとうれし氣のそ振上共にくうれし、日暮まで遊びてかへる、此夜小出ぬし來訪、ものがたり多し。

一 二十二日 平田君來訪あるべき約あるに、終日までも來たらず、佐藤の梅吉及び西村の禮助來る、梅吉はやく歸りて、日没近く劍之助來訪、相場の場面今朝來一變して、月はじめよりの玉殘らず復活、元の外に二十の利益ありき、これより直に例の伊せやがあづけを引出し給はれとて、喜色まん面にあふれぬ、よろこびなりとて一同にうなぎの馳走をなす、かくありしも全く君達の周せん盡力による事とてかたじけななる事二なし、きのふは馬場ぬしの喜びあり、今日は西村の吉報をきく、家は貧たど迫りに迫れど、こゝろは春の海の如し。

## 水の上

(二十八年五月—六月)

五月二十三日 野々宮君けい古に來る、安井君は風邪のよしにて休みなり、大橋君より日用百科全書  
和洋禮式の部出版成しとて、前田家及師君、我がもとへも各一本を送らる。

二十四日 早朝大橋君のもとを訪ふ、はじめて妻なる人にあふ、乙羽ぬし出勤の後も久しくかたる、何かふるき書きものにてよし文藝俱樂部のかたへ出さんといふに、家に歸りてかたれば、そはいとよし、此みそかのしのぎをつけんほどに、甲陽新報にのせ置し經机はいかにとて人々うながせば、さらばとていさゝか色をそへなどす、かゝるほどに西村君來訪、かくしかんゝなどかたれば、さのみ心に心をな苦しめ給ひそ、みそかの事は我れすべしとて、取あへず五圓ほどを渡しゆく。

二十五日 小石川けい古なり、出がけに大橋君へ小説原稿を送る、けふは馬場ぬしが成否さだまるべき日よと思ふにむねさわがるゝやうなり、家にかへりてしばしあるほど孤蝶子より書あり、八十人の受験者やう／＼にへりて残り六人なり、その中に君もあるよし、親なる人々がよろこび思ひやられて涙ぐまるゝほどうれし、今宵わか竹に國子を誘ふ、更てかへれば、馬場君さらに來訪ありしよし、そは無禮成しと詫しがる。

二十六日 午後西村君來訪、やがて生まるべき子のまうけなど更になし置くとも見えぬを母君ことごとくとがめて、いざ衣類など買ひにゆかん、そのしる出せとてあわたしく西村が行く、鉏之助はなほ残り居て、さまざまに身の不幸をなげく、はてはなさけなげにと息つきて、我れは此世へくるしむ爲に生れ來つる身か計りがたし、思はぬつまに思はぬ子など出來るなん淺ましとも口惜し、幸ひにしてあの子うせなばよろこばしけれども、猶いのちありてなからふることならば、つひに母乳としてもかれをとどめ置かざるべからず、さてはいよく我が生涯のおもしろからぬに、せめては君達だに見捨て給ひそ、こゝに來てかく物がたり暮すは心くるしけれど、しばしの極樂として寄り來る身をすくひ給へ、猶金錢に事かく折もあらば、そは遠慮なくつけし給ふぞよき、我れにあたふほどの事は何時にてもなすべしなどいふ。かゝるほどに馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴ひ來る、君にははじめて逢へる也、としは二十七とか、丈たかく色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし、物いひて打笑む時頗のほどさと赤うなるも、男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家とおぼえず心安げにおさなびたるさま誠に親しみ安し、孤蝶子のうるはしきを秋の月にたとへば、眉山君は春の花なるべし、つよき所なく艶なるさま京の舞姫をみるやうにて、こなる柳橋あたりのうたひめにもたとへつべき孤蝶子のさまとはうらうへなり、君の名を聞初しはもはや四年かほとく五年にも成るべし、参りよる折を得がたくて御近けれどもかくうとくは過ぬ萬づに心隔ず物語をたび給へとて打とけてかたる、來月あたり合綴のもの春陽堂より出さんはいかになどいふ、

小説中の人物のこと、世間の事、我どちが業のくるしき事、朝寐なる事、自だ落なる事、正直なる事、損なることなど語り出るに極みなし、やがて馬場君政治を論じ出せば、眉山君手を打て、さなり面白しと一口まぜにいふ、平田ぬしも首尾よくしけん及第したるよし、此人は言葉少なにて、折ふし孤蝶子をたしなむる様なる詞づかひあやし、人々の來たりしは三時頃成し、五時といふより雨降り出づ、かき暮し降るほどに日の暮れゆくも知られず、うなぎ取よせなどして人々にまいらす、歸りしは九時成しが、雨やまずして空くらし。

二十七日 中牟田つね子ぬしが數よみの會小石川にて催す成き、終日よむ、さのみは事なし。  
 二十八日 午後大橋の妻君わがもとへ和歌の門にいり度よし申來る、しばしかたりてかへる、引違へに野々宮、安井君來訪、明後日の木曜主上が御出むかへをなすべき筈につき、参上むづかしきか斗りがたしとて、歌よみに來しなり、日くれがたまでありて歸る、月謝を持参されき。此夕へ眉山君おとつひかしたる傘を持参、けふは又ことにうるはし、あがり給へといへば、今湯にいらんとて門には人もまてればといふ、見れば手ぬぐひさげたり、金ぶちの眼鏡に黄金の指輪など、誰が目にも天晴の小説家と見ゆらんを、こゝかしこの書肆に借財つもりて、一部を終れば一部のくるしみ眼の前に迫れる身とする人はなからん、これを此人々が境界かとするに、我が身もかへりみられてあはれにはかなし。此夜にいたりて馬場ぬし來訪、文學界の事につきて憤ること深げなり、退社せばやと思ふなどかたたる、かゝる事は大方の人にいふべきにもあらねば、常に親しいへど秋骨にも藤村にもえもらさぬ也、君は姉君の



やうにおぼゆれば、こゝろのうちもらさずつけまつるとて、憤をおびたる顔もち淋しきやうにすぎ  
やうなり、あまりに潔白に過ぎ給へばつひに人と衝突し給ふなり、ありとてよの人なみにうらおもてを  
置かせ給へと申ならねど、さのみ人事をこゝろにかけずゆるやかにふるまひ給へ、御老親おはします上  
に御身もすこやかならず、世を打侘て御病ひなど引出し給はゞいかにせん、何も御心にとゞめ給ふなど  
いふに、いとよく承りぬとて、涙のこぼるゝとおぼしくしばし眼鏡をぬぐひ居たり、とある時は熱  
のおこりたるやうにさわがしく、ある時はこゝろのそこまで冷えたるやうに沈みいりぬ、こはこれ神  
のする業なるべく、一つには家に傳へし高潔なる風のうきよにかなはで心もだゆるあまりわかき人のな  
らひ血のさわぎはげしきなめり、文學界の内輪もめなどそのもと末をいかにとも知りたけれど、我がも  
となどにて馬場君の心安げにふるまひ給ふさま一つは禿木などによからぬ思ひをやいだかせたる、うき  
よのほかには立てる身はいかならん波のたゞよひもよ所に見るべきなれど、猶めの前にせまりたるあはれ  
の見すくしがたく、いかならんと思ふ事深し、此よも十一時に近きころ孤蝶子かへる、しけんの前より  
過度になしたる勉強のなごりと、よくなし得たる心ゆるび及びそのほかにも猶いかならん事の身にさわ  
られるか足は力なくかしらはさゝふるにたえぬやうにて、脊などよくもあがらず、筋骨なきやうに成て  
かへりゆく姿何とはなくかなし。

此日芹澤芳太郎より書あり、臺灣總とく附屬の身と成て、いよ／＼かの地へ趣くべく成しに、これよ  
りは病氣と戦争との二つをこゝろみる覺悟なりなどいひおこす、文は野戰郵便規則により月一回のほか

出しがたければ、此書をば佐久間、廣瀬の二軒及び故郷へも送り給ひてよなど有けり、かたの如く取あ  
つかふ。

二十九日 晴れ。する事なしに過ぬ、悪き流行すべききざしあればとて大掃除はじまる。日くれて  
より西村君來訪。

三十日 風少しそひて空ははれたり。

主上東都に還幸、即ち凱旋の當日なれば、戸々國旗を出し軒提燈など場末の賤がふせやまでいたり  
て、うらや住居するものは手遊やにうる五厘國旗など軒にさしたるもみゆ、着鞆は午後二時成りとい  
ふ、十時ごろ安井君來る、これより高等女子師はん校一同と共に奉迎に趣かんとするを野々宮君こゝよ  
り参り給はんとありしかば誘ひに來たりしといふ、いな君はおはさずといふにさらば又のちに参らんと  
いそぎて出づ、正午過より花火の音絶まなし、午後三時過ぎ芝の兄君來る、芝區民奉迎の徽章を胸にか  
けて、塵の中をはせめぐりしかばいたくつかれしとおほしくまるぶやうにして來たり、酒の支度などす  
るほどに、野々宮も奉迎終りて來る、利久ひはの三つもん二枚拾、もち論地はちりめん也、白茶二重ど  
んすの丸帯、雪駄ばきにて來る、これもつかれて正體なきやうなり、今日の有様はいかになど問へど  
水も、たゞいまだおぼえずかゝる騒ぎはと誰も／＼いふ、かゝるほどに秀太郎も來る、安井君も今來るべ  
のしなどいひ居るほどに、てつ子のもとより使ひあり、止みがたき客ありて供に萬歳を祝さんなどありて  
上出がたければとなり、さらばせんしとて、野々宮には夕めし出したなどして、こゝなるひとへものかし

て歸す、兄君、秀太郎も日没頃かへる。このよは早く寐たり。

三十一日 空くもれり。今日はきさき宮の還幸あるべき日なればいかで雨ふらざらんやうにといのる。午前のうち母君西村へ見舞にゆき給ふ、家には秀太郎来る、博文館より經机の原稿料来る、午後母君及び國子右の金子持てゆかたをかひにゆく、明日のけい古日にきるべきものなければなり。

六月一日 小石川けい古にゆく、一昨日のものがたりおびたゞし、たれもゆきたりかれも見たり、君はいかになどとひかはすに、誠にえゆかざりしは師の君、田中ぬし我れなどとしられぬ、凱旋門も今日へは取くづさんとすなど聞くに、そは情なし、千載の一事といふ此大いわひにあひながら空しくその門さへ見過ぐさんや、さらばこれよりけい古終らば直にゆかん、車あつらへよなどもよふしたつ、四時といふに人々歸りて、我らは師の君を先に田中ぬしもろとも車いそがす、和田くら門を入りて坂下ものあたりへ来るほど、こゝかしこに査官立ならびて、車おりよゝとどむ、何事かと問へば、只今うへの青山より還御あるべきに、拜せんとならば、並立せよとなり、こは〱思ひよらずととどまる、まだ御先おひの騎馬も見えねば、わたらせ給ふにほどあるべしとてあたりを見かへるに、われどちと同じく例の門見にゆく人々なめり、田舎翁のよめごつれたる、わかき書生の老たる母いざなふもみゆ、車四五輛をつらねてよろしき衣きたる人などもありしが、いづれも御通轡を拜さばやとてをりるに、引すたる車のさまなどそゝろにをかし、加茂のまつりのみ使わたるほど、こゝかしこに牛車のかさなりて物見の袖口など古代のものゝみめづらかにおもしろきやうなれども、黒漆金もんの車にほろ骨の失なるも

ゑびなるもをかしく、白茶のびろうどに黒き毛もてへりをとりたるひざおほひ、車夫はいづれも眞白き姿にて小松がもとの芝生にあつまりて、さすがにこわ高にも物いはず、おふこおろして休み居る市人と物いふさまなど、繪巻にして残さまほし、あまりにことの優なれば、田中ぬし呼かけて、いかに此ありさま百年の後に見せば明治のよの古雅なるさまなど人たゞゆべしといふに、誠にしかあらん、さりながら此物見には車あらそひのおこるべき美形もあらず、高貴なるなどかけてもあらで、みなわれどちの壺折姿どもかなと笑ふ、かくさしかけたる洋傘をもやがて長柄などいはずばみやびやかならずと笑ふに事さめてたゞほゝゑむ、と斗ありて騎馬の兵士まづ見え初ぬ、わたらせ給ふ也と人々静まれば、御車たゞふたつして前後の人もさままで多からずたゞ静やかに坂下御門よりいらせ給ひぬ、あはひはるかに隔たりたればえよくも拜しがたかりき、守りとくれば人々いそぎて車呼寄す、やがて凱旋門ちかく成れば、もはや取崩しに取かゝれりとおほしく、取おろしたる杉の葉などこゝかしこに山とつまれぬ、さしもに大きやかなるものを時のまにかで取くづし得べき、櫻田門に向ひし方斗の杉の葉なごりなく成て、組あげたる材木のみいと高々とあほがれぬ、車よりおりて内にいるに、もり砂の深さ中下駄の齒を埋めて、折柄風さへあればいと佻し、すべてを杉の葉と櫂もおほひたるに、さながら青地のにしきもて巻たて水たるが如し、前後三ところの門に、東京商人有志者何々などあらはしたるはかはらなでしこのこまかなるを紅白色々さしたるなれば、美はしくして中々にやさしく見えぬ、それもこれも日にてらされてや上や枯れがたに成たるなんあはれなる、かくて取すてなば何方のかまどの薪木にかならん、かくめて度よ

のためしにあへりし物をばとてあはれがりて杉の枝一つ二つなでしこ一花二花つみとれば、師も田中ぬしもひとしく折る、かくて日もくれんとす、いつまであらるゝ物ならねばとて車にのれどもをしき事二なし、今度はかすみが關よりのぼりて外務省のうらをかへる、九だんの上へ出るまでは、たゞみほりの水のみどりなるをうれしく、松の枝ぶり芝生の色をながめて、ほどなくうしが淵ちかく成ぬ、こゝにて三人ともに別れて、おのがじゝ家路をさしぬ。

二日 早朝石黒虎子けい古に來る。午後西村君來訪、少し物がたりするほどに川上眉山君おはしぬといふ、奥なる部やへ通して茶菓など參らす。今日は先の日見たりしやうに、黄金の指輪、絲織の小袖などの華美なるにはなくて、博多結城のひとつへに角帯しめて羽織は着ず、入湯せんとする折なれば手拭もて來たり、いたく人世を思ひいりてせんすべもなく、物の辨別つき難く成し頃とて、かしらいたく氣のぼりて常に夢の中にあるやうの心地すといふ、今日もこゝろわるくてのみ暮しがたければ、しばしねぶらばやと横に成つれど、夫すらなしがたければ、せめては君のもとをも訪ひてめづらしき物がたり承らばやとて來つる也とかたる、こは君が筆に一轉化の來るべき時機なめり、ひたすらになつかしくやさしき方をのみ取出るやう成し人のかくて誠に心もだへば、人世のうくつらき、人の情のありて無きなど、こまかにうつし出るやうに成なんも斗がたければ、こはこれ一級をすゝむる時ならんとうれし、もろともにかたる事多し、我が身の素性など物がたるに、さらば君は誠にをとなしくやさしき人におはしけり、思ひかけぬまですなほなる人成けり、さる柔和なるこゝろを持てかゝるうきよをかくまで

にしのびて渡り給ふこと、下のこゝろのいづこにかつよき處のあればなるべし、男ごころのまけじ氣性にてするも、うきよの波にもまれては終におぼれぬ人少なきを、さるやさしき女性の身としてかくよに立て過し給ふ事よに有がたき人かな、自傳をものし給ふべし、今わが聞參らせたる所斗にても、たしかに人を感動さするねうちはたしか也、君が爲には氣のどくなれども、君が境界は誠に詩人の境界なるかな、おもしろき境界なるかな、すでに經來たり給ひし所は残りなく詩にして、すでに〳〵人世の大學問ならずや、ふるひたち給ふべし、君にして女流文學に志し給はんか後來日本文學に一導の光を傳へて別に氣魂の天地に傳へるものあるべし、切に筆をもて世にたち給へなどいふ、そゝのかし給ふな、さらでも女子は高ぶり安きをとて笑ふに、君は誠に物つゝみし給ふ人也、よしゝからばこれより我れは書肆に斗りて、君のもとへ催促を打しきらすべし、人すゝめずば書かぬ人なめりとて笑ふ、やがて日も暮るに近ければ、又こそ訪はめとて立歸る、三年の知人に似たり、このよ國子と共に本郷にものをかふ、家に歸れば留守のほどに馬場ぬしおよび誰成しか外に二人三人づれの來客ありしが家にあらずと聞て歸りしとか、大方は禿木と秋骨なめり。

三日 田中の會なれども出がたし、午後より三崎町に半井ぬしを訪へば、飯田町の本宅におはしま水す、あなたへ參らせ給へといふに、四丁目二十一番とて、田中ぬしとは一小路斗隔てたる處へゆく、黒の堀にしたり柳など雅にもあらねど廣やかなる家也、五年ぶりにておかう君にあふ、取集めての吊詞など上いふにこゝろうくたゞ涙くまれぬ、鶴田ぬしがはらにまうけし千代と呼べるがことは五つに成しが、

いとよく我れに馴れてはなれ難き風情まことの母とや思ひ違へたる、哀れ深し、ちよ様は我れをわすれ給ひしかといふに、房々とせし冠切りのつむりをふりて否やわすれずといふ、二階のはしごの昇りにくきを、我が手にすがりて伴ひゆくも可愛く、茶菓などはこぶをあぶなしといへども誰も手なふれそお客様には我れがもてゆくのならとて、こま／＼とはたらく、かゝるほどに戸田ぬしが子も目さむれば、おかう殿いだき来てみす、まだ生れて十月斗のほどならん、いとよくこえてたゞ人形をみるやうにくりくりとせしさま愛らし、目もはなもいと少なくて、泣く事まれなる子といふがうれしければ、抱き取りてふりつゞみ見せ、犬は子まはしなどするに、いつとなくなれて我が膝にのみはひよる、こはあやしき事かな、常にをとなしき子なれども見馴れぬ人にはむづかりて手をもふれさゝず、此ほど野々宮様、大久保様などあやし給ひしにいたく泣入りて困じにけるを、今日はかく馴れ参らせてよろこび居る事と、おかうどのいぶかる、半井ぬしほゝゑみて縁のあるなめりといひ消つ、すし取寄せ、くだもの出しなど馳走をつとむ、四年ぶりにて半井ぬしが誠の笑がほを見るやうなるが嬉しく、打くもりたる心のはれる様也、そのむかしのうつくしさはいづこにかげかくしたるか、雪のやう成し色はたゞくろみにくろみて、高かりしはなのみいぢるく成りぬ、肩巾の廣かりしも、膝の肉の厚かりしも、やう／＼にせばまりやせて打みる所は四十男といふとも偽ならず見ゆ、なつかしげに物いひて打笑むさま、さはいへど大方の若ざかりよりは見にくからず、たゞ誠の兄君、伯父君などのやうにおぼゆ、君はいくつにかならせ給ふ、廿四とや、五年の前に逢せめ参らせたるその折に露違はずもおはしますかなといひひて、こ

ころおく方もなく語る、此人ゆゑに人世のくるしみを盡して、いくその涙をのみつる身とも思ひしらねば、たゞ大方の友とや思ふらん、今の我身に諸欲脱し盡して、假にも此人と共に人なみのおもしろき世を經んなどかけても思はず、はた又過にしかたのくやしさを呼おこして此人眼の前に死すとも涙もそゝがじの決心など大方うせればたゞなつかしくむつまじき友として過さんこそ願はしけれ、かく思ひ來たりて此人を見れば、菩薩と悪魔をうらおもてにして、こゝに誠のみほとけを拜めるやうの心地いひしらずうれし、日くれに近く、暇ごひして歸らんとするに、さらば又此頃とはせ給へ、われも例の神鳴りのけなき折君がもとを訪はん、もろともに寄席にも遊ばゞやなどいふ、下座敷に下りければ、樋口様は歸らせ給ふか我れも逢ひ参らせたかりしをとて父君出しておはします、又とはせ給へ、ゆる／＼御物語りせばやとて、これもかれもなつかしげなるがうれしく、暇をこひて出るこゝろ夢のやうなり、家に歸りて直に入浴、道にて雨にあふ、此よは大雨也。

四日 空はれたり、新聞の上にて見る處、臺灣にて戦争はじまりたるとおぼしく、芳太郎など只今初陣の折と思はる。

五日 の午後馬場君來訪、二日の夜には秋骨、禿木をさそひて訪ひしに、君は留守におはしけりとして少し物むづかしげ也、あの日眉山御もとを訪ひしよしといふに、いかにして夫れを知らせ給ふやと聞けば、三日の午後より川上は我がもとを訪ひて、酒竹禿木など呼集め、四人にて箕輪に藤村を訪ひしが、上同人あらねば口をし、これより歸らんも興味索然たればとて、今戸のわたしをこえて向島に三昧をと

はんと成しが衆議又かかりて言問の某亭に一酌を催し、歸路雨にあうてはふくりに歸りしといふ、そは御さかん成しとて笑ふ、今宵は馬場君さのみもかたらでかへる。

六日 朝來平田君來訪、乙羽庵の妻も來らる、これは和歌の直しをこはんとてなり、午後より野々宮、安井君および木村きん子とて、高等師はんの同勤の人なるよし、和歌および文章など學ばゞやとて來る、此日の來客西村の禮助、久保木の秀太郎、おかうどのなど合せては十人斗なり。

七日 午後西村君來訪、少し物語るほどに馬場、平田、川上の三君來る、紅葉の男ごゝろ、および心のやみ、珍本全集などかざる、日没少し前に人々歸宅。

八日

九日 今日は小石川の會日なり、午前の中石黒とら子の稽古および野々宮が古今の講義終りて、午後よりゆく、此日田邊たつ子ぬし來會、田中ぬしは頭痛はげしきよしにて、席半ばにしてかへる、歸宅せしははまだ日の高きうち成し。此上馬場君來訪。

十日 小説著作に従事す、全編十五回七十五枚斗のものつくらんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで、いたづらに母君の叱責をのみうけぬ、午後西村君來訪、少しかたりてかへる。

十一日 事なし。午後馬場君來訪、日没までかたる。

十二日 父君靈前に田舎まん頭調じて奉る、國子一兩日來病氣にて食事もすゝみがたし、されどもきびしき事にはあらぬ氣なれば、今宵母君を伴ひて若竹に小住の義太夫きゝにゆく、留守中馬場君來訪

ありしよし、國子ねぶり居てしらざりし事はあすわかる。

十三日 午後馬場君來訪、あがらずして歸る。野々宮、安井、木村の三君稽古に來る。

十四日

十五日 朝來雨ふる。小石川けいこにいたれば、田中ぬし湯治場などにや行給ひつる今日は休みのよし、午前田邊君來る、我れに約束ありてそを僞にせじと斗の來會なるよし、直にかへる、午後大雨車轆をながすが如し、おどろくしく神なりはたゞめきて人々歸りわづらふ、二十人斗寄集ひてとらんぶの遊びをす、家にかへりしは日没、雨やみてよき日和に成ぬ。

十六日 家の稽古日也、石黒虎子來る、ついで野々宮君古今集の講義聞に來る、終に遊ぶ、歸宅せしは四時ごろ、やがて大雨盆をかへすやうに降出ぬ、さぞ歸路にしてなやみけんとなびし、家に一錢のたくはへなき上、差配がもとへおさむべき家ちんもあとの月より延し置たる、それこれ三四の金なくてはかなはず、伊せやへはしらんか、ひとつのもとへかりに行かんかなどいふ、さらばせんなし、西村をたのみてんとて日没より家を出づ、かしこにて三圓かり來る、歸れば孤蝶、眉山の兩君來訪、もの話しきりにして十二時まであり。

水のうへ日記

(二十八年十月—十一月)

やうく世に名をしられ初て、めづらし氣にかしましうもてはやさるゝ、うれしなどいはんはいかにぞや、これも唯めの前のけぶりなるべく、きのふの我れと何事のちがひかあらん、小説かく、文つくる、たゞこれ七つの子供の昔しよりおもひ置つる事のそのかたはしをもらせるのみ、などことごとく敷はいひはやすらん、今の我みのかゝる名得つるが如く、やがて秋かぜたゝんほどは、たちまち野末にみかへるものなかるべき運命、あやしうも心ほそもある事かな、しばし書とどめてのちの寢覺のこゝろやりにせばや。

七日の夜、母も妹も本郷のほとりに物かふとて出行て、一人燈を守りてものよむ折ふし如來ぬし來訪、例の人とて、我が取次ぎに出たるに、一葉君はうちにやといふ、あがり給へとて燈火のもとにさしむかひたれば、はじめてさなりけりとや思ひたらんされど驚きたるけもなく物がたり居る、をかしき人なり、此まへ來たりしは秋風いと身に寒き朝成しかども、白地と黒のかすりとのゆかたをかさねて着て居たり、今日は二夕子の袷出來てきたれど、素肌の上にはをりて、ことごとく敷はかまはきたる姿もをかしく、草履ばきなどいよく出ていよくをかき、母も妹も歸りて後、夜ふくるまでかたる、そのおさ

なき時の物がたりなどし出るに、かげなる母も妹も堪へずやはと笑ふ聲の聞ゆ、妻めとらまほしきにしかるべしとおもふもあらば媒を給はれ、何も御覽の如くの男外に何の心あるにもあらず、むつかしき事などかけてもいふまじければとて、家のさまなど打あけかたる、これより上田敏君とひて、桐一葉の事評させんとす、瀧口入道は大學生某の作なるに、それが批難を歴史小説といへる題かり來て坪内が書立つべければ、大學よりは上田を呼おこしてこれに當らせばやとなり、横やりは依田の學海翁やとひ入るべし、いやとても應とても今宵は上田を説きつけ來べしと、意氣のさかんなるもをかしく、ともによみうりの紙上にてたゝかはせんのみろみなるべし、九時すぐるころ歸る、雨降出しかばかさ持たせてやる、新坂のやみに狸出づべしなど笑へば、それは同やくよとてゆく、大風すぎての後に似たり、更けていよいよ雨ふる。

八日 も朝より雨やまず。あすは萩のやが月次會なればと道はわるけれど日くれがた風呂やにゆく、歸りてみれば、如來様よりとて傘かへし來たりし車夫に文を添へておこしぬ、夕べはあまりおそかりしかば、上田は家にあらで空しく蟬のもぬけをつかみぬ、今宵ふたゝびおもむく道すがら、これをばかへし參らする、一寸立よりてとおもへど、上田の事はなば、谷中に大野酒竹が庵たゝくべき用あればたゞ文にて、今朝依田學海に逢ひたれば、君がにごり江上々の作とたゝへて、是非一度御めにかかりたしといひき、御序に訪ひ給へ、淡泊の老人中々おもしろき人など書そへて、中には月よう附ろくの事もあり、終りには、例の妻の事よろしく、心から平身してなど書たり、いつに似合ずまじめなるを集ひ

て笑ふ。

九日 空はれて、午前より中島の會にゆく、例によつて例の如くをかき事もなし、伊東夏子の大西祝が傳言いひたる、是非あひたしとてうわさいひ暮らすなど聞くに、世は飛鳥川とうめかれぬ。此夜中町に紙かひにゆく、あらざりしほどに安井てつ子岩手よりもらひたるのなりとて大いなる林檎もてきにける、それも女子師はん校の方へ田舎よりとどきたるを直に我家にもて來しよし、常は口重に世辭など數々なき人なれど、心にしみてうれしとおもふ事あればかく取わきての事などもすめり、可愛き人のこゝろよと母も妹もひとしくいふ。此夜文二通したゝめき、一つは如來ぬし、一つは馬場君、前はきのふの返事、附ろくの事などいひて、つぎなるは久しう音づれのなきにいかゞ暮らすとおぼつかなくてなり。夜いたく更ぬれば、その外ことなしに寐にけり。

十日 例のごとく例の通りにて過ぎき。たゞ大島みどり子の歌よみてくれとてたのみに來たと、安井、野々宮そのほかの稽古に來し斗、ことなしに終る。郵便三通、田中二通、本願寺より一つ。

十一日 も晴れなり。

十五日 より三十一日までの間に、如來ぬしの我家をとふ事四度、用ありて來し事もあり、あらずして來し事もあり。にぎり江の評各雜誌にかしがましとて、まだ見ざるをば郵便にておこしつ、妻の事たのみおかれれば、寫眞たまへといひやりしに、やがて寫してこれをも送りぬ、木強の男とふと見ゆめれど、物なるまゝにおさな子のやうなる所うつくし。

川上眉山ぬしも、此ほど打しきりて訪ひ給ふ、此月にいりてより四五度は來給ふめり、一夜は關君と打つて來つ、その次の夜の事なり、たがひに期せずして一つに成し事あり、我れにこゝろなければ何ともおもひたらねど、二人の面やうのをかしさ、物がたりのしどなさ、おもひがけず落あひしを耻あへるさま、男も猶ものつゝみはなす成けりとをかしかりき。

いで孤蝶ぬしのたより少ししるしとゞめばや、これも此月にいりてより文三通、長きは巻紙六枚をかさねて二枚切手の大封じなり、一たびは名所古跡の寫眞二葉、紫式部源氏の間などいへるをおくりこし給へり、例のこまかにつゝみなき言の葉、わが戀人にやるやうの事かきてあるもをかしく、誠ある人なれば、おのづからはげますやうのこの葉などもみゆめり、こゝろうつくしき人かな。

平田ぬしには此月たえて逢はず、文こまんゝとおこしつれど、孤蝶ぬしとの間に物うたがひを入れ、少しねたまし氣などの事書てありしもうるさければ、返しはやらす成りにき、みづから二度ほど訪ひ來しかど、國子の取はからひて門よりかへしぬ、才子なれども憎き氣のあるぞ口をしき。

秋骨も幾度わがもとをとひけん、大方土曜日の夜ごとには訪ひ來る、來ればやがて十一時すぎずして歸りし事なし、母も國子も厭ふは此人なれどいかゞはせん、ある夜川上君と共に來て物がたりのうちにふるひ出でぬる時などの恐ろしかりし事よ、我れはいかにするとも此家の立はなれがたきかな、いかにせん、いかにせんとて身をもみぬ、みづからこは怪し、怪しといひつゝ、あと先見廻しつゝ打ふるふに、川上ぬしもただあきれにあきれて、からく伴ひ出て送りかへしぬ、其夜なき寐入りにふしたりとてあく

る朝まだきに文おこしぬ、うちにさま／＼ありけれど、猶親しきものにせさせ給はらずや、いかにも中  
空に取あつかひ給ふ事のうらめしさなど書つらねありき、あなうたての哲學者よな。

優なるは上田君ぞかし、これも此頃打しきりてとひ来る、されども此人のは一景色ことなり、萬に學  
問のほひある、洒落のけはひなき人なれども、青年の學生なればいとよしかし、桐一葉の評かく事を  
うがりてかにかくといひわけなどいひ居るもたかぶらずしてなつかしう見えぬ、されども心はいかなら  
ん、かく言ひ、かく見せて、世にたゞんの人なりや知りがたし、あなどりがたうもあるかな。

おそろしき世の波かぜにこれより我身のたゞよはんや、おもふもかなしきはやう／＼をさな子の  
さかいをはなれて争ひしげき世に交る成けり、きのふは何がしの雜誌にかく書れぬ、今日は此大家のし  
かじか評せりなど、唯春の花の榮えある名斗うる如くみゆる物から、淺ましきは其そこにひそめる所の  
さま／＼成けり、わが松、小金井、花園の三女史が先んずるあれども、おくれて出たる此人をもて女流  
の一といふをはゞからず、たゞへても猶たゞへつべきは此人が才筆などいふもあり、紫清さりてことし  
幾百年、とつてかはるべきはそれ君ぞなどいふもあり、あるはとつ國の女文豪がおさなだちに比べ、今  
世に名高き秀才の際にならべぬ、何事ぞをとゞしの此ころは大音寺前に一文ぐわしならべて乞食を相手  
に朝夕を暮しつる身也、學は誰れか傳へし文をば又いかにして學ぶべき、草端の一盃よしや一時の光り  
をはなつとも、空しき名のみ、仇なるこゑのみ、我れに比べて學才のきはなみ／＼ならざりしさがのや  
が末のはかなき事、山田の美妙が數奇の體、あはれあはれ安き世の好みに投じてこの争ひに立まじる身、

いか斗かは淺ましからざらん、されども如何はせん、舟は流れの上のりぬ、かくれ岩にくだけざらん  
ほどは引もどす事かたかるべきか。

極みなき大海原に出にけりやらばや小舟波のまに／＼

十一月二日の夜平田ぬし來訪、國子のはからひて門よりかへしぬ、引ちがへて川上ぬし來訪、大か  
たはもろ共に來つるなめれど、先君いりてみよなどいひしなるべし、あらずといひしかば、さらば我れ  
かはりて音なはん、我れゆかばかならずありといふべしなどほこりて訪ひ寄しけしきおのづから分明な  
るもをかしく、國子は同じくるすなるよしをいひぬ、しる侘て歸りぬるさまもおがましく、唯ひたす  
らにほゝゑまるゝよ。

三日今日は天長の佳節なるものを、朝來の雨車じくを流すやうなり、神戸の小林あい子より松だけ  
一籠おくりこしたるを、いひにたきて集りてたうべぬ、稻葉のおこうどの參られたるに、同じく出しな  
どす。午後より平田、戸川の兩人又來る、あらずといひたるに、然れば少し座敷をだに貸させ給へ、衣  
少しほしたければと切にこふ、上にあけて國子と母とあへしらひ居るに、猶我れのかくるへ居る事もや  
とうたがひて小用たすとて廊下あたりなどふみ渡るいとをかし、三十分斗して歸りぬ。

其夜更けて、今はもはや門のとさゞばやなどいふ折しも、又平田と戸川と打つれて來にけり、今まで  
川上君のもとに遊びてその歸るさなるべし、いかに逢はざらん事の氣の毒なれば、ありといはせて對  
面しつ、平田ぬしのみやげ物などかひ來つるもをかしく、さま／＼の物語して遅く歸りぬ、平田ぬしは



よみうりの紙上に我が評かゝばやなどいひき。

五日の夜關君來訪、落合直文のもとへゆくのならども門を過がてに立寄りしなりといふ、物がたるほどに枝葉のしきりに添ひて一時間を過ぬ、二時間を過ぬ、今行かんさらば行かんといひつゝかたる、車夫は待たびれて、玄關に高いびきして打臥しゝもをかし、今はおくれにけり今宵は落合が訪ふ事かなふまじきかといふに、さらば其處を訪ふを後日の事にして、今宵は我家に遊び給へといへば、今までに成ぬる物を今かへるとも五十歩と百歩の違ひのみ、さらば今少し置給へとて身を落つけてかたる、月給うけ取し以來一日も待合の二階に遊ばぬ事なく、今日までには残りなくつかひ盡して今はうち五厘錢一つのみ、煙草かふべきしるもなしとあれば、巻たばこかひてやる、語る事四時間、暇ひして歸る時にはふし待の月高く冴えて一段の光景にしむ斗なりき。人々の原稿などみせて、平田といふ人君がにこり江の評かくよしいひこしたりとかたる。

六日 午後山下の二郎來訪、關ぬしよりはがき來る、ゆふべの佗也。

七日 早朝平田ぬし來訪、くに子の留守なるよしをいひしに、いな對面得まほしきといふにもあらず、文藝くらぶ九編かし給へとてにこり江のくだりを持ってゆく、よみうりに評かゝん爲なるべし。

水のうへ

(二十九年一月—二月)

十二月の三十日に馬場ぬし近江より歸り來給ひぬ、年末年始の休暇を給はりてなり、家にわらんずぬき給ふよりはやくわがもと訪ひより給ひしよし、國子に大津ゑの藤娘かけるあふぎ、家へは小田原のかまぼこなどみやげにと給はず、逢ひ見ざりし事四月ばかりなれば、かたみに語りあふ事おほし、夜ふけてかへる、これより川上君とはゞやとなりけり。

これをはじめにして七日の朝歸郷までに、一日も我が家を訪ひ給はぬ事なかりき、ある時は三人五人の友うちつれて來る事もあり、ある時はたゞ一人しておはすこともあり、いとおもしろくにぎやかにのみ打過ぎぬ。

六日 文學會の新年宴會などいふ事ありき、われと三宅ぬしには別席しつらへおきぬればかならず出席あらまほしきよし星野ぬしよりいひこされたれど、さる所にはしたなう立出つべきにはたあらねば斷りいひやりて我れはえ行かざりしに、たつ子ぬしにも同じこと斷り成しよし、こゝの間に心をかしからぬ事あれば馬場ぬしもえ行かじなどいひ居られしものから、さもないなみあへて出席有けるよし、有様いか成けん。

こぞの秋かり初に物しつるにぎり江のうわさ世にかしましうもてはやされて、かつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ、十三夜もめづらしげにいひさわぎて女流中ならぶ物なしなどあやしき月旦の聞えわたれるこころくるしくも有るかな、しばしばおもふて骨さむく肉ふるはるは夜半もありけり、かかるをこそはうき世のさまといふべかりけれ、かく人々のいひさわぐ何かはまことのほめこと葉なるべき、たゞ女義太夫に三味の音色はえも聞わけて心をくるはするやうのはかなき人々が一時のすさびに取はやす成るらし、されども其聲あひ集まりては友のねたみ、師のいきどほりにくしみ、恨みなどの限りもなく出来つるいとあさましう情なくも有るかな、虚名は一時にして消えぬべし、一たび人のこころに抱かれたるうらみの行水の如く流れさらんかそもはかりがたし、われはいちじるしくうき世の波といふものを見そめぬ、しかもこれにのりたるをいかにして引もどさるべき、あさましのさま少しかゝばや。

日ごと訪ふ人は花の如く蝶の如きうつくしの人々なり、大島文學士が奥がたのやさがたなる、大はしとき子の被布すがたわかしくしき、今は江木が寫眞師の妻なれど關えつ子の裾もやうてたち、同じく藤子が薄色りんずの中振袖、それよりは花やかなる江間のよし子が秋の七草そめ出したる振袖に緋むくを重ねしかわいのさまもよく、師はん校の兩教授がねづみとひわの三まい着、取々にいやなるもなし、一昨年の春は大音寺前に一文ぐわし賣りて親せき近よらず故舊音なふ物なく、來る客とては惡處のかすに舌つゞみ打つ人々成りし、およそ此世の下さまとてかゝるが如きは多からじ、身はすて物によるべなきさま成けるを、今日の我身の成のぼりしはたゞうき雲の根なくしてその中空にたゞよへるが如し、相あ

つまる人々この世に其名きこえわたれる紳士、紳商、學士社會のあがれる際などならぬはなし、夜更け人定まりて静におもへば我れはむかしの我にして、家はむかしの家なるものを、そもそも何をたねとしてかうき草のうきしづみにより人のおもむけ異なる覽、たはやすきものはひとの世にして、あなどるまじきも此人の上成り、其こゑの大ひなる時は千里にひゞき、ひくきときけ隣だも猶しらざるが如し。

國民のとも春季附ろく書つるは江見水菴、ほし野天知、後藤宙外、泉鏡花および我れの五人なりき、早くより人々の目そゞぎ耳引たてゝこれこそ此年はじめの花と待たりけるなれば、世に出るよりやがて沸出るとき評論のかしましさを、さるは新聞に雑誌にいさゝか文學の縁あるは先をあらそひてかゝげざるもなし、一月の末には大かたそれも定まりぬ、あやしうこれも我がかちに歸して讀書社會の評判わるゝが如しとさへ沙汰せられぬ、評家の大斗と人ゆるすなる内田不知庵の口を極めてほめつる事よ、皮肉家の正太夫がめざまし草の初號に書きたるには道成寺に見たてゝ白拍子一葉、同宿水菴坊、天知坊、何がしくれがしと數へぬ、へつらふ物は萬歳ノゝとゝなへ、そねむ人は面を背けて我れをみることに仇の如かり。

にぎり江よりつゞきて十三夜、わかれ道、さしたる事なきをばかく取沙汰しぬれば我れはたゞ淺ましうて物だにいひがたかり、此二十四五年がほどより打たえ寝ぶりたるやうなる文界に妖艶の花を咲かしめて春風一時に來たるが如き全盛の舞臺にしかへしたるは君が一枝の力よなど筆にするものあり、口に

する者あり、いかなる人ぞやおもかけ見たしなどつてを求めて訪ひよるも多く、人してものなど送りこすも有けり、雑誌業などする人々は先をあらそひて書きくれよの頼み引もきらず、夜にまぐれて我が書つる門標ぬすみて逃ぐるもあり、雑誌社には我が書たる原稿紙一枚もとよめずとぞいふなる、そは何がしくれがしの學生こそりて貰ひにくる成りとか、閨秀小説のうれつるは前代未聞にしてはやくに三萬をうり盡し、再はんをさへ出すにいたれり、はじめ大坂へばかり七百の着荷有しに一日にしてうれ切れたれば再び五百を送りつる、それすら三日はたまたざりしよし、このほど大坂の人上野山仁一郎愛讀者の一人なりとて尋ね來つ、かの地における我がうわさ語り聞かす、我黨崇拜のものども打つどひて歡迎のもうけなすべければ此春はかの地に漫遊たまはらばや、手ぜまけれども別荘めきたるものもあり、いかでおはしませなどいざなふ、尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭および我れを加へて二枚折の銀屏一つはりませにせまほしく、うらばりは大和にしきにしてこれをば文學屏風と名づけ長く我家の重寶にせまほし、いかで原稿紙一ひら給はらばやなど切にいふ、金子御入用の事などもあらばいつにても遠慮なく申こさせ給へ、いかさまにも調達し參らす心得などいふ、ひいきの角力に羽をり投ぐる格にやとをか

正太夫のもとよりはじめて文の來たりしは一月の八日成し、われは君に縁あるものならねど我が文界の爲君につげ度こと少しあり、わが方に來給ふか我より書にて送らんか、われに癖あり我れより君を訪

ふ事を好まず、なほ我事聞かんとならばいかなる人にももらすまじきちかひの詞聞たしと也、何事ともしらねど此皮肉家がことかならずをかしからんとて返しをやる、人にはいふまじく候、つげさせ給はれかし、我れは男ならぬ身なれば御もとをば訪ふ事かたし、文おくり給はらばうれしかるべしといひ

九日の夜書たる文十日にとゞきぬ、半紙四枚がほどを重ねて原稿かきたるがごと細かに書したり、にぎり江の事、わかれ道の事、さまざまありて、今の世の評者がめくらなる事、文人のやくざなる事、これらがほめそしりにかゝはらず、直往し給へといふ事、并びに世にさまざまの取沙汰ある事、我れが何がし作家と結婚の約ありといふ事、浪六のもとへ原稿をたづさへ行給ひしときく事などありき、何がし作家とは川上君の事なるべし、君よりは想のひくき何がしとしるしぬ。

一覽の後は其狀かへし給はれ、君よりのもかへしまつるべし、世の人聞きうるさければと成けり、直に封じてかへしやる、これはめざまし草の出るより二十日も前の事成き、のちに紙上を見ればわれへ對する評言はこのふみの如く細かにはあらで、おほらかに此旨をぞ書ぬ。

正太夫はかねても聞けるあやしき男なり、今文豪の名を博して明治の文壇に有數の人なるべけれど、其しわざ、其手だてあやしき事の多くもある哉、しばらく記してのちのさまをまたんとす。

この頃世にあやしき沙汰聞え初ぬ、そは川上眉山と我れとの間に結婚の約なりたりといふうわさ成

り、岡やきといふものおびたゞしき世なれば傳へて文界の士の知らぬもなしといふ、あるものは傳へて尾崎紅葉仲立なりとさへいふめる、あるもの紅葉にかたりたるに高笑ひしてもしざる事さだまらば我れ媒しやくにはかならず立つべしといひしとか、よみうり新聞新年宴會の席にて高田早苗君は眉山が肩をうちてこの仲立は我れ承らんとたはぶれしとか、こゝにかしこに此沙汰かしましければいつしか我れにも聞えぬるを、あやしきは川上ぬし知らずがほを作り給ふ事なり、この人の有さまあやしとおもひしは過ぎし八日の夜われに寫眞給はれとてこばむをおして持行し事ありき、母君も國子もひとしいなみしを、さらばしばし給へ、男の口よりいひ出つる事つぶされんは心わるしとしひていふに、さらば五日がほどをとてかしたる其寫眞をばさながら返さず、人結婚の事をいひて君は一葉君と其やく有るよし誠にやととへば、そは迷わくの事いひふらすものかなとて打笑ひ居るよし、八日の夜のさまはほとんど物くるはしきやうに眼をいからし面を赤めて、なに故我れにはゆるし給はぬにや、我れをばさまで仇なるものとおぼし召か、此しやしん博文館より賞はゞ事はあるまじけれどあやしう立つ名の苦しければこゝに参りてかくいふを猶、君にはうとみ給ふにや、男子一たびいひ出たる事このまゝにしてえやはやむべきとて、つく息のすさまじかりし事、母君かげに聞て胸をば冷し給ひしよし、我れに妻の中立して給へや、此十五日を限りにして其返事聞度しいかてくなどせまられたる事ありしが、それこれと思ひ合せてあやしき事一つならず、文界の表面にこの頃あやしき雲氣のみゆるは何ものゝ下にひそめるならん、眉山排斥の聲やうく高う成りぬ。

正太夫いはく君はおそらく文界の内情などしり給ふまじければ瑣細の事とおぼしめさんも斗られねど、我れの考へたる處にてはなほざりならぬ大事とおもへり、よろしく君がもとをとふやくさ文人どもを追ひ拂ひ給へ、かれ等は君が爲の油蟲なり、拂ひ給はずは一日より一日と其害を増さんのみといひき。

かどを訪ふ者日一日と多し、毎日の岡野正味、天涯茫茫生など不可思議の人々來る、茫茫生はうき世に友といふ者なき人世間は目して人間の外におけりとおぼし、此人とひ來て二葉亭四迷に我れを引あはさんといふ、半日がほどをかたりき。

野々宮きく子關如來との縁やぶれて一度我れを恨めりき、しばしにしてうたがひの雲はれたれど猶我もとを男のとひよるねたましうあるまじき事にいひなす、教育社會の人々は我れを進めて著作の筆たしむるか、もしくは教育趣味のもの書てよとの忠告さへ聞えぬ、紛たり擾たり、このほどの事雲くらし。

あやしき事また沸出ぬ、府下の豪商松木何がしおのが名をかくして月毎の會計に不足なきほど我がもとに送らんと也、取次ぐは西村の釧之助、同じく小三郎協力して我が家に盡さんとぞいふなる、松木は十萬の財産ある身なるよし、さりととも名の無き金子たゞにして受けられんや、月毎いかほどを参らせんへと問はれしに答へて我が手に書き物なしたる時は我手にして食をはこぶべし、もし能はぬ月ならば助け

をもこはん、さらば老親に一日の孝をもかゝざるべければとて、一月の末二十金をもらひぬ。

身をすてつるなれば世の中の事何かはおそろしからん、松木がしむけも、正太夫が素ぶりも半としがほどにはあきらかにしらるべし、かしたしとならば金子もかりん、心づけたしとならば忠告も入るべし、我心は石にあらず、一封の書状、百金のこがねにて轉ばし得べきや。

みづの上 (二十九年二月)

雨したりの音軒ばに聞えてとまりがらすの聲かしましきにふと文机のものと夢はさめぬ、今日は二月廿日成きとゆびをるに、大かた物みなうつゝにかへりてわが名わがとしやうく明らかに成ぬ、木よる日なれば人々稽古に来るべき也、春の雪のいみじう降たるなれば道いとわるからんにさぞな侘びあへるならんなどおもひやる。

みたりける夢の中にはおもふ事こゝろのまゝにいひもしつ、おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば又もやうつせみのわれにかへりていふまじき事かたりがたき次第などさまざまぞ有る。

しばし文机に頬づえつきておもへば誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとてそはなすべき事は。

上のづみ 我に風月のおもひ有やいなやをしらず、塵の世をすて、深山にはしらんこゝろあるにもあらず、さるを厭世家とゆびさす人あり、そは何のゆるならん、はかなき草紙にすみつけて世に出せば當代の秀逸など有ふれたる言の葉をならべて明日はそしらん口の端にうやくしきほめ詞などあな侘しからずや、か

かる界まじりに身を置おきてあけくれに見みる人の一人ひとりも友ともといへるもなく、我われをしるもの空かしきをおもへば、あやしう一人ひとりこの世よに生うまれし心地こころぞする、我われは女をんななり、いかにおもへることありともそは世よに行おこふべき事ことかあらぬか。

このほどの夜よは御入おんいり下くだされ候まうらふよしの所ところ、病氣びやうきにてはやくに打うちふし失禮しつれい申上まうらふ候まうらふこと御ゆるし下くだされ度たく、御連おつれは平田ひらた様さまと誰たれ々々様成さまなりけん御わびよろしう願上ねがひあげまうらふ候まうらふ、かねておほせのうらわか草文字くさまじ小出こいでぬしより相あひとゞき候まうらふまゝの文字あひわたくし私わたしいろ／＼のわからずやを申まをたのみ参まゐり候まうらふまゝ、小出こいでぬし書かやうに困こまりてこのやうにてよきかと封中ふうちゆうのだけしたゝめ持参ぢせん致いたされ候まうらふ。

平田ひらたぬし御番地ごばんちふとわすれておもひ出いるにかたくまことに御手おて數恐かずおそ入り候まうらふへどもうらわか草くさの文字まじ御手てもとまでさし出だし候まうらふ御渡ごわたし願度ねがひたく、私わたしいろ／＼とりとまらぬ事をいひて頼たのみしかば字あの大きおほさなど小出こいでぬし分わかりかねし由よしにてこれほどしたゝめつかはされ候まうらふ、中なかにて御氣おんきに入いりしを御取願度おとりねがひたく、何れ御めもじ萬々ばんばん、まづは此事このことのみ、かしこ。

夏子

戸川さま

御もとに

このほどの夜よは御入おんいり成なりしよしを病氣びやうきにてはやくに打うちふし存ぞんじ申まをさず失禮しつれい御ゆるし下くだされ度たく、御一處成ごいちじやうなりし御おんかた／＼へよろしう御わび願上ねがひあげまうらふ候まうらふ、かねて仰あやせのうらわか草くさの文字まじ平田ひらたぬしが御もとふとわすれていかにもおもひ出いかね候まうらふまゝ御手おて數かずおそれ入いり候まうらふへど御手おんてもとまで参まゐらせ候まうらふ、御とゞけ被下度くだされたくわたくし、私わたしとりとまらぬ頼たのみやうを致いたしたれば字あの大きおほさなど小出こいでぬし分わかりかねし由よしにて……

斗はらざるに高名先生かうめいせんせいの如ごとき知ち己きを得えられ候まうらふこと、

行いかりのかけとほさかるこゝちして雲くもの庭にわにたづぞまふなる

寄よニ春雨はるあめ一懷舊いっくわいきゆう

もえ出いる小草せうさうをみても春雨はるあめのふることばかりしのばるゝかな

早春風

梅うめの花はなみにこし岡おかの霜しもどけにやすらひおれば春風はるかぜぞ吹ふ

みづの上

(二十九年五月一六月)

五月二日の夜、禿木秋骨の二子來訪、ものがたることしばしにして、今宵は君がもてなしをうけばやとて、まうで來つる也、いかなるまうけをかせさせ給ふぞや、これは大かたのにては得うけ引がたしとふたりながら笑ふ、何事ぞと問へば、戸川ぬしふところより雑誌とり出て、朗讀せんかと平田ぬしをかへりみていふ、こはめざまし草卷の四成き、一昨日の發行にてわが文藝俱樂部に出したるたけくらべの細評あるよし新聞の廣告にみけるがそれならんかと思ふにあわたしうはとふ事もせず打ふみ居るに、いかでまうけさせ給へ、この巻よけふ大學の講堂に上田敏氏の持來てこれみよと押開きさしよせられぬ、何ぞと手に取りみれば、これ見給へかくししかくの評、鷗外、露伴の手に成て、當時の妙作これにとゞめをさしぬ、うれしきは胸にみちて物いはんひまもなく、これが朗讀大學の講堂にて高らかにはじめぬ、さても猶うれしきのやる方なきに學校を出るより早くはせて發兌の書林に走り、一冊あがなふより早く禿木が下宿にまろび入り君々これ見たまへと投つけしに、取りて一目みるよりはやく平田は顔をも得あげず涙にかきくれぬ、さらばとく見せて此よろこびをものべ、ねたみをも聞えてんとて斯く二人相伴ひてはまうで來つる也、いかでよみ給ひてよ、我れやよまん、平田やと、詞せはしく喜びおもてかへられき。

上のつみ

てにあふれていふ、今文だんの神よといふ鷗外が言葉としてわれはたとへ世の人に、一葉崇拜のあざけりを受けんまでも此人にまことの詩人といふ名を送る事を惜しまざるべしといひ、作中の文字五六字づゝ今の世の評家作家に技倆上達の靈符として吞ませたきものといへるあたり、我々文士の身として一度うけなば死すとも憾なかるまじき事ぞや、君が喜びいか斗ぞとうらやまる、二人はたゞ狂せるやうに喜びてかへられき。

此評よいたる所の新聞雑誌にかしましうもてさわがれぬ、日本新聞などにはたゞ一行よみては驚き歎じ二行よみては打うめきぬとか有けるの由國子のよそより聞來ていとあさましきまで立ぬる評かなと喜びながら悲しがる、そは權花の一日の榮えを歎けばなるべし、世の中をしなべて文學にはしりぬる頃とて假初の一文一章遠國他郷までもひゞきわたり聞えゆきて、立つ名さま、さてはよからぬ取沙汰もやうくに増り來たりぬ、此たけくらべ書つると同じ號に我れと川上ぬしとの間のことあやしげに書きなしある雜報有き、千葉あたりより來たりたる投書なりとか、これをばやがてよき材にして人ねたみもし憎くみもす、ことなる事なき身どちにはさして何事のなげかはしさもおぼえねど、そもそものはじめよりうき世にけがれの名を取らじ、世の人なみにはあるまじのおもひなりしを、かくよからぬ評など立出くるやましき事ならねど、我が不徳のする所かともなげかしう思はれき。

我れを訪ふ人十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜びても珍らしさに集ふ成けり、さればこそことなる事なき反古紙作り出ても今清少よむらさきよとはやし立る誠は心なしのいかなる底意ありてと

一もしらず、我れをたゞ女子と斗見るよりのすさびされば其評のとり所なきこと、疵あれども見えずよき所ありともいひ顯すことなく、たゞ一葉はうまし、上手なり、餘の女どもは更也、男も大かたはかうべを下ぐべきの技倆なり、たゞうまし、上手なりといふ斗その外にはいふ詞なきか、いふべき疵を見出さぬか、いとあやしき事ども也、

二十四日 正太夫はじめて我家を訪ふ、ものがたる事多かり。

二十五日 田中みの子を飯田町にとひ、歸路半井君を尋ね、原稿製造中なるよしにて三崎町のかたにをられつれば逢はずして歸る。

二十七日 夕より平田、戸川の二人來る、物がたり多し。

二十八日 午前のうち田邊たつ子ぬしを番町にとふ、例によつて例の如き物がたりあり、十二時過るころ歸宅、今日は木ようなれば野々宮君來る、安井、木村の兩君は地久節の會ありて得も參られず、安井君宅より昇給いはひの赤の飯おくられき。

新文だんの鳥海嵩香遊びに來たりしにはあらざめれど長くかたる、戸川の殘花われに嫁入の取もちすとて來る、先きは何がしの博士なりといひくる、正太夫門まで來たりて人氣のあるに又こそとて歸る。

二十九日 横山源之助來訪、はなす事長し、うちに正太夫來る、ひそかに通して坐敷の次の間に誘ふ、源之助はやがて歸る。

わが近作われからの評めざまし草三人冗語の間に大いに見解を異にせる由、これにつきては正太夫の責任を明らかに一論文をしたゝめて世に出さんを目論なれども、わがいふ處尤なるか露伴の思ふ處當れるか一應君が所存を聞いてしかして我れは一文を草さんと思ふ也、よつて昨日も二度まで御宅を訪ひ參らせしなれど御來客と見えしかば一度は歸りぬ、二度目も同じ事にていと甲斐なかりし、まづ其事とはばやとて我れからの作意につきてとひをおこす、

一いなるの社前に奥方物おもひを生ずる處あり、あれは親の世よりの事につきて明くれ物をおもひ居り、我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事ならずやとの念かしこにいたらぬ前より有しものならんか。

一は、あの奥がたの性としてさる事常日頃おもひ居るべきにあらず、眞に偶然の出來事として描かれたる物なるべしといふ二つなり。

この二議のうち作者が當時の心は如何成しか、それによりて我が論は成立すべきにこそと正太夫いふ、誠にこれは偶然の出來事なり、しかれども常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて心細き感常々有しに相違なかるべく、さて此事は偶然におこりたるなるべしといふ、正太夫そは困りし事かなさては二論の中間に君は居給ふ成けり、前の説は露伴のとく處、あとなるは我が論じつる也、

上のうみ

こは難義なる事よとほゝるむ。  
第二問は町子と書生との間に實事の有しやいなやなり、一方の論者はいはく、跡なき風も騒ぐ世にし  
のぶが原の蟲の聲、つゆほどの事あらはれて奥様いとうき身に成りぬ、といふ詞あれば彼れは正しく



實事ありたる也といふ、されどかた／＼の論者の見る處にては、こは作者がこと更に讀者をまよはさん爲にたくみの詞をもて遊びしのみ、實事はいまだなかりしものといはざるべからず、といふ争ひなり、今少し行過たる説なれど、此處二月の猶豫をあたへなば此不義かならず成立すべきなりともいはるべくや、片つかたの實事ありしといふ論者の行過ぎたる證には、實事有しに相違なきも作者は女なれば此間のこと憚りて態と曖昧にせられたるものなるべしとの説もあり、君が思ひし處はいかなるにかと問はる、誠にしのぶが原の蟲の音に心づき給ひしこそ我が心にてはあれといふに、さては又露伴に我れは負けにきと笑ふ、實事のありしといふ方天下の輿論ともみなすべきさまにて、無實といふは天下我れ一人のみの形なり、これも悉く實なしといふにはあらず、いま二月の猶豫をあたへよしからばまことに不義の成立をみるべしといふの也、此度のめざましには近松が鐘の權三の例を引置きつれど、あれも古來實否の處たしかならずあるものはなしといひ、あるものはありといひ、此論容易に詮じつめがたきなり、なれども我れをもつていはしむれば、權三おさる家を出てより二月の間を放浪して、さておさるは良人の手にかゝりてしなばやと願ひ居つるをみるにも、此二月間には必らず不義の成立したりしものとみとむる也、この處を明らかにかゝざる處、作者のずるき手段にて誠は作の巧妙なる處ともいふべく、何方より見るもしか見ゆる又よかるべし、かゝる事は作者に問ふ事をせずして我れの見をもつて批評を試むること誠の批評とはいふべきものなれど、我れいまだ力たらずして眼識さやかならぬを憂ひ、かく作家のもとにとふ事とは成ぬ、君としての答へには何方にてもよしとの給ふこそ當れるにはあらめ、な

どかたる。

君がわれからの評、わがめざましを先として明治評論、青年文、國民の友、太陽、帝國文學などいづれも書出る事となるべし、我れは近くにかの奥方一身を論據として一文を是非公にすべき心なり、さてこれより君が初作よりの物こと／＼くよみ見ばやと思ふ也、さて作者と作との關係といふもの説かばやと思ふ、あながち我れが大發明者の眞似をするにもあらねどとて笑はる。

雨いよ／＼降しきりて日やう／＼暮んとす、わる口の正太夫ぬしに參らする物は無けれど、又笑はれ材料に柳町のすもじにてもさし上ばやと笑へば、いな／＼何も給はる事はすまじゆふべさる處にて少し色氣のなきわづらひをしつればとて辭さるゝにさらば參らすまじとて又はなしに移る、一昨日の夜は十一時頃より露伴と君が作を論じて四時に及びて猶其論盡きがたかりし、いつも君の作につきては争論此間に起る也などかたたる、君は此頃博文館の爲に書簡文とかや文反古のやうのもの作り出給ひしよしそれは誠かとはる、百科全書の十二編として書簡文かきつるは誠なれど、文反古などいひて小説めかしきものには非ずといへば、されども君の書き給へるには相違なきなるべし、さらば面白き事、直ちに歸りて拜見すべし、乙羽庵のいへるに通俗書簡文と題はおきたれど終りのかたは純然たる小説なりと語りたれど、何の彼の男が批評眼とさのみ心にとゞめざりしなれども、君のものし給へるとならば必ず拜見すべきものなり、いと面白かるべしとて笑はるゝに、いな、見給ふは嫌なりゆるし給へと詫るを、をかしげに見やりて、さもあらばあれもはや印刷に附して世に出し給へるなれば詮なし、書店にて

賣居る以上は致しかたなかるべしとて又笑ふ。

正太夫としては二十九、瘦せ姿の面やうすご味を帯びて、唯口もとにいひ難き愛敬あり、綿銘仙の縞がらこまかき袷せに木綿がすりの羽織は着たれどうらは定めし甲斐絹なるべくや、聲びくなれどすみとほれるやうの細くすゞしきにて、事理明白にもがたるか、つて浪六がいひつることく、かれは毒筆のみならず誠に毒心を包蔵せるのなりといひしは實に當れる詞なるべし、世の人さのみはしらざるべけれど、花井お梅が事につきて何がしかやいへる人より五百金をいすり取りたるは此人の手腕なりとか、其眼の光りの異様なると、いふことくの嘲罵に似たる、優しき口もとより出ることながら人によりては恐ろしくも思はれぬべき事也、われに癖あり君がもとをとふ事を好まずと書したる一文を送られしは此一月の事成き、斯道熱心の餘りわれを當代の作家中ものがたるにたるものと思ひて諸事を打すて訪ひ寄る義ならば何かこと更に人目をしのびてかくれたるやうの振舞あるべきや、めざまし草のことは誠なるべし、露伴との論も偽りにはあらざらめど猶このほかにひそめる事件のなからずやは、思ひてこゝにいたれば世はやう／＼おもしろくも成にける哉、この男かたきに取りてもいとおもしろし、みかたにつきなば猶さらにをかしかるべく、眉山、禿木が氣骨なきにくらべて一段の上ぞとは見えぬ。

逢へるはたゞの二度なれど、親しみは千年の馴染にも似たり、當時の批評壇をのしり、新學士もの知らずを笑ひ、江戸趣味の滅亡をうらみ、其身の面白からぬ事をいひ、かたる事四時間にもわたりぬ、暮ぬればとて歸る、車はかどに待たせ置つる也。

三十一日 榊原家いさ子の朋輩にて中澤ぬひ子といふ人入門、東脩五十錢送らる、これ等とり集めて菊地ぬしがもとへ此月よりかへし初むべき金子持參母君立出らる。

六月一日 平田禿木めざまし草持參、わが評見よとてかし興へらる、正太夫の我がもとを訪ひ寄し事などさも思ひよらぬ事なれば知らず顔に語り居るいとをかし。評は此人の作としていといたく劣りたるもの也、たけくらべに及ばずにごり江に及ばず、わかれ道にも十三夜にもしかぬ作なり、此作者の作やうやくみだれんとする傾きありと正太夫のいひしは別れ道の時成しが、その詞をして誠たらしむるはいかにも作者の爲かなしむべき事よとかけり、をかしきは、ひるきと名のりて辯護の勞をとる人附添へる事なり、女人なればと今まではひかへつれど用字用語今少し心つけられよと一論客のいへるに對し、こは聞ずてならぬ事也、わが一葉は女なれども身錢を遣はて高まんの詞をならぶる男どもが首位は引ぬきすつる力あるものなり、悪き事あらばいかにいひ給へ、御遠慮御無用女あしらは嬉しからずとだけり立つ人あり、六頁にわたりてその論何方ともつかずに終りぬ。

いとかしらの痛き日成しかばねぶたげに物いひ居るいかゞ憂からざらん、平田は此本さしおきたるままかへる。

二日 早朝前田曙山君來る、春陽堂の使ひになり、著作のあら筋出來たらば畫様の注文ありたしとのたのみなり、今しばしたゞばといひてかへす。

先月のはじめ成し春陽堂みせのものをもて我が作是非にといひおこし、引つゞきわが店のものゝみ著

作し給はるやうの契約給はらばいとかたじけなかるべし、左あらずとも是非にといひて、金子などは前金にいか斗も奉るべし、御用候はゞ端書一本つかはされたし、さすればたゞちに御仰せだけの金持参すべしといひき、さもあらばあれこは一時の虚名を書肆の利としておのれの欲をみたさん爲のみ、すでに浪六の例もあり、多くの作家のいたづらに苦しみて心のまゝならぬものなど世に出すは此一時の榮えにおごりつきて債をこゝに負へばなるべし、我が身はかまへて其事なすまじとおもふに、一編の作趣向つばらに出来ざらんほどは畫樣のこと金子のこと更にいひやらじとなり、家は中々に貧迫り來てやる方のなければ綿のいりたるもの拾などはみながら伊せやがもとにやりて、からく一二枚の夏物したて出るほどなれども、やがてのくるしみをうけまじとて、母も國子も心をひとつに過す、いとやるかたなし。

午後三木竹二君來訪、醫學士森篤次郎とある名刺もて來しかばいかなる人かとおもひけり、君は森鷗外君が令弟にて小金井きみ子ぬしが兄にておはす、いと口がるにもいひつゞけて重りかならぬ人にてもあるかな、來訪の趣意はめざまし草社中の總代として我れに連合せられん事をといふ迎ひの使ひに來たりしなり。

190 今まで三人冗語といひて鵲外、露伴、正太夫の三人にて新作の評なし居たりしなれど、更に君を加へて四つ手あみといふ名を付しつ各々名を署して評論さかんにせばやといふ願ひなり、切に入會給はれよといふ。

君がたけくらべには一同たゞ驚歎して口開くもの候はず、露伴などは生れて今日まで我れにはいまだ斯斗の作のなきを恨むといひつ、されば過る日の三人冗語にて詞を極めてほめたゞへしかば早稻田文學などには冷評を興へられぬ、露伴がいへるやうこの作中の文字五六字づゝ今のよの評家作家に技倆上達の靈符として吞ませたきものなりと書きしに、かれはませかへして黒やきにしてふりかけては如何などいひぬ、とまれかくまれ心し給へ、こゝの學士、かしの博士ども君が事といへば鬚おもてのしまりをうしなひて、かゝる文書給ひしかばかゝる人なめり、いないな此詞をもてみれば人がらは斯くこそ有べけれなど、一字一句に解をいれていひさわぎ候ぞなどかたる。

正太夫の参りしよしを聞き候ひぬ、これには假初にも心ゆるし給ふな、われ／＼兄弟、幸田露伴などもうわべにはいとよき友のやうに交はり候へど猶隔ておきつゝものをもまふすなれ、いかなること申こんともいひがたきにかまへて／＼たばかられ給ふなといふ、合評會の日取りきまらば申上候はんかならず参らせ給へといひて、たゞ一人のみこみつゝかへる。

夜に入てより正太夫來訪、けふ三木や参りつる、そのうわささる所にて聞しかば、さして承らんの用もなき折ながら、一應申度ことありて参りつる也といふ。

191 上のつみ 君がもとをとひ参らせしといふこと我れは誰れにも語らざりき、たゞ森に斗もらしつればやがて篤次郎にかたりつるなめり、我れに紹介狀かきてくれといふたのみありけれども、我れとてもたれが紹介といふ事もなく出つるなれば、それには及び候はじとて書かざりしが、今日は定めし参上しつるなるべし

と察しぬ、名刺持ちてや参りつる、はなしはいかなる事成しかと問ふ、みな様がたの打寄り御評遊ばさん折我れにも出て御はなし承れよといふ仰せ成しといへば、それは怪しき事にもあるかな、その相談にてはなかりしものをとかたぶく、して要領を得て歸り候ひしやいかゞといふ。

いかゞありけん私にたゞありがたき由を申ぬ、そのほかにはとて打互むに、さもありけんさあるべし、あの男の使ひなればとてひやゝかに打互む。

我れ／＼が評するを聞きに来給へと申せしこそをかしけれ、罪なき申條にもあるかな、我がうちうちの話しを聞きには君に歌少し給はれかし雑誌にのせなければと頼み参らするのなりといひき、しかれば我は其事甚だ心得ず、われ／＼は一葉君を歌人としていまだみしれるにあらず、唯作家としての人をしれるなるに、殊更の歌を取出さんいとあやしかるべし、同じことならば始より君が作を給はれ、小説是非といひたる方やさしかるべし、うたは三十一文字の責いとかるく出し給ふに世上よりの沙汰もくるしからねば、まづ此事はうなづき給ふべし、この軽らかなるより取入りてやがて作を處望せんといふころそも／＼人をはかるに似て文士のいさぎよしとせざる處、たゞ打明人にはしかずとて、我れは今宵かくふりはへて参れる也、かゝるをやがて人にくしみの種にはするなるべし、いととげ多き我れかなと淋しく打互む、我れ等の期する處は君が大成の折をなり、みづからいだかるゝ寶珠をすてゝいたづらの世論に心を迷はし、はかなき理論沙汰などにかたぶき給はゞ、あたらしき人を種なしにもなすべきわざなればそのさかひを脱しさせ参らせたしといふこそ我れ／＼の志しにてはあれ、されば殊更に合評會

への出席あらんあらずにもかゝはらず、鴨外露伴の御もとを訪ひよりてもしかるべきわざなり、何かはこと／＼敷招き参らするまでもなしとていと冷かなるさまなり。

ものがたりはいつしかめざまし草の事をはなれつ、正太夫が身の上のことかにかくとかたる、我れは今やがてこの文學沙汰立はなれていとあやしき境界にならばやと思ふなり、かゝる馬鹿野郎どもが集合の場處になかくあらんは胸のわるければと聲たかくいひて、あな本性の出けるよと佗しげに笑ふ。

御もとなどに参りて馬鹿野郎呼はりするにてはなかりしを、おさへ難う成て、つひ本性の顯はれぬ、驚きやし給ふとぬすむやうに打ながめて、いと聲ひくにいふ。

何かは承るは今はじめでなれど、君が馬鹿野郎の御うわさはやくより傳はりて世上に君が名しるほどの人承らぬはなかるべし、御遠慮なくの給へかしこれを初音にと笑へば、さらば御合點よなとて快く笑ふ。

吉原に入りてかし座敷の風呂番になりとも落つかばやと思ふなり、さらば此上の落處なきひくき處なればやるかたなき憤りももらすにかたく、誰れを相手に何をかいはん、こゝもうき世とあきはてなん時は唯死といふ一物のこれるのみ、其ほかに行く處しなれば中々に心安かるべうや、うき世に人の階級といふものありて上の品の人も下の位にたゞず身も同じくくる普通の苦あり、我れはこゝに圖式をしめさんにこれをかりに縦の苦といふべし、このたての苦はうき世といふ詞のよりて起る處にして上はかしこき御一人より下萬民のたれも受けぬはあらざるべきたゞ一通りのものにてあり、次に横の苦と